

鉢裏水、滴皆な温ふと。若し恁麼に會せば、且つ雲門、端的爲人の處を見ず。頰に云く。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢや。「還つて定當得ず麼」と、サー此の「鉢裏飯桶裏水」を確かに肯ふたかドウぢや。「若し定當得せば、雲門の鼻孔、諸人の手裏に在らん。若し定當不得ならば、諸人の鼻孔、雲門の手裏に在らん」ぢや。「雲門、斬釘截鐵の句有り」と、コノ「鉢裏飯」の句で、凡聖迷悟切り盡すぢや。「此の一句の中に三句を具す」と、コノ七字は削るが好い。只だ狼毒ぢやものを、コノ盛り方がいるものか。「有る底は問着すれば便ち道ふ、鉢裏飯、粒粒皆な圓に、桶裏水、滴滴皆な滴ふと。若し恁麼に會せば、且つ雲門、端的爲人の處を見ず。頰に云く」と、コンナことぢや、彌勒佛下生に到つても、雲門爲人の端的是見られぬぞ。サー頰を看よ。

鉢裏飯桶裏水 ○露也○撒沙撒土作什麼○漱口三年始得 多口阿師難

下嘴 ○縮却舌頭○誡法者懼○爲什麼却恁麼舉 北斗南星位不殊 ○噉

東作西作什麼○坐立儼然○長者長法身短者短法身 白浪滔天平地起 ○脚

下深數丈○賓主互換○驀然在爾頭上○爾又作麼生打 擬不擬 ○蒼天蒼天○咄

止不止 ○說什麼○更添怨苦 箇箇無裨長者子 ○郎當不少○傍觀者哂

【和訓】 鉢裏飯桶裏水。○露也。○沙を撒し土を撒して什麼か作さん。○口を漱ぐこと三年にして始めて得ん。多口の阿師難を下し難し。○舌頭を縮却す。○法を誡る者は懼る。○什麼と爲てか却つて恁麼に舉する。○北斗南星位殊ならず。○東を喚んで西と作して什麼か作さん。○坐立儼然。○長者は長法身、短者は短法身。○白浪滔天平地に起る。○脚下深きこと數丈。○賓主互換。○驀然として爾が頭上に在り。○爾又た作麼生か打たん。○擬不擬。○蒼天蒼天。○咄。○止不止。○什麼をか説かん。○更に怨苦を添ふ。○箇箇無裨の長者子。○郎當少なからず。○傍觀の者哂ふ。

【提唱】

頰 コレから雪竇の頰ぢや。

「鉢裏飯桶裏水」と、コリヤ雲門の句を擧げたのぢやが、真似ぢやないぞ。コ、に斯う男女寄り合ふたが、皆な塵塵三昧ぢや。コ、が合點が行くと、雲門の腹と雪竇の腹と、ピッタリ合ふた處が知れるぢや。

「多口の阿師嘴を下し難し」と、サー此の「鉢裏飯桶裏水」は、通身是れ口なる者でも、グツとも云ひ得まいぞ。例令富樓那の辯でも、張儀の口でも、褒めることも毀ることもなるまじ。

「北斗南星位殊ならず」と、師學互換の處ぢや。貴に逢ふては即ち賤、賤に逢ふては即ち貴。變通

して人意の表に出づぢや。斗斗斗の南北、車車車の大小か。北には富士、南には三保の松原、いつも變らぬ。

「白浪滔天平地に起る」と、逆水毒流が「鉢裏飯桶裏水」ぞ。一轉すりや、北斗南星位殊ならざる中に、白浪滔天平地に起りサ、四溟大海を押し流すことがあるぞ。

「擬不擬」と、言詮不及の「鉢裏飯桶裏水」を捉へてからに、當てつ比べつ、比べつ當てつした處が、ソレで行けるものか。遠くして遠しぢや。

「止不止」と、儘にも仕得ずサ、學問もするな、只だ御座れと吐かすぢや。

「箇箇無棍の長者子」と、本來法財自在な長者の子ぢやが、擬せんとして擬せず、止らんとして止らず、いろ／＼と藻掻くものぢやから、家業を忘却して貧乏を招き、終に門前の客作兒となつて、棍もかゝぬ體裁、笑止千萬ぢや。コノ耻知らず奴。

「露也」云門の端的を丸る出しにしたナ。コレを目前分明と見たらばツカもない。毒氣満面ぢや。「沙を撒し土を撒して什麼か作さん」、イヤ／＼撒せねばならぬ。「口を漱ぐこと三年にして始めて得ん」、エーそんなことは、重ねては必らず丸る出しになさるな。口も穢れた、毒焔ぢやからサ。

「鉢裏飯桶裏水」——「露也」云門の端的を丸る出しにしたナ。コレを目前分明と見たらばツカもない。毒氣満面ぢや。「沙を撒し土を撒して什麼か作さん」、イヤ／＼撒せねばならぬ。「口を漱ぐこと三年にして始めて得ん」、エーそんなことは、重ねては必らず丸る出しになさるな。口も穢れた、毒焔ぢやからサ。

「多口阿師難下背」——「舌頭を縮却す」云はう様もない、實にハヤ、背を下し難い處ぢや。黙つて居るより外致し方がない。「法を識る者は懼る」、雪寶も法を識ればこそ、背を下し難いと云ふたぞ。「什麼と爲てか却つて慙慙に擧する」、言詮不及ならば、ソノ方は何故取り出したかサ。

「北斗南星位不殊」——「東を喚んで西と作して什麼か作さん」、東は東で置け、西は西で置け。ソレを如何するぞ。斗星、キヨロリとして、ソノ位に居るものをサ。「坐立儼然」、柱は堅に敷居は横に、コレ此の通りキラリとして居るものを、餘り叮嚀過ぎる。「長者は長法身、短者は短法身」、在家は在家、出家は出家、男は男、女は女ぢや。

「白浪滔天平地起」——「脚下深きこと數丈」、汝等が脚下はドウぢや、白浪が立つぢやないか。「寶主互換」、コノ句は福本にはない。「驀然として儼が頭上に在り」、白浪は脚下に在るかと思へば、思ひ掛けなく頭のテッペンから打ち掛けた。「儼又た作塵生か打たん」、脚下にもあれば頭上にもある、諸人は如何サクバイするか。「打たん」とは消すと云ふ意ぢや。

「擬不擬」——「蒼天蒼天」、「咄」、ア、苦々しい。咄ッ。

「止不止」——「什麼をか説かん」、ナニ馬鹿を云ふ。「更に怨苦を添ふ」、ア、苦々しい。

「箇箇無棍長者子」——「即當少なからず」、シクジリ者め。「傍觀の者晒ふ」、傍觀の眼ある者は、可笑しいやら、氣の毒やらサ。

雪竇前面頌雲門對一說話道對一說太孤絕無孔鐵鎚重下楔後面又頌馬祖離四句絕百非話道藏頭白海頭黑明眼衲僧會不得若於此公案透得便見這箇頌雪竇當頭便道鉢裏飯桶裏水言中有響句裏呈機多口阿師難下鴛隨後便與爾下注脚也爾若向這裏要求玄妙道理計較轉難下鴛雪竇只到這裏也得他愛恁麼頭上先把定恐衆中有具眼者觀破也到後面須放過一着俯爲初機打開頌出教人見北斗依舊在北南星依舊只在南所以道北斗南星位不殊白浪滔天平地起忽然平地上起波瀾又作麼生若向事上觀則易若向意根下尋卒摸索不着這箇如鐵橛子相似擺撥不得插嘴不得爾若擬議欲會而不會止而不止亂呈懷袋正是箇箇無礙長者子寒山詩道六極常嬰苦九維徒自論有才遺草澤無勢閉蓬門日上巖猶暗煙消谷尚昏其中長者子箇箇總無礙

佛果園悟禪師碧巖集卷第五終

【和訓】雪竇、前面に雲門對一説の話を頌して道く、對一説太だ孤絶、無孔の鐵鎚重ねて楔を下すと。後面に又た、馬祖の四句を離れ百非を絶する話を頌して道く、藏頭白海頭黑、明眼の衲僧會不得と。若し此の公案に於て透得せば、便ち這箇の頌を見ん。雪竇、當頭に便ち道ふ、鉢裏飯桶裏水と。言中に響有り、句裏に機を呈す。多口の阿師鴛を下し難しと。後に隨つて便ち爾

が與めに注脚を下す。爾若し這裏に向つて、玄妙の道理を求めんと要して計較せば、轉た鴛を下し難からん。雪竇只だ這裏に到つて也た得たり。他、恁麼に頭上に先づ把定することを要す。衆中に具眼の者有つて、觀破せんことを恐れて、也た後面に到つて、須らく一着を放過して、俯して初機の爲めに、打開頌出して、人をして見せしむべし。北斗は舊に依つて北に在り、南星は舊に依つて只だ南に在り。所以に道ふ、北斗南星位殊らず、白浪滔天平地に起ると。忽然として平地上に波瀾を起さば又た作麼生。若し事上に向つて觀ば易く、若し意根下に向つて尋ねば、卒に摸索不着ならん。這箇、鐵橛子の如くに相ひ似たり。擺撥すること得じ、嘴を挿むこと得じ。爾若し擬議して會せんと欲せども會せず、止まんとして止まず、亂りに鉢袋を呈せば、方にはれ箇箇無礙の長者子。寒山の詩に道く、六極常に苦に嬰る、九維徒に自ら論ず。才有つて草澤に遺られ、勢無くして蓬門を閉づ。日上つて巖猶ほ暗く、煙消して谷尚ほ昏し。其の中の長者子、箇箇總に無礙しと。

佛果園悟禪師碧巖集、卷の第五終り。

【提唱】コレから園悟の評ちや。雪竇、前面に雲門對一説の話を頌して道く、對一説太だ孤絶、無孔の鐵鎚重ねて楔を下すと。後面に又た、馬祖の四句を離れ百非を絶する話を頌して道く、藏頭白海頭黑、明眼の衲僧會不得と、コレは第十四則の頌と、第七十三則の頌とを云ふたものぢや。若し此の公案に於て透得せば、便ち這箇の頌を見ん」と、コノ二つの頌が手に入らうぞならば、コノ「塵塵三昧」の頌は何んでもないぞ。雪竇、當頭に便ち道ふ、鉢裏飯桶裏水と。言中に響有り」と、最初のコノ句は、萬仞の峻崖を押し立つる家風ぞ。コレも只是云はぬ、言中に響有りぢやが、底音が悪いぞ。「句裏に機を呈す」と、ドンナ機か、諸人見て取るが好い。「多口の阿師鴛を下し難し」と。後

に随つて便ち爾が與めに注脚を下す」と、サ一注脚は何處に下すぞ。爾若し這裏に向つて、玄妙の道理を求めんと要して計較せば、轉た背を下し難からん」と、若しコノ「鉢裏飯桶裏水」に向つて計較せば、ナンとも云ひやうはないぞ。雪竇只だ這裏に到つて也た得たり。他、恁麼に」と、「只這裏」已下の十字は好くない、削るが好い。「頭上に先づ把定することを愛す」と、雪竇はコノ通り、素天邊から嶮岨の關所を押し立てた。「衆中に具眼の者有つて、覷破せんことを恐れて」と、ナンのオツカナイことがあるものか。若し初めより放行せば、具眼者は覷破せんぞ。コノ九字は未審しい、考へものぢや。「也た後面に到つて、須らく一着を放過して、俯して初機の爲めに、打開頌出して、人をして見せしむべし」と、「須らく一着を放過して、俯して初機の爲めに」と云ふコノ九字も不可ぬ。コレは下視の義ぢや。「北斗は舊に依つて北に在り、南星は舊に依つて只だ南に在り」と、コノ十三字も好くないから削る方が好い。「所以に道ふ、北斗南星位殊らず、白浪滔天平地に起ると、北斗も南星も空へ上るやうが同じことぢや。「白浪滔天」と、コリヤ「塵塵三昧」の妙用ぢや。「忽然として平地上に波瀾を起さば又た作孽生」と、「鉢裏飯桶裏水」、是れ何んの道理ぞと云へば、衲僧も浮きぬ沈みぬぢや。塵塵三昧の妙用、何んと受用せんぞ。若し事上に向つて覷ば易く、若し意根下に向つて尋ねば、卒に摸索不着ならん」と、參學の者はサ、コノ波瀾の上で、直に「塵塵三昧」を見て取るぢや。意根下とは教者の見やうで、事上は且らく、禪者の參學を云ふぢや。譬へば火は即ち熱

しと云ふとを知るが如きは是れ理ぢや。意根下に向つて尋ぬるぢや。直に火に觸れる端的、是れ事上に向つて覷るぢや。「這箇、鐵橛子の如くに相ひ似たり。擺撥すること得じ、嘴を挿むこと得じ」と、コノ三昧底は、動かされるものぢやない。サ一本來具足の三昧ぢやから、顛返しがならぬ。コノ「擺撥」と云ふには、いろ／＼の意がある。開くとも、動かすとも、押し退くとも、打つとも云ふぢや。「爾若し擬議して、會せんと欲せども會せず、止まんとして止まず、亂りに懷袋を呈せば、正に是れ箇箇無礙の長者子」と、今時の盲目共ならばサ、工夫相續せず、妄想を一杯に詰め込んだ腐れ袋を持ち出さう。コリヤ實にハヤ、參禪のない貧乏者ぢや。禪は骨折りさへすれば、誰でも知ることが出来るものを、ツ、ナンぢやから貧乏者になるぢや。「寒山の詩に道く、六極常に苦に嬰る」と、コリヤ上下四維の六を六塵に比したぢや。六根六識、之に随ふて苦むぢや。「九維徒に自ら論ず」と、八方、中央天理を、九識或は九界に比した。コレがサ、自らは是非を論ずる、無駄なとぢや。「才有つて草澤に遺られ」と、本來智徳の正因ありながらサ、諸相非相の妄想の穴に陥り、うろたへるぢや。「勢無くして蓬門を閉づ」と、コリヤ善も可厭、惡も可厭々々と、修得の道力も向上の力用もない小果の菩薩ぢや。「日上つて巖猶ほ暗く」と、眞如の日輪は照り輝けども、知見が明瞭ぢやないから、跛鼈盲龜は空理の穴へ入つて、お日様が拜めぬ。「煙消して谷尙ほ昏し」と、所知細惑は煙の消ゆる如きも、自分手前と聲聞の窠窟に陥ち籠るぢや。「其の中の長者子」と、本來珍御服の長者の

子、ソナタ衆が佛にも祖にも劣らぬ長者子ぢやけれどもサ、根性が汚さに、貧乏して衆生となつた。ソレから地獄へ落るぞ。「箇箇總に視無し」と、貧窮を慚愧する處もない。サー斯様な哀れな者に成つたは誰れの過ぞ。精出さぬからぢや、見性して見よ、皆な佛ぢや、皆な長者の子ぢや、元來貧乏人ぢやない。雪竇の頌は、句を借つて意を借らぬ處があるぞ。

「佛果圓悟禪師碧巖集卷の第五、終り」と、コレデ第五卷は終つた。

註釋 〔六塵〕 六境なり。〔含元殿〕 含元殿は長安城に在り。唐の龍朔三年、景宗新に含元殿を建つと。〔斗斗斗の南北、車車の大小〕 そこに現はれたる有りの儘を云ふ。〔客作兒〕 法華經信解品にあり。〔所知細惑〕 妄想のこと。

碧巖集卷第五終

佛果圓悟禪師碧巖集卷第六

秣陵遠庵吳自弘 校

天界比丘 性湛 閱

第五十一則 雪峯是什麼

〔雪峯是什麼〕

垂示云纔有是非紛然失心不落階級又無摸索且道放行即是把住即是到這裏若有一絲毫解路猶滯言詮尙拘機境盡是依草附木直饒便到獨脫處未免萬里望鄉關還搆得麼若未搆得且只理會箇現成公案試舉看

【和訓】垂示に云く、纒かには非有れば、紛然として心を失す。階級に落ちずんば、又た摸索すること無し。且らく道へ、放行するが即ち是か、把住するが即ち是か。這裏に到つて、若し一絲毫の解路有つて、猶ほ言詮に滞り、尙ほ機境に拘らば、盡く是れ依草附木、直饒ひ便ち獨脱の處に到るも、未だ免れず、萬里に鄉關を望むことを、還つて構得す麼。若し未だ構得せずんば、且らく只だ箇の現成公案を理會せよ。試に舉す、看よ。

【提唱】 コレから第六の卷ぢや。第五十一則は、「雪峯是什麼」と云ふ。コノ則は、巖頭初て最後の巴尾を顯す。此の因縁、最も參詳す可きの大事なることを明すぢや。白隱が正受老人の處に於て、コノ則に依つて筋骨を抜かれ、見る毎に、寒毛卓豎したと云ふ。白隱凡そ正受老人の處に於て、三回筋骨を抜かるゝの刻苦が有る。「南泉迂化」の語に依つて、根本の習氣を抜き、コノ因縁(本則也)に於て、最後の障を滅し、「陳操登樓」の則を受くるに至つて精鍊し、難透語訛の大事、一時に底を盡し了つたと。

「垂示に云く、纒には非有れば、紛然として心を失す」と、コリヤ世間の是非ではないぞ。「清淨の行者涅槃に入らず、破戒の比丘地獄に墮せず」と云ふやうな則を溶せかけると、ソラ直に、「行者は是、比丘は非」などと、紛然として心を失すぢや。實にハヤ難透の語に筋骨を抜くと、初めてコノ纒かには非有れば、紛然として心を失する場を知らうぞ。「階級に落ちずんば、又た摸索すること無し」と、無位の真人、階級に落ちずと悟つて居るは、獨覺聲聞ぢや。佛界魔界を透過してこそ好け

れぢや。サー左様あらうぞならば、佛祖と雖も寄り付くことはならぬ。本來清淨の處には、階級の沙汰はないぞ。且らく道へ、放行するが即ち是か、把住するが即ち是か」と、放行でも把住でも寄つても付かぬ。「這裏に到つて、若し一絲毫の解路有つて、猶ほ言詮に滞り、尙ほ機境に拘らば、盡く是れ依草附木」と、サーこゝで、ア、だのカウだのと、言句や機境に拘つたら、實にハヤ、グウダラ坊ぢや。「直饒ひ便ち獨脱の處に到るも、未だ免れず、萬里に鄉關を望むことを」と、上諸佛なく下衆生なく、乾坤只だ一人の處に到つても、佛祖の廣庭へは未だ遙々、遠くして遠しぢや。「還つて構得す麼」と、サー飲み喰ふたかドウぢや。「未だ構得せずんば、且らく只だ箇の現成公案を理會せよ」と、若し呑み込めなかつたらばサ、コノ本則を見よと。併しコノ「現成公案」と云ふ句は合點がいかぬ。頌の「夜深けて同じく看る千巖の雪」と云ふ句から出たと思ふが、ソレではコノ本則は夢にも見ることはならぬぞ。「試に舉す、看よ」と、サーこれから本則ぢや。

舉雪峯住庵時、有兩僧來禮拜。○作什麼。○一狀領過。峯見來以手
托庵門、放身出云是什麼。○鬼眼睛。○無孔笛子。○擊頭戴角。僧亦云
是什麼。○泥彈子。○毘拍板。○箭鋒相拄。峯低頭歸庵。○爛泥裏有刺。○如龍

無足似蛇有角 ○就中難爲措置 僧後到巖頭 ○也須是問過始得 ○同道方知

頭問甚麼處來 ○也須是作家始得 ○這漢往往納敗闕 ○若不是同參泊乎放過

僧云嶺南來 ○傳得甚麼消息來 ○也須是通箇消息 ○還見雪峯麼 頭云曾

到雪峯麼 ○勘破了多時 ○不可道不到 僧云曾到 ○實頭人難得 ○打作

兩概 頭云有何言句 ○便恁麼去也 僧舉前話 ○便恁麼去也 ○重

重納敗闕 頭云他道甚麼 ○好劈口便打失却鼻孔了也 僧云他無語低

頭歸庵 ○又納敗闕 ○爾且道他是甚麼 頭云噫我當初悔不向他道

末後句 ○洪波浩渺白浪滔天 若向伊道天下人不奈雪老何 ○癩兒

牽伴 ○不必 ○須彌也須粉碎 ○且道他圈續在甚麼處 僧至夏末再舉前話

請益 ○已是不惺惺 ○正賊去了多時 ○賊過後張弓 頭云何不早問 ○好

與掀倒禪床 ○過也 僧云未敢容易 ○這棒本是這僧喫 ○穿却鼻孔 ○停囚長

智 ○已是兩重公案 頭云雪峯雖與我同條生不與我同條死 ○

漫天網地 要識末後句只這是 ○賺殺一船人 ○我也不信 ○泊平分疎不下

【和訓】 擧す。雪峯住庵の時、兩僧有つて來つて禮拜す。○什麼をか作す。○一狀に領過す。峯、來るを見て、手を以つて庵門を托して、身を放つて出で、云く、是れ什麼ぞ。○鬼眼晴。○無孔の箇子。○頭を擧げ角を戴く。僧亦た云く、是れ什麼ぞ。○泥彈子、難拍板。○箭鋒相ひ挂ふ。峯、低頭して庵に歸る。○彌泥裏に刺有り。○龍の足無きが如く、蛇の角有るに似たり。○中に就て措置するに難爲なり。○僧後に巖頭に到る。○也た須らく是れ問過して始めて得べし。○同道方に知る。○頭問ふ、甚麼の處より來る。○也た須らく是れ作家にして始めて得べし。○道の漢往往敗闕を納る。○若し是れ同參にあらずんば、泊んど放過せん。○僧云く、嶺南より來る。○甚麼の消息をか傳へ得來る。○也た須らく是れ箇の消息を通すべし。○還つて雪峯を見る麼。○頭云く、曾つて雪峯に到る麼。○勘破したること多時。○到らずと道ふ可からず。○僧云く、曾つて到る。○實頭の人得難し。○打して兩概と作さん。○頭云く、何んの言句か有りし。○便ち恁麼にし去る也。○僧、前話を擧す。○便ち恁麼にし去れり。○重重敗闕を納る。○頭云く、他、甚麼とか道ひし。○好し劈口に便ち打して、鼻孔を失却し了れり。○僧云く、他無語、低頭して庵に歸る。○又た敗闕を納る。○爾且らく道へ、他は是れ甚麼ぞ。○頭云く、噫我れ當初、悔ゆらくは他に向つて末後の句を道はざりしことを。○洪波浩渺、白浪滔天。○若し伊に向つて道はましかば、天下の人、雪老を奈何ともせじ。○癩兒伴を牽く。○必とせず。○須彌も也た須らく粉碎すべし。○且らく道へ、他の圈續、甚麼の處にか在る。○僧、夏末に至つて、再び前話を擧して請益す。○已に是れ惺惺ならず。○正賊去り了ること多時。○賊過ぎて後ち弓を張る。○頭云く、何んぞ早く問はざる。○好し與に禪床を掀倒するに、○過也。○僧云く、未だ敢えて容易ならず。○この棒本と是れ道の僧喫せん。○鼻孔を穿却す。○囚に停つて智を長ず。○已に是れ兩重の公案。○頭云く、雪峯我と同條に生ずと雖も、我と同條に死せず。○漫天網地。○末後の句を識らんと要せば、只だ這れこれ。○一船の人を賺殺す。○我も也た信ぜず。○泊んと分疎不下ならん。

【提唱】

本則 コレから本則ぢや。

「擧す。雪峯住庵の時、兩僧有つて來つて禮拜す」と、コ、には、「住庵の時」と有り、又た「曾つて、雪峯に到るや」とも云ふて、尻口が合はぬやうぢやがサ、住庵の處が即ち雪峯ぢや。

「峰、來るを見て、手を以つて庵門を托して、身を放つて出で、云く、是れ什麼ぞ」と、イカサマ好い機嫌ぢやナ。虎の來るのも知らずにサ、自ら手を以つて門を開いて、ヒョツと出て、「是れ什麼ぞ」と、コリヤ聲に鐵砲放したやうぢや、サテ、勝れたものぢや。

「僧亦た云く、是れ什麼ぞ」と、肝を潰して云ふたぢや、別に深いことはない。

「峯、低頭して庵に歸る」と、コノ則を會せんとするならばサ、先づコノ「低頭して庵に歸る」と云ふ處をシツカと見るが好い。

「僧後に巖頭に到る」と、コノ坊様が後に巖頭の處へ行つたと見える。

「頭問ふ、甚麼の處より來る」と、サ、各々ウツカリせまいぞ。人々は是れ何處から來たぞ。過去から來たか、未來から來たかサ。金剛經(威儀寂靜分二十九)には、「從つて來る處も無く、亦た去る處もなし。故に如來と名く」と云ふてあるぞ。

「僧云く、嶺南より來る」と、ハヤ傍路へ走つた。

「頭云く、曾つて雪峯に到る麼」と、トツクに勘破し了つてからに、嶺南なら納が知音が居る筈ぢや、行つたかドウぢやと。サ、諸人、雪峯とはドコのことか。

「僧云く、曾つて到る」と、仰山が僧に向つて、曾つて五老峯に到つたかと問ふたら、ソノ僧は、曾つて到らずと答へた。然るにコノ僧は到ると答へた。「到」と「不到」と、サ、如何ぢや。

「頭云く、何んの言句が有りし」と、巖頭はサ、僧が雪峯を放過して居るのを見て、カウ問ふた。

「僧、前話を擧す」と、コノ坊主もハシタ人足ぢや。コ、で禪牀でも蹴飛ばせば好いに。惜しいことに、ぐづくと前話を擧した。

「頭云く、他、甚麼とか道ひし」と、コリヤ、僧を人にしてやらうと云ふ大慈大悲から、釣竿を下したのか。

「僧云く、他無語、低頭して庵に歸る」と、コレまで云はれても、まだ氣が付かぬ。コノ坊主、雪峯に生膽まで抜かれ、又た巖頭に糞草鞋で踏み付けられた。よくのタワケ坊主ぢや。

「頭云く、噫我れ當初、悔ゆらくば他に向つて最後の句を道はざりしことを」と、あ、残念千萬ナ、折がなくて最後の句を云はなんだと。巖頭最後の些子、此に到つて名を出した。「最後の句」とはサ、「七賢女經」に、「我が弟子大阿羅漢、此の義を解せず、只だ大菩薩子有つて、此の義を解す可し」とある。佛々相傳の此の機は在つたぢやが、最後の句と云ふ名は、巖頭が初めて付けた。コレが佛法

の筋骨ぢや。

「若し伊に向つて道はましかば、天下の人、雪老を奈何ともせじ」と、天下の人、手を下すこともなるまいとサ。南天棒下語して「死人の頭め」と云はん。

「僧、夏末に至つて、再び前話を擧して請益す」と、コノ僧、「最後の句」が聞きたさに、夏末まで工夫したが、トゥ／＼埒が明かぬから、再び問ふたと見える。

「頭云く、何んぞ早く問はざる」と、エー何んとして、今までベ／＼タラリにして置いたぞと。是れハヤ拖泥滞水ぢや。

「僧云く、未だ敢えて容易ならず」と、申し兼ねて居りましたと。

「頭云く、雪峯我と同條に生ずと雖も、我と同條に死せず」と、是れ祖師門下の大事ぢや、聞くもゾツとする。雪峯の大機用に至つては、「我と同條に生ずと雖も、我と同條に死せず」で、巖頭輩の及ぶ處でない。コレ／＼巖頭、ソナナものは雪隠の軒にでも吊つて置け。

「最後の句を識らんと要せば、只だ這れ是れ」と、コリヤ是れ、佛々祖々傳來の些子、巖頭初めて「最後の句」の名を安んじた。南天棒云く、エー忌々しい。

習語 コレから圓悟の著語ぢや。

「擧雪峯住庵時兩僧來禮拜」——「什麼をか作す、禮拜してドウする積りぞ。」一狀に領過す、

兩僧共にシレタものぢや。

「峯見來以手托庵門放身出云是什麼」——「鬼眼睛、雪峯の奴、氣味の悪い眼玉ぢや。」無孔の笛子、佛祖も知り難い。實に無孔の笛子ぢや。取り付きやうもないわい。「頭を擧げ角を戴く、コリヤ恐しい惡毒の爪牙ぢや、虎に角が有るやうぢや。」

「僧亦云是什麼」——「泥彈子、毘拍板、エー埒無しめ。斯く云ふたは能く和し得たぞ。ヘン、毛氈のピンザ、ラ、糞の役にも立たぬ。」箭鋒相ひ柱ふ、コレまでは好いぞと。コリヤ僧を弄して云ふたぢや。

「峯低頭歸庵」——「爛泥裏に刺有り、コレを一ト通りのおと思ふと怪我するぞ。觸られたものぢやない。」龍の足無きが如く、蛇の角有るに似たり、低頭して庵に歸つた處はサ、何んともハヤ、讀めたものでない。龍の足がないやうな、蛇の角があるやうな。實に奇異の曲者ぢやわい。「中に就いて措置するに難爲なり、ナンともシンマイがならぬ按排ぢや。」

「僧後到巖頭」——「也た須らく是れ問過して始めて得べし、コリヤ滅多に合點は行くまい。親しく問過して看よ。」同道方に知る、雪峯と巖頭とは同じ商賣ぢや。

「頭問甚處來」——「也た須らく作家にして始めて得べし、コノ挨拶は、巖頭ならでは出來ぬ。」這の漢往取關を納る、コノ坊様、又たく不調法ぢや。「若し是れ同參にあらずんば、泊んど放過せ

ん、「コリヤ、雪寶、巖頭でなければ、手に餘らうぞ。

「僧云嶺南來」——「甚麼の消息をか傳へ得來る」、嶺南の消息などと、ウヌ、何を持つて來たナ。「也た須らく是れ箇の消息を通ずべし」、嶺南から來たならばサ、彼方の様子を間違つて傳へまいぞ。「還つて雪峯を見る麼」、眞の雪峯を見たか如何ぢや。

「頭云會到雪峯麼」——「勘破し了ること多時」、コノ僧の筋骨はトツクに見抜いたぞ。エー笑止なことよ。「到らずと道ふ可からず」、ヤイ坊主、未だ到らずなどと云ふなよ。段々六ヶ敷くなつて來るからぢや。

「僧云會到」——「實頭の人得難し」、コノ僧、問はれてあり目通り答へたナ。正直な者はナカク得難い。「打して兩概と作さん」、併しサ、コノ僧は、雪峯、巖頭と二つに見て居る。雪峯、巖頭が、ナンの千里隔て、居らうぞ。雪峯に到つたならば、又た巖頭にも到つたのぢや。又た、「到る」と云へば、ハヤ自己と二つになるぞ。「打して」の次へ「曰」と云ふ字を入れて看よ。

「頭云有何言句」——「便ち恁麼にし去る也」、さてこそ痴氣が起つた、ザマを見ろ。

「僧擧前話」——「便ち恁麼にし去れり」、馬鹿め、トウ／＼白狀し居つた。「重重敗闕を納る」、又た大耻の搔き上げか。

「頭云他道甚麼」——「好し劈口に便ち打して、鼻孔を失却し了れり」、コリヤ好い打ち處ぢやに、

ナゼ打たんど。巖頭、手ぬるい、衲なら打つぢや。打つべき處を打たぬのは、鼻孔を何處へ遣つたのぞやと、コリヤ巖頭を抑下したぢや。

「僧云他無語低頭歸庵」——「又た敗闕を納る」、コレデ此の坊主の眼の見えぬとが知れた。「爾且らく道へ、他は是れ甚麼ぞ」、サー「低頭して庵に歸る」と云ふ意は如何ぢや。

「頭云噫我當初悔不向他道末後句」——「洪波浩渺 白浪滔天」、「末後の句」の機用を云ふぢや。コレには、臨濟、徳山も浮きつ沈みつぢや。

「若向伊道天下人不奈雪老何」——「癩兒伴を牽く」、ソラ又た仲間に入れ掛けるぞ。「必とせず」、ドンナ衲子が有らうも知れぬのにと。斯う云ふたはサ、巖頭は、「天下の人、雪老を奈何ともせず」と云ふがサ、ソレが必定とも云はれぬ。何故なれば、一箇の漢有つて、如何様なる大機大用を振ふところがあつても知れぬと。コノ説が好い。「須彌も也た須らく粉碎すべし」、コノ「末後の句」に逢ふては、須彌も粉微塵ぢや。「且らく道へ、他の罔續、甚麼の處にか在る」、サー巖頭の落着は何處ぢや。「僧至夏末再擧前話請益」——「已に是れ惺惺ならず」、コノ僧、今に初めず鈍な奴ぢや。「正賊去り了ること多時」、「賊過ぎて後ち弓を張る」、かさもせぬ禪まで取られた。モウおそい／＼。

「頭云何不早問」——「好し與に禪床を掀倒するに」、サー巖頭に何んの過ありや。コノ僧、コノ過を見出したならば、實にハヤ、明眼の衲僧と云はうぞ。「過也」、併し蹉過した。

「僧云未敢容易」——「這の棒本と是れ這の僧喫せん」宗師の手元にある棒は、コノやうな奴に喫はすためぢや。「鼻孔を穿却す」、コノ僧、モウ巖頭に鼻柱をヘシ折られて居るぞ。「囚に停つて智を長ず」、コノ僧が斯くの如く云ふたは、一夏の工夫ぢやと、きよくつたのぢや。「已に是れ兩重の公案」、雪峯の處と、巖頭の處と、コリヤ兩重の公案ぢや。

「頭云雪峯雖與我同條生不與我同條死」——「漫天網地」、コリヤ巖頭の機用ぢや。既にハヤ、悟つた者も悟らぬ者も、トント出ることとはならぬ。

「要識末後句只這是」——「一船の人を賺殺す」、何んぞ別なことがあらうと思ふて居つたのに、ナンドはれしきのことか。コレぢや乗り合の者共を、皆賺したぢや。「我も也た信ぜず」、巖頭にかけてナ、何んの「最後の句」とか説かんぢや。「泊んど分疎不下ならん」、コリヤ好下語ぢや。スンデに合點すまいとした。コノ最後の句には、衲僧も齒が立つまい。コレぢや恐らくはいかな巖頭も、分疎不下ぢやらう。

大凡扶堅宗教須是辨箇當機知進退是非明殺活擒縱若忽眼目迷黎麻羅到處逢問便問逢答便答殊不知鼻孔在別人手裏只如雪峯巖頭同參德山此僧參雪峯見解只到恁麼處及乎見巖頭亦不曾成得一事虛煩他二老宿一問一答一擒一縱直至如今天下人成節角

語訛分疎不下且道節角語訛在甚麼處雪峯雖遍歷諸方末後於鰲山店巖頭因而激之方得勳絕大徹巖頭後值沙汰於湖邊作渡子兩岸各懸一板有人過敲板一下頭云爾過那邊遂從蘆葦間舞棹而出雪峯歸嶺南住庵這僧亦是久參底人雪峯見來以手托庵門放身出云是甚麼如今有底恁麼問着便去他語下咬嚼這僧亦怪也只向他道是甚麼峯低頭歸庵往往喚作無語會去也這僧便摸索不着有底道雪峯被這僧一問直得無語歸庵殊不知雪峯意有毒害處雪峯雖得便宜爭奈藏身露影這僧後辭雪峯持此公案令巖頭判既到彼巖頭問甚麼處來僧云嶺南來頭云曾到雪峯麼若要見雪峯只此一問也好急着眼看僧云曾到頭云有何言句此語亦不空過這僧不曉只管逐他語脈轉頭云他道甚麼僧云他低頭無語歸庵這僧殊不知巖頭著草鞋在他肚皮裏行幾回了也巖頭云噫我當初悔不向他道末後句若向他道天下人不奈雪老何巖頭也是扶強不扶弱這僧依舊黑漫漫地不分縞素懷一肚皮疑真箇道雪峯不會至夏末再舉前話請益巖頭云何不早問這老漢計較生也僧云未敢容易頭云雪峯雖與我同條生不與我同條死要識末後句只這是巖頭太煞不惜眉毛諸人畢竟作麼生會雪峯在德山會下作飯頭一日齋晚德山托鉢下至法堂峯云鐘未鳴鼓未響這老漢托鉢向甚麼處去山無語低頭歸方丈雪峯舉似巖頭云大小德山不會末後句山聞令侍者喚至方丈問云汝不肯老僧那頭密啓其語山至來日上堂與尋常不同頭

於僧堂前撫掌大笑云且喜老漢會末後句他後天下人不奈他何雖然如是只得三年此公案中如雪峯見德山無語將謂得便宜殊不知着賊了也蓋爲他會着賊來後來亦解做賊所以古人道末後一句始到牢關有者道巖頭勝雪峯則錯會了也巖頭常用此機示衆云明眼漢沒窠臼却物爲上逐物爲下這末後句設使親見祖師來也理會不得德山齋晚老子自捧鉢下法堂去巖頭道大小德山未會末後句在雪竇拈云會聞說箇獨眼龍元來只具一隻眼殊不知德山是箇無齒大蟲若不是巖頭識破爭知得昨日與今日不同諸人要會末後句麼只許老胡知不許老胡會自古及今公案萬別千差如荆棘林相似倘若透得去天下人不奈何三世諸佛立在下風倘若透不得巖頭道雪峯雖與我同條生不與我同條死只這一句自然有出身處雪竇頌云

【和訓】大凡そ宗教を扶掖せんには、須らく是れ箇の當機を辨じ、進退是非を知り、殺活擒縱を明むべし。若し忽に眼目、迷蒙麻羅して、到る處問に逢ふては便ち問ひ、答に逢ふては便ち答へば、殊に知らず、鼻孔、別人の手裏に在ることを。只だ雪峯、巖頭の如きんば、同じく德山に參す。此の僧、雪峯に參す。見解只だ德山の處に到る。巖頭に見ゆるに及んで、亦た會つて一事を成し得ず、虚しく他の二老宿を煩はす。一問一答、一擒一縱、直に如今に至るまで、天下の人、節角論訛と成つて、分疎不下なり。且らく道へ、節角論訛、甚廢の處に在る。雪峯、諸方に偏廢すと雖も、未後に繁山店に於て、巖頭、因つて之れを激して、方に勦絶して大徹することを得たり。巖頭に沙汰に値ふて、湖邊に於て渡子と作る。兩岸に各一板を懸く。人有り、過ぎて板を破くこと一下すれば、頭云く、備那邊に過くと。遂に蘆葦の間、棹を舞して出づ。雪峯、嶺南に歸つて

住庵す。この僧亦た是れ久參底の人。雪峯、來るを見て、手を以つて庵門を托して、身を放つて出でて云く、是れ甚廢ぞと。如今有る底は德山に問着すれば、便ち他の語下に去つて咬嚼す。この僧亦た怪なり。只だ他に向つて道ふ、是れ甚廢ぞと。巖頭低頭して庵に歸る。往々に喚んで無語の會と作し去る。この僧便ち摸索不着。有る底は道く、雪峯、この僧に一問せられて、直に得たり、語無くして庵に歸ると。殊に知らず、雪峯の意、害毒の處有ることを。雪峯便宜を得と雖も、爭奈せん、身を激して影を露すことを。この僧後に雪峯を辭す。此の公案を持して、巖頭をして判ぜしむ。既に彼に到る。巖頭問ふ、甚廢の處より來る。僧云く、嶺南より來る。頭云く、會つて雪峯に到る麼と。若し雪峯を見んとせば、只だ此の一問、也た好し、急に眼を着けて看るに。僧云く、會つて到る。頭云く、何んの言句か有りしと。此の語亦た空しく過さず。この僧曉らずして、只管に他の語脈を逐ふて傳ず。頭云く、他、甚廢とか道ひし。僧云く、他、低頭して無語歸庵と。この僧殊に知らず、巖頭、草鞋を着けて他の肚皮裏に在つて行くこと幾回ししたることを。巖頭云く、嗚我れ當初悔らくは他に向つて末後の句を道はざりしことを。若し他に向つて道はましかば、天下の人、雪峯を奈何ともせじと。巖頭也た是れ、強を扶けて弱を扶けず。この僧、舊に依つて黒漫漫地にして、細素を分たず、一肚皮の疑を懐いて、眞箇道ふ、雪峯會せずと。夏末に至つて、再び前話を舉げて巖頭に請益す。頭云く、何んぞ早く問はざると。この老漢計較生ぜり。僧云く、未だ敢て容易ならず。頭云く、雪峯、我と同條に生ずと雖も、我と同條に死せず。末後の句を識らんとせば、只だこれはれと。巖頭太婆だ眉毛を惜まらず。諸人畢竟して作麼生か會せん。雪峯、德山の會下に在つて飯頭と作る。一日齋晚し。德山托鉢して法堂に下り至る。峯云く、鐘未だ鳴らず、鼓未だ響かざるに、この老漢、托鉢して甚廢の處に向つてか去ると。山、無語、低頭して方丈に歸る。雪峯、巖頭に舉似す。頭云く、大小の德山、末後の句を會せずと。山、聞いて、侍者をして喚んで方丈に至らしむ。問ふて云く、老僧を背はざる那。頭、密かに其の語を啓す。山、來日に至つて上堂。尋常と同じからず。頭、僧堂前に於て、掌を撫して大笑して云く、且喜すらくば、老漢末後の句を會することを。他、後に天下の人、他を奈何ともせじ。然も是の如くなりと雖も、只だ三年を得んと。此の公案の中、雪峯の如きんば、德山の語無きを見て、將に謂へり、便宜を得と。殊に知らず、賊を着けたることを。蓋し他會つて賊を着けるが爲めに、後來亦た賊と做ることを解す。所以に古人道く、末後の一句、始めて牢關に到ると。有る者は龜ふ、巖頭、雪峯に勝れりと。則ち錯つて會し了れり。巖頭、常に此の機を用ひて、衆に示して云く、明眼の漢窠臼を没し、物を却くるを上

と爲し、物を逐ふを下と爲すと。道の最後の句、設使ひ親しく祖師に見え來るとも、也た理會すること得じ。徳山、齋晚し、老子自ら鉢を捧げて、法堂に下り去る。巖頭道く、大小の徳山、未だ最後の句を會せざること有り。雪竇拈じて云く、曾て聞説く、箇の獨眼龍、元來只だ一隻眼を具す。殊に知らず、徳山は是れ箇の無齒の大蟲なることを。若し是れ巖頭識破するにあらずんば、争でか昨日と今日と同じからざることを知得せん。諸人、最後の句を會せんと要す。只だ老胡の知を許して、老胡の會を許さずと。古、自り今に及ぶまで、公案、萬別千差。那維林の如くに相ひ似たり。爾若し透得し去らば、天下の人、奈何ともせじ、三世の諸佛も下風に立在せん。爾若し透不得ならば、巖頭道く、雪峯我と同條に生ずと雖も、我と同條に死せずと。只だ這の一句、自然に出身の處有り。雪竇頌して云く。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢや。「大凡そ宗教を扶堅せんには」と、コレが無ければ娑婆塞ぎぢや。「須らく是れ箇の當機を辨じ、進退是非を知り、殺活擒縱を明らむべし」と、サーそれには、當機觀面の働さを辨へて、學者の進退是非を知り、殺活自在でなくちやならぬ。「若し忽に眼目、迷黎麻羅して、到る處間に逢ふては便ち問ひ、答に逢ふては便ち答へば、殊に知らず、鼻孔、別人の手裏に在ること」と、「迷黎麻羅」とはサ、方語で暗昏々地と云ふことぞ、ニチャ／＼した悟りぢや。サー問へば問ふたぎり、答ふれば答へたぎりぢや役に立たぬぞ。ソナなことぢや、人に鼻面を引き廻はされるぢや。「只だ雪峯、巖頭の如きんば、同じく徳山に參す」と、いづれも徳山下のお歴々ぢや。「此の僧、雪峯に參す。見解只だ恁麼の處に到る」と、コノ坊主、雪峯の處へ行つてもサ、雪峯の意味甚深の處を知らぬ。一枚見識ぢや駄目々々。「巖頭に見ゆるに及んで、亦た曾つて一事を成し得ず、虚

しく他の二老宿を煩はす」と、巖頭の處へ來ても、何も埒明かぬ。「一問一答、一擒一縱、直に如今に至るまで、天下の人、節角論訛と成つて、分疎不下なり」と、巖頭は把住し、雪峯は放行したが、實にコノ「最後の句」は古今の人を惱すぢや。「且らく道へ、節角論訛、甚麼の處にか在る」と、サ「此の入り組はドウぢや。何れの處を指して最後の句と云ふたものぢや。」雪峯、諸方に徧歴すと雖も、最後に熬山店に於て、巖頭、因つて之れを激して、方に勦絶して大徹することを得たり」と、カウなくてはならぬ、今の坊様は徧歴が足りぬ。雪峯の如きは、三度洞山に登り、九度投子に到るぢや。最後に熬山店で、巖頭に遣り上げられて、サツパリとした。「巖頭後に沙汰に値ふて、湖邊に於て渡子と作る。兩岸に各一板を懸く」と、コレは唐の武宗の時の會昌の沙汰を云ふのぢや。ソコデ巖頭は鄂渚湖と云ふ湖の渡守となつてからに、板一枚を鉤として學人を接得したのぢや。「人有り、過ぎて板を敲くこと一下すれば、頭云く、爾那邊に過くと。遂に蘆葦の間従り、棹を舞して出づ」と、人が來つて板を敲かうものなら、「爾那邊に過ぐ」で、蹉過するなと遣る。實にハヤ、有り難いものぢや。今時コナ親切な師家はないぞ。「雪峯、嶺南に歸つて住庵す」と、徳山に參じた時、雪峯は方に住庵して居つたぢや。「這の僧亦た是れ久參底の人」と、コノ問話の僧は、久參ではあつたらうが、まだ／＼ハキとしたものではない。「雪峯、來るを見て、手を以つて庵門を托して、身を放つて出で、云く、是れ甚麼ぞ」と、コ、で雪峯が平生用ゆる「是れ甚麼ぞ」と云ふ語句が出たわい。

「如今有る底は恁麼に問着すれば、便ち他の語下に去つて咬嚼す。這の僧亦た怪なり。只だ他に向つて道ふ、是れ甚麼ぞ」と、今時の者なりや、「是れ甚麼ぞ」と云ふ語を、彼方へ此方へとコネ廻すぢややらうが、コノ坊主は、奇怪の曲者ぢや。同じやうに、「是れ甚麼ぞ」と遣り返した。コノ二十七字はコノ僧を美めたのぢや。「峯、低頭して庵に歸る。往往に喚んで無語の會と作し去る」と、コリヤ是れ直示ぞ。コノ脱白露成なるを知らぬ。何を馬鹿な。「這の僧便ち摸索不着」と、コノ坊主、大スカタンぢや。「有る底は道く、雪峯、這の僧に一間せられて、直に得たり、語無くして庵に歸ると」、雪峯がコノ僧に問ひ詰められて、グツとも得云はず引込んだとサ。「殊に知らず、雪峯の意、毒害の處有ることを」と、コリヤ雪峯に怖い蝮の針があるを知らぬ奴の云ふことぢや。「雪峯、便宜を得と雖も、争奈せん、身を藏して影を露すことを」と、サ、雪峯、随分ぢやけれども、尾が見えりと。併しサ、見得分明なれば全體見盡すが、若し見不得なれば、尻も頭も見ることにはならぬぞ。コノ十二字は好くない、削つた方が好い。「這の僧後に雪峯を辭す。此の公案を持して、巖頭をして判ぜしむ」と、コノ坊様、コノ「低頭歸庵」を擔ふてからに、雪峯から巖頭へ到つたのぢや。コレに就いて、「會元」の雪峯章を見ると、斯うある。「師(雪峯)、低頭歸庵。僧辭し去る。師問ふ、甚麼の處にか去る。曰く湖南。師曰く、我に箇の同行有つて巖頭に住す。汝に一書を附して云はん。書に曰く、某書して師兄に上る。某一たび鰲山に成道してより後、今に至る迄、飽して飢えず。同參の某、

書を上ると。僧、巖頭に到る。頭問ふ、甚麼の處より來る。曰く、雪峯より來る。書有り、和尙に達すと。頭、接し了つて乃ち僧に問ふ、別に何んの言句か有りし。僧遂に前話を擧すとある。「既に彼に到る。巖頭問ふ、甚麼の處より來る。僧云く、嶺南より來る。頭云く、曾つて雪峯に到る麼と」、コ、には抄處があるぞ。「若し雪峯を見んと要せば、只だ此の一間、也た好し急に眼を着けて見るに」と、サ、若し雪峯を見やうとするならば、コノ露出した一間を好く見て取るが好いと。サウあらうぞならば、雪峯ばかりか、巖頭まで見えるぢや。併しコリヤ圓悟老婆ぢや、アンマリ叮嚀な。「僧云く、曾つて到る」と、コリヤ大いに蹉過了ぢや。頭云く、何んの言句か有りしと。此の語亦た空しく過さず」と、是れ亦た徒に問はずぢや、喰れたものでない。「這の僧曉らずして、只管に他の語脈を逐ふて轉ず」と、才藏みたやうで、ザマはない。「頭云く、他、甚麼とか道ひし、僧云く、他、低頭して無語歸庵と。這の僧殊に知らず、巖頭、草鞋を着けて、他の肚皮裏に在つて行くこと幾回ししたることを」と、此奴、巖頭が糞草鞋を穿いて、己が肚の裏を豎横十文字に、幾回も馳け廻つて居るとを知らぬ。氣の付かぬ奴は仕方のないものぢや。「巖頭云く、噫、我れ當初、悔らくは他に向つて最後の句を道はざりしことを。若し他に向つて道はましかば、天下の人、雪老を奈何ともせじと」、コノ語往々蹉過するぢや。是れ雪峯の爲めに、巖頭も血滴々、心肝五臓をマケ出したものをサ。「噫」とは、我れ當時残念ぢやつたと嘆く心ぢや。然もコノ一字が大事ぢや。「巖頭也た是れ、強を扶けて

弱を扶けず」と、コリヤ此の僧の契はざる處を打ッ捨つて、雪峯極則の振舞を扶けて稱美するからぢや。「この僧、舊に依つて黒漫漫地にして、緇素を分たず」と、雪峯下でもいけなんだが、又た此處でも駄目ぢや。「一肚皮の疑を懐いて、眞箇道ふ、雪峯會せず」と、腹一杯の固りを持つてからに、雪峯は最後の句を會せずと眞箇に思つたとサ。イヤハヤ。夏末に至つて、再び前話を擧げて巖頭に請益す。頭云く、何んぞ早く問はざると、兩手に分付して、塗毒鼓の如しぢや。「この老漢計較生ぜり」と、コノ七字は不可ぬ。南天棒云く、若し右手を握つて評せば、佛祖も命を乞はん。又た若し左手を握つて評せば、半文錢にも抵らぬぞ。僧云く、未だ敢へて容易ならず。頭云く、雪峯、我と同條に生ずと雖も、我と同條に死せず。最後の句を識らんと要せば、只だこれは是れと、前筋は深く、後前は輕しぢや。巖頭が「何んぞ早く問はざると云ふた弓勢はサ、七枚甲をも射抜く程ぞ。巖頭太急だ眉毛を惜まぬ。諸人、畢竟して作麼生が會せん」と、サ、巖頭が眉毛を惜まぬ説いたが、畢竟諸人はドウ「最後の句」を會するぞ。「雪峯、徳山の會下に在つて飯頭を作る」と、コレは雪峯も巖頭も、未だ徳山の會下に在つた時のことぢや。「一日齋晚し。徳山托鉢して法堂に下り至る」と、或日徳山がサ、寢トボケテ、板木が鳴つたと思ふて、鉢の子を持つてツカ／＼と食堂へ出て來た。「峯云く、鐘未だ鳴らず、鼓未だ響かざるに、この老漢、托鉢して甚麼の處に向つてか去ると、ソレを雪峯が見て、コノ老僧、飯の鐘も未だ鳴らぬのに、鉢の子を提げて、ドコへうろたへめさるぞと、手嚴し

く遣り込めた。コノ一問には流石の徳山も閉口して仕舞つて、「山、無語、低頭して方丈に歸る」と、スゴ／＼方丈へ戻られた。「雪峯、巖頭に舉似す」と、ソコデ雪峯、味を遣つたと思ふて、コノとを巖頭に舉似したと見える。「頭云く、大小の徳山、最後の句を會せず」と、スルト巖頭、事あれかし、笛吹かうと思ふて居る矢先ぢやから、大小の徳山も、最後の句が會らぬわいと喚き出した。コレが宗旨を扶起すると云ふものぢや。「山、聞いて、侍者をして喚んで方丈に至らしむ」と、徳山はサ、巖頭が自分のことを斯くの如く云ふたと聞いて、巖頭を方丈へ喚び付けてからに、「問ふて云く、老僧を肯はざる那」と、貴様、コノ老僧を肯はずとは、ナンと云ふことぢやと、叱り飛ばした。「頭、密に其の語を啓す」と、ソコデ巖頭が、徳山の耳へ口を寄せて、何かグヅ／＼囁いた。エ、何んのタワ言を吐くのか。「山、來日に至つて上堂。尋常と同じからず」と、スルト徳山、ソノ翌る日の説法が、今迄とは違つて、實にキビ／＼としたものぢやつた。コレより後は龍の水を得たるが如しぢやと。併し心元ないテ。「頭、僧堂前に於て、掌を撫して大笑して云く、且喜すらくば、老漢最後の句を會することを。他、後に天下の人、他を奈何ともせじ」と、コレも雪峯の爲めぢやがサ、巖頭の最後の句と云ふも、ソノ意を得ぬ。ソノやうに彼方此方と、ぢ／＼散らかすやうなことが、何の用に立つものぞ。「然も是の如くなりと雖も、只だ三年を得んと、徳山、果して三年後に示寂した。此の公案の中、雪峯の如きんば、徳山の語無きを見て、將に謂へり、便宜を得と。殊、知らず、賊

を着けたると」と、サ、雪峯は徳山の無語の處を見てサ、問ひ詰めて一箭を贏ち得たりと思ふたぢやらうが、焉ぞ知らん、家財屋財引ッ攫はれて居るぢや。「蓋し他曾つて賊を着け來るが爲めに、後來亦た賊と做ることを解す」と、雪峯、手を喰ふた覺があるから、又た盜む機用を知る。是れ師子相傳の賊法ぢや。「所以に古人道く、末後の一句、始めて牢關に到ると、ぢやから末後の一句は至極の切處ぢやト。「古人」と云ふはサ、洛浦元安禪師と盤山禪師とを指したのぢや。「有る者は道ふ、巖頭、雪峯に勝れりと。則ち錯つて會し了れり」と、トツテもない錯りぢや。「巖頭、常に此の機を用ひて、衆に示して云く、明眼の漢窠臼を没し」と、佛界魔界に住して跡方もない、手目を見せぬ。末後の句は、コノ邊で略見る可しぢや。「物を却くるを上と爲し、物を逐ふを下と爲す」と、コノ「却」は「轉」にした方がよい。サ、作麼生か轉せん。この座敷を彌陀に轉するぢや。又た物のシツコに付いて廻るのは下ぢや。「這の末後の句、設使ひ親しく祖師に見え來るとも、也た理會すること得じ」と、設使へ祖師の關門は透つても、コノ末後の句は透らぬぞ。「徳山、齋晚し、老子自ら鉢を捧げて、法堂に下り去る。巖頭道く、大小の徳山、未だ末後の句を會せざること存りと」。古本には、コノ二十六字の代りに、「後來、明招謙、徳山に代つて云く、咄々、沒所去々々々」の十七字が入れてある。「花園抄」も左様なれば、「雪竇録」の拈古部にある處も、コレと同じぢや。サテ、明招謙、エイサラ手前の身はれをする人ぢやナ。「雪竇拈じて云く」と、已下「只許老胡知不許老胡會」と云ふ迄

は、「雪竇録」の語ぢや。コリヤ好評ぞ。「曾つて聞説く、箇の獨眼龍、元來只だ一隻眼を具す」と、明招の獨眼龍、容さぬ場があるぞ。「殊に知らず、徳山、是れ箇の無齒の大蟲なることを」と、モウ爪牙が無い、牛の吼えるも同じことぢや。「若し是れ巖頭識破するにあらずんば、争てか昨日と今日と同じからざることを知得せん。諸人、末後の句を會せんと要す麼」と、巖頭がサ、末後の句を識破するでなければ、ドウして昨日の上堂と切つて代つたやうにならうぞ。サ、諸人、ナンと「末後の句」を會するぞ。「只だ老胡の知を許して、老胡の會を許さず」と、コノ語極めて難透々々。「古自ら今に及ぶまで、公案、萬別千差。荆棘林の如くに相ひ似たり」と、末後の句を知らうとならば、骨折つて萬別千差の公案に參ぜよ。悟つた後に、荆棘林を躰體で透るやうなことが、何程もあるぞ。「爾若し透得し去らば、天下の人、奈何ともせじ。三世の諸佛も下風に立在せん」と、若し末後の句を透得したならば、天下に誰れ一人、手脚を着け得る者はない。三世の諸佛も亦た下坐して平伏せうぞ。「爾若し透不得ならば、巖頭道く、雪峯我と同條に生ずと雖も、我と同條に死せずと。只だ這の一句、自然に出身の處有り。雪竇頌して云く」と、若し透不得ならばサ、巖頭の云ふたコノ語を、好く參究するがよい。自ら荆棘林を透過した場があるぞ。サ、雪竇の頌はドウぢや。

末後句 ○已在言前○將謂真箇○觀着則瞎 爲君說 ○舌頭落○也說不着○

有頭無尾有尾無頭 明暗雙雙底時節 ○葛藤老漢○如牛無角似虎有角○彼
 此是恁麼 同條生也共相知 ○是何種族○彼此沒交涉○君向瀟湘我向秦 不
 同條死還殊絕 ○拄杖子在我手裏○爭怪得山僧○爾鼻孔爲什麼在別人手裏
 還殊絕 ○還要喫棒麼○有什麼摸索處 黃頭碧眼須甄別 ○盡大地人亡
 鋒結舌○我也恁麼他人却不恁麼○只許老胡知不許老胡會 南北東西歸去來
 ○收○脚跟上猶帶五色線在○乞爾一條拄杖子 夜深同看千巖雪 ○猶較半
 月程○從他大地雪漫漫○填溝塞壑無人會○也只是箇瞎漢○還識得末後句麼○便打

【和問】 末後の句。(○已に言前に在り。○將に謂へり眞箇と。○觀着すれば瞎す。○君が爲めに説く。○舌頭落ちぬ。○也た説
 不着。○頭有つて尾無く、尾有つて頭無し。○明暗雙雙底の時節。(○葛藤の老漢。○牛の角無きが如く、虎の角有るに似たり。○
 彼此是れ恁麼ぞ。○同條生也共に相ひ知る。(○是れ何んの種族ぞ。○彼此沒交涉。(○君は瀟湘に向ひ我は秦に向ふ。○不同條
 死還つて殊絶なり。○拄杖子我が手裏に在り。○争でか山僧を怪み得ん。○爾が鼻孔、什麼と爲てか別人の手裏に在る。○還
 つて殊絶なり。(○還つて棒を喫せんと要す麼。○什麼の摸索する處か有らん。○黃頭碧眼須らく甄別すべし。(○盡大地の人
 鋒を亡し舌を結く。○我は也た恁麼、他人は却つて不恁麼。○只だ老胡の知を許して老胡の會を許さず。○南北東西歸去來。(○
 收。○脚跟上猶ほ五色の線を帶ぶること、在り。○爾に一條の拄杖子を乞はん。○夜深けて同じく看る千巖の雪。(○猶ほ半月程

に較れり。○從他れ大地雪漫漫なることを。○溝に填ち壑に塞つて人の會する無し。○也た只だ是れ箇の瞎漢。○還つて末後
 の句を識得す麼。○便ち打たん。)

【提唱】

圓 コレから雪竇の頰ぢや。

「末後の句」と、コノ「末後の句」と云ふことは、何程悟つてもいかぬことぢや。コリヤ衲僧の根性
 玉を定むる周羅の一結ぢや。

「君が爲めに説く」と、サー何んと説いた。

「明暗雙雙底の時節」と、コリヤ雪竇屋裏の事、チヨと見た處は、中道一義諦と見えるなれども、
 然にあらず。偏正、雙暗雙明の眞の當位ぢや。ナンとも理が付かぬぞ。牛かと思れば角が無く、虎
 かと思れば角が有る、異なるものぢや。ツマリ見えたりやうで見えぬやうで、明るいやうで暗るいやうで
 と云ふことぞ。

「同條生也共に相ひ知る」と、コレと下の句との二句、巖頭の氣に入つたかドウぢや。同胞は知る
 べしぢや。

「不同條死還つて殊絶なり」と、ステツボウもない違つたことぢやと。南天棒もコノ句を撻せられ
 て、イヤハヤ大いに難義したことがある。

「還つて殊絶なり」と、サー、斯う呼び返してサ。

「黄頭碧眼須らく甄別すべし」と、「不同條死」の處は、釋迦でも達磨でも、トクと見付け得ねばならぬ。ナカ／＼以つて容易にはいかぬぞ。

「南北東西歸去來」と、イヤ仕舞つたどぢや。東西南北、何處の衆もサー／＼お歸り／＼。コノ「不同條死」の些子は、ドウもシンマイがなるまい。

「夜深けて同じく見る千巖の雪」と、コリヤ絶妙ぢや。サーこれを茲に妙處有り、「千巖の雪」を見に行ぢやと見ば天涯を隔つぞ。一層歸つて本の一枚平等の穴に居るが増しかさ。雙明雙暗の句ぢや、正中偏ぢや。コリヤ實に絶妙。夜深けて同じく見る千巖の雪、又た是れ、夜深けて同じく見る千巖の雪。サー此の雪は一色邊の中、殊絶の境界在りぢや。雪竇山に千丈岩と云ふがあるから、千巖の雪と云ふたものぢや。

著語 コレから圓悟の著語ぢや。

「末後句」——「已に言前に在り」、コ、の下語は、「也説不着」に至るまで、五句とも皆不可ぬ。削つた方が好い。コノ句はサ、「只だ這れ是れ」と云ふに當てたのぢや。「將に謂へり眞箇と」、ホントに在るかと思つたと。イヤ散々ぢや。「觀着すれば晴す」、「末後の句」を一目見ると、眼が潰れるぞと。面白くない下語ぢや。

「爲君説」——「舌頭落ちぬ」、説と云へば舌が落ちる。「也た説不着」、ナカ／＼説くことはなるまいぞ。「頭有つて尾無く、尾有つて頭無し」、「末後の句」は奇異なものぢやと。コノ下語は好い。

「明暗雙雙底時節」——「葛藤の老漢」、雪竇、注脚が過ぎたぞ。コノおしやべりめが。「牛の角無きが如く、虎の角有るに似たり」、夜かと思れば晝、晝かと思れば夜、コレが明暗雙雙底の時節ぞ。「彼此是れ恁麼ぞ」、明も暗も他物ではない。

「同條生也共相知」——「是れ何んの種族ぞ」、同生底の者なら、何んの後胤ぞ。源氏か平氏か。「彼此沒交涉」、「共に相ひ知る」と云やるが、彼方も此方も音信はない。「君は瀟湘に向ひ我は秦に向ふ」、コレは鄭谷が詩の一句ぢや。只だ一寸擦り違つたまでぢや。

「不同條死還殊絶」——「拄杖子我が手裏に在り」、雪竇、タツ言つくな、一棒あぶせたい。コリヤ圓悟大出來／＼。「争でか山僧を怪しみ得ん」、己の打つのも無理は有るまいと。イヤ／＼怪まんでもないぞ。「彌が鼻孔、什麼と爲てか別人の手裏に在る」、雪竇の秘藏の處を見透したぞと。コリヤ面白い下語ぢや。五祖(法演)門下の客、又た格別の手段ぢや。

「還殊絶」——「還つて棒を喫せんと要す麼」、雪竇又た棒を喫ひたいか。「什麼の摸索する處か有らん」、ナン、殊絶」と云ふて工夫することがあらうや。

「黄頭碧眼須甄別」——「盡大地の人、鋒を亡し舌を結く」、イヤハヤ、申しやうも御座らぬ。「我

は也た恁麼、他人は却つて不恁麼、己は斯うぢやが、皆は如何ぢやナ。「只だ老胡の知を許して老胡の會を許さず、コリヤ滅多にいかぬことぞ。」

「南北東西歸去來」——「收、サ、荷を仕舞へ、棚を仕舞へ。「脚跟下猶は五色の線を帶ぶることと在り」、「歸去來」と云はれても、脚下に纏れる生死の絆が切れ兼ねるぢや。「爾に一條の拄杖子を乞はん」、「歸れ」とならば、雪竇、一本の拄杖子が所望ぢや。是れは又た「與ふ」と云ふ意にもなる。

「夜深同看千巖雪」——「猶ほ半月程に較れり、頭は尤もなれども、コレを「最後の句」に當て比べば、十五日狂ふぞ。「從他れ大地雪漫漫なることぞ、コ、へ「大地雪漫漫」を付けて好いものかサ。コノ見解では、「夜深けて同じく看る千巖の雪」が見えるものか。「溝に填ち壑に塞つて人の會する無し」、「也た只だ是れ箇の晴漢」、眼の明いた者は一人も無いぢや。「還つて最後の句を識得す麼」、「夜深同看千巖雪」を知るかドウぢや。「便ち打たん」、知つたと云へば打つぞ。」

末後句爲君說雪竇頌此末後句他意極有落草相爲頌則然頌只頌毛彩些子若透見也未在更敢開大口便道明暗雙雙底時節與爾開一綫路亦與爾一句打殺了也未後更與爾注解只如招慶一日問羅山云巖頭道恁麼恁麼不恁麼不恁麼意旨如何羅山召云大師師應諾山云雙明亦雙暗慶禮謝而去三日後又問前日蒙和尚垂慈只是看不破山云盡情向

備道了也慶云和尚是把火行山云若恁麼據大師疑處問將來慶云如何是雙明亦雙暗山云同生亦同死慶當時禮謝而去後有僧問招慶同生亦同死時如何慶云合取狗口僧云大師收取口喫飯其僧却來問羅山云同生不同死時如何山云如牛無角僧云同生亦同死時如何山云如虎戴角末後句正是這箇道理羅山會下有僧便用這箇意致問招慶慶云彼此皆知何故我若東勝身洲道一句西瞿耶尼洲也知天上道一句人間也知心相知眼眼相照同條生也則猶易見不同條死也還殊絕釋迦達磨也摸索不着南北東西歸去來有些子好境界夜深同看千巖雪且道是雙明雙暗是同條生是同條死具眼衲僧試甄別看

【和訓】末後の句、君が爲めに説くと。雪竇、此の末後の句を頌す。他の意極めて草に落ちて相ひ爲めにすること有り。頌することとは恁た頌す、只だ毛彩の些子を頌す。若し透見せんと要せば、也た未だ。更に敢て大口を開いて便ち道ふ、明暗雙雙底の時節と。爾が與めに一綫路を開いて、亦た爾が與めに一句に打殺し了れり。末後更に爾が與めに注解す。只だ招慶の如きんば、一日、羅山に問ふて云く、巖頭道く、恁麼恁麼、不恁麼不恁麼と、意旨如何。羅山召して云く、大師。師、應諾す。山云く、雙明亦雙暗と。慶、禮謝して去る。三日の後、又た問ふ、前日、和尚の垂慈を蒙る、只だ是れ看不破。山云く、情を盡して爾に向つて道ひ了れり。慶云く、和尚、是れ火を把つて行け。山云く、若し恁麼ならば、大師の疑處に據つて、問ひ將ち來れ。慶云く、如何なるか是れ雙明亦雙暗。山云く、同生亦同死と。慶、當時禮謝して去る。後に僧有り、招慶に問ふ、同生亦同死の時如何。慶云く、狗口を合取せよ。僧云く、大師、口を收取して飯を喫せよと。其の僧却來して、羅山に問ふて云く、同生亦同死の時如何。山云く、牛の角無きが如し。僧云く、大師、同生亦同死の時如何。山云く、虎の角を戴くが如しと。末後の句、正にかれ這箇の道理なり。羅山の會下に僧有り。便ち這箇の意を用ひて、問を招慶に致す。慶云く、彼此皆な知る。何が故ぞ。我れ若

し東勝身洲に一句をいへば、西羅耶尼洲にも也た知る。天上に一句を道へば、人間にも也た知る。心心相ひ知り、眼眼相ひ照すと。同條生は則ち猶ほ見易く、不同條死は還つて殊絶せり。釋迦、達磨も也た摸索不着ならん。南北東西歸去來と。些子の好境界有り。夜深けて同じく看る千巖の雪と。且らく道へ、是れ雙明か、雙暗か。是れ同條生か、是れ同條死か、具眼の袖俯、試みに甄別して看よ。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢや。「最後の句、君が爲めに説くと。雪竇、此の最後の句を頌す。他の意極めて草に落ちて相ひ爲めにするこ有り」と、雪竇、コノ「最後の句」を頌するに、止む事を得ず落草して人の爲めにした。「頌することは煞た頌す、只だ毛彩の些子を頌す」と、毛の尖程の少しばかりと。併し「明暗雙雙」と切つて放つたは、何んと少とか多とか、コボレ〜か。サー人々見て取れ。「若し透見せんと要せば、也た未在」と、若し言句上で見やうとしたなら、ト〜くものぢやない。「更に大口を開いて便ち道ふ、明暗雙雙底の時節と」、己もコノ句を、三度まで中道第一義と見錯つた。「倆が與めに一綫路を開いて、亦た倆が與めに一句に打殺し了れり」と、コレは、知解情量を打殺して、頌了したと云ふ意ぢや。「明暗雙雙」の一句、活々として、最後の句を頌し殺したぢや。「末後更に倆が爲めに注解す」と、コリヤ三四の句已下を云ふたぢや。「只だ招慶の如きんば、一日、羅山に問ふて云く」と、コレは類則ぢや。コノ「招慶」は、「傳燈」、「會元」、「宗門統要」共に、保福從展になつて居る。次ぎ下の商量から見れば、恐らくは保福の誤りぢやらう。「羅山」は道閑と云ふて、巖

頭の法嗣ぢや。「巖頭道く、恁麼恁麼、不恁麼不恁麼と。意旨如何」と、巖頭が、左様ぢや〜、イヤ左様でない〜と云ふたは、ドウした譯で御座ると問ふた。「羅山召して云く、大師」と、コレは保福、天臺座主となつたから、「大師」と云ふたぢや。「師、應諾す。山云く、雙明亦雙暗と」、サー明かなる則んば天に普く地に普く、暗き則んば上霄漢に透り、下黄泉に徹するぢや。「慶、禮謝して去る。三日の後、又た問ふ、前日、和尚の垂慈を蒙る、只だ是れ看不破」と、スルト三日過ぎて又た問ふのに、此間は和尚のお慈悲に依つて垂示に預りましたが、ドウも私には合點が行きませぬと。「山云く、情を盡して倆に向つて道ひ了れり」と、老衲はお前の爲めに充分説いたのぢやがサ。「慶云く、和尚、是れ火を把つて往け」と、コレ和尚様、マツト明を出して呉れめされと。コリヤ、ハツキリとお説き下されと云ふことぢや。「山云く、若し恁麼ならば、大師の疑處に據つて、問ひ將ら來れ」と、ソレならば、お前の疑處を將つてからに、サー問ふて來い。「慶云く、如何なるか是れ雙明亦雙暗」と、ソコデ、「雙明亦雙暗」を問ふた。「山云く、同生亦同死と」、嗚呼好語ぢやわい。コリヤ舊參に非らずんば手に合ふまい。魔界に入つて、彼れ唯だ我が獨尊佛を打殺すと、虎の角を戴くがやうぢやもの、大抵では此の則は夢にも見るとはならぬ。「慶、當時禮謝して去る。後に僧有り、招慶に問ふ、同生亦同死の時如何」と、後になつて或る坊様が、招慶にコレを問ふたと見える。スルト、「慶云く、狗口を合取せよ」と、ヤカマシイ、黙り居れ。「僧云く、大師、口を收取して飯を喫せよ」と、

ソナラ大師も口を取つて置いて飯を喫りめされと。コノ坊主、ノサバツタ奴ぢや。「其の僧却來して、羅山に問ふて云く、同生不同死の時如何」と、引返して今度は羅山に問ふた。「山云く、牛の角無きが如し」と、牛が角をスリ潰したと。奇妙な化物ぢや。「僧云く、同生亦同死の時如何」と、邪解にサ、眞ッ暗い處へ、疑つてヒョツと生み出すとサ。ソナナことぢや駄目の皮ぢや。衲も三度まで読み損ふた。「山云く、虎の角を戴くが如し」と、コレも奇妙ぢや。「最後の句、正に是れ這箇の道理なり」と、恁麼に評論せば、何んぞ好く最後の句を見んやぢや。コリヤ圓悟の錯りぢや。「羅山の會下に僧有り。便ち這箇の意を用ひて、問を招慶に招す」と、又た羅山下の僧が、「同生亦同死」を以つて招慶に問ふた。「慶云く、彼此皆な知る」と、皆々御存じと。天ツ晴れ、巖頭の兒孫尙ほ在りぢや。「何が故ぞ。我れ若し東勝身洲に一句を道へば、西瞿耶尼洲にも也た知る。天上に一句を道へば、人間にも也た知る」と、コリヤ「彼此皆な知る」の注脚ぞ。コノ句は諸佛内證の秘訣ぢや。「心相ひ知り」と、是れ何んの道理ぞ。衆生心、佛心、菩薩心、即ち是れ諸佛内證の秘訣ぢや。「眼相ひ照すと」、柱と此方、此方と敷居と。コレまでが招慶の語ぢや。「同條生は則ち猶ほ見易く」と、コレでは違つた。「不同條死は還つて殊絶せり。釋迦、達磨も也た摸索不着ならん。南北東西歸去來と。些子の好境界在り」と、評の意は少し違つたが、何方へ見ても心次第ぢや。「夜深けて同じく看る千巖の雪と」、評はコレ迄で置きたい。「且らく道へ、是れ雙明か、雙暗か。是れ同條生か、是れ

同條死か。具眼の衲僧、試に甄別して看よ」と、コノ評は尾垂れぢや。

註釋 「泥團子」 泥土にて丸めたる彈丸の如きものを云ひ、無價値にして、何んの役にも立たざるに譬ふ。「泥拍板」 板又は版に作る。拍板は樂器なり。毛氈を以て上衣と爲せば音を發せず。泥團子と同意なり。「あり目通り」 ある儘に、即ち事實の儘にと云ふこと。「きよくつた」 曲つた、即ち弄する意。「大スカタン」 手ぬかりのこと。「手前の身はれ」 自分ばかりがケバ／＼しくすること。「ステツホウもない」 途方もないと云ふこと。「東勝身洲、西瞿耶尼洲」 共に須彌四洲の中。東西を云ひ表はす。

第五十二則 趙州石橋略約

【趙州石橋略約】

舉僧問趙州久響趙州石橋到來只見略約 ○也有人來持虎鬚 ○也是衲僧本分事 州云汝只見略約且不見石橋 ○慣得其便 ○這老漢賣身去也 僧云如何是石橋 ○上釣來也 ○果然 州云渡驢渡馬 ○一網打就 ○直得盡大地人無出氣處 ○一死更不再活

【和訓】 擧す。僧、趙州に問ふ、久しく趙州の石橋と響く、到來すれば只だ略約を見る。(○也た人有つて來つて虎鬚を持つ。○也た是れ衲僧本分の事。) 州云く、汝只だ略約を見て、且らく石橋を見ず。(○其の便を得るに慣へり。○這の老漢、身を賣り去る也。) 僧云く、如何なるか是れ石橋。(○釣に上り來れり。○果然。) 州云く、驢を渡し馬を渡す。(○一網に打就す。○直に得たり、盡大地の人氣を出す處無きことを。○一死更に再活せず。)

【提唱】 第五十二則、「趙州石橋略約」と、コノ則はサ、趙州、左之右之、只だ此の事を擧揚するを明すぢや。コノ則にも垂示が無くて直に本則ぢや。

本則

「擧す。僧、趙州に問ふ、久しく趙州の石橋と響く。到來すれば只だ略約を見る」と、コノ僧は一機を具する漢ぢや。驗主問に出て、趙州の働さ如何を見んと掛つた。趙州の石橋と評判は大いが、來て見りや、何んだ、獨木橋ぢやないかと。

「州云く、汝只だ略約を見て、且らく石橋を見ず」と、汝が眼には、ソナナ小さな橋ばかり見えて、大きな橋は見えぬのか。

「僧云く、如何なるか是れ石橋」と、コレを韓盧塊を逐ふと云ふぢや。コノ坊主も馬鹿坊主ぢや。

「州云く、驢を渡し馬を渡す」と、在家も出家も、猫も杓子もと云ふのか。是れ何んの道理ぞ。ウンと云へば喪身失命、スンと云へば拖泥滯水ぞ。趙州は口皮禪、全身是れ口ぢや。所謂語言三昧ぢ

や。室内で能く調べるが好い。

著語

コレから圓悟の著語ぢや。「擧僧問趙州久響趙州石橋到來只見略約」——「也た人有つて來つて虎鬚を持つ」、太い奴もあるものぢや。「也た是れ衲僧本分の事」、コノ一問、斯う有らいてはならぬ處ぢや。

「州云汝只見略約且不見石橋」——「其の便を得るに慣へり」、得手に帆ぢや、斯う出いでては叶はぬ。「這の老漢、身を賣り去る也」、コノ僧が堅に働かうと、横に働かうと、殺さうと喰はうと關はず、身を捨物にした。醉興な男ぢやわい。

「僧云如何是石橋」——「釣に上り來れり」、「果然」、ソリヤこそ、趙州にシテ遣られた。

「州云渡驢渡馬」——「一網に打就す」、文殊でも普賢でも、海老も鯨も、グイと一網に引冠せた。

「直に得たり、盡大地の人氣を出す處無きことを」、「渡驢渡馬」の大網を打つ掛けられては、盡大地の人、イキスギはならぬ。虫の息も出まい。「一死更に再活せず」、コノ僧、モウ助からぬ。趙州の働さ、活中に眼有り、還つて死に同じぢや。抜け切つた老僧ぞ。

趙州有石橋蓋李膺造也至今天下有名略約者即是獨木橋也其僧故意滅他威光問他道久響趙州石橋到來只見略約趙州便道汝只見略約且不見石橋據他問處也只是平常說

話相似趙州用去釣他這僧果然上鉤隨後便問如何是石橋州云渡驢渡馬不妨言中自有出身處趙州不似臨濟德山行棒行喝他只以言句殺活這公案好好看來只是尋常鬪機鋒相似雖然如是也不妨難湊泊一日與首座看石橋州乃問首座是什麼人造座云李膺造州云造時向什麼處下手座無對州云尋常說石橋問着下手處也不知又一日州掃地次僧問和尙是善知識爲什麼有塵州云外來底又問清淨伽藍爲什麼有塵州云又有一點也又僧問如何是道州云牆外底僧云不問這箇道問大道州云大道透長安趙州偏用此機他到平實安穩處爲人更不傷鋒犯手自然孤峻用得此機甚妙雪竇頌云

【和訓】 趙州に石橋有り、蓋し李膺造れり。今に至つて天下名有り。略約は即ち是れ獨木橋なり。其の僧、故意に他の威光を減じて、他に問ふて道く、久しく趙州の石橋と響く。到來すれば只だ略約を見る。趙州便ち道ふ、汝只だ略約を見て、且らく石橋を見ずと。他の問處に據らば、也た只だ是れ平常の説話に相ひ似たり。趙州用ひ去つて他を釣る。この僧果然として、釣に上つて、後に隨つて便ち問ふ、如何なるか是れ石橋。州云く、驢を渡し馬を渡すと。助けず、言中に自ら出身の處有ることを。趙州は、臨濟、徳山の棒を行し、喝を行す。に似ず。他、只だ言句を以て殺活す。この公案、好好に着來れば、只だ是れ尋常、機鋒を聞はしむるに相ひ似たり。然も是の如くなりとも、也た助けず湊泊し難きことを。一日、首座と石橋を見る。州、乃ち首座に問ふ、是れ什麼人か造れる。座云く、李膺造れり。州云く、造る時什麼の處に向つてか手を下す。座、對無し。州云く、尋常、石橋と説く。問着すれば手を下す處も也た知らずと。又た一日、州、掃地の次で、僧問ふ、和尙は是れ善知識。什麼と爲てか塵有る。州云く、外來底と。又た問ふ、清淨の伽藍、什麼と爲てか塵有る。州云く、又た一點有り、又た僧問ふ。如何なるか是れ道。州云く、牆外底。僧云く、這箇の道をば問はず、大道を問ふ。州云く、大道、長安に透ると。

趙州偏に此の機を用ひて、他、平實安穩の處に到つて、人の爲めにするに、更に鋒を傷り手を犯さず。自然に孤峻にして、此の機を用ひ得て甚だ妙なり。雪竇頌して云く。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢや。「趙州に石橋有り、蓋し李膺造れり。今に至つて天下名有り、略約は即ち是れ獨木橋なり」と、石橋に三有り、天臺、南岳、趙州の三處の石橋が是れぢや。ソシテ趙州の石橋は、昔時曾般と云ふ者が造つて、後に李膺が之れを補修したと云ふことぢや。「禪林類聚」には李膺が李春に作て有る。「夷堅志」と云ふ書を見ると、斯う有る。趙州城の南に石橋一座有り、乃ち曾般の造る處ぢや。橋の堅固なること、古今無二と云はれた。スルト其の州に姓を張と云ふ神があつた。張神が驢に騎つて橋を過ぐる時、笑ふて云ふのに、人は皆な此の橋堅く、柱堅固なりと云ふが、若し我れ過ぎなば、能く震動すること無からん乎と。是に於て橋に登れば、果して橋は動搖し、傾くが如くぢやつた。ソコデ曾般は下に在つて、手を以つて托定すると、堅壯なること元の如しと。今に至るまで、橋上には張神の騎る處の驢の頭尾四足の痕有り、橋下には亦た曾般の兩手の痕有りと云ふ。「其の僧、故意に他の威光を減じて」と、趙州を下目に掛けてサ。「他に問ふて道く、久しく趙州の石橋と響く、到來すれば只だ略約を見る。趙州便ち道ふ、汝只だ略約を見て、且らく石橋を見ずと。他の問處に據らば、也た只だ是れ平常の説話に相ひ似たり」と、コリヤ茶吞み話も同じぢ

や。「趙州用ひ去つて他を釣る」と、「石橋を見ず」と云ふたのは、コノ僧を釣つたのぢや。「這の僧果
然として、釣に上つて、後に随つて便ち問ふ、如何なるか是れ石橋。州云く、驢を渡し馬を渡すと。
妨げず、言中に自ら出身の處有ることを」と、イヤ／＼出身はない。趙州に和して喪身失命ぢや。
「趙州は、臨濟、徳山の棒を行し、喝を行するに似ず。他、只だ言句を以つて殺活す」と、趙州は只
だ平常の言句を以つて、人を殺したり活したりする。「這の公案、好好に看來れば、只だ是れ尋常、
機鋒を闘はしむるに相ひ似たり。然も是の如くなりと雖も、也た妨げず湊泊し難きことを」と、ぢ
やからコノ公案も、一寸見た處では、世話争論で口辯を弄してサ、出入口を云ひ合ふやうぢやがサ、
ソノ鋭さは、ナカ／＼寄り付けるものぢやない。「一日、首座と石橋を看る。州、乃ち首座に問ふ」
と、コリヤ知つて故に犯すぢや。「是れ什麼人か造れる」と、危い所問ぢや。首座機あらば、頰桁を
廻さん。「座云く、李膺造れり」と、ハヤ蹉過了ぢや。州云く、造る時什麼の處に向つてか手を下す」
と、コリヤ子供をこしらえるのに、ドコからこしらえ初めると云ふやうなものぢや。「座、對無し。
州云く、尋常、石橋と説く。問着すれば手を下す處も也た知らず」と、斯くの如く饒舌る者は、青か
黒かを見たが好い。「又た一日、州、掃地の次で、僧問ふ、和尚は是れ善知識。什麼と爲てか塵有る。
州云く、外來底と、外から吹き入れるぢや。此方には何があるものぞ、貴様のやうな奴が塵を擔つ
て來るぢやと。コノ答處は好なる則んば好、惜むべき而已ぢや。」又た問ふ、清淨の伽藍、什麼と爲

てか塵有る。州云く、又た一點有り」と、又た飛んで來たかと。コレは好い、コレで活き返つた。「又
た僧問ふ、如何なるか是れ道。州云く、墻外底」と、垣根の外ぢやとサ。ア、好いな。「僧云く、這箇
の道をば問はず、大道を問ふ。州云く、大道、長安に透ると、滴水滴凍、真似もならぬぞ。「趙州
偏に此の機を用ひて、他、平實安穩の處に至つて、人の爲めにするに」と、趙州は常にコノやうな
スサマジイ機を用ひるぢや。コレを「平實」と見たらば喪身失命ぢや、ツカもない。「更に鋒を傷り手
を犯さず、自然に孤峻にして、此の機を用ひ得て甚だ妙なり。雪竇頌して云く」と、孤峻でありな
がら、少つとも手味噌を付けぬ。頗る妙ぢや。サー雪竇の頌を見よ。

孤危不立道方高 ○須是到這田地始得 ○言猶在耳 ○還他本分草料 入海
還須釣巨鰲 ○坐斷要津不通凡聖 ○蝦蟇螺蚌不足問 ○大丈夫漢不可兩兩三三
堪笑同時灌溪老 ○也有恁麼人會恁麼來 ○也有恁麼用機關底手脚 解云
劈箭亦徒勞 ○猶較半月程 ○似則似是則未是

【和訓】 孤危立せず道方に高し。(○須らく是れ這の田地に到つて始めて得べし。○言猶は耳に在り。○他に本分の草料を還さ

提唱碧巖集 中卷 (第五十二則 趙州石橋略約)

ん。)海に入つて還つて須らく巨鰲を釣る可し。(○要津を坐斷して凡聖を通ぜず。○蝦蟇螺蚌問ふに足らず。○大丈夫の漢、
兩兩三三なる可からず。)笑ふに堪へたり同時の灌溪老。(○也た恁麼の人有つて、曾つて恁麼に來る。○也た恁麼に機關を
用ふる底の手脚有り。)劈箭と云ふことを解するも亦た徒に勞す。(○猶ほ半月程に較れり。○似たることは似たり。是なるこ
とは未だ是ならず。)

【提唱】

願 コレから雪竇の願ぢや。

「孤危立せず道方に高し」と、趙州の家風は、ガイにイキリもせず、平常の茶話のやうで、スサマ
ジイ稻荷の鳥居ぢや。

「海に入つて還つて須らく巨鰲を釣るべし」と、趙州の釣はサ、蝦や雜魚の知つたことではないぞ。
「笑ふに堪へたり同時の灌溪老」と、趙州と灌溪とは、表面は似たやうぢやがサ、全體タチが違つ
て居る。灌溪は志閑と云ふて、臨濟の法嗣ぢや。

「劈箭と云ふことを解するも亦た徒に勞す」と、灌溪もサ、「如何なるか是れ灌溪」と問はれて、「劈
箭急」と答へたことがある。サー言句は似たやうぢやが、無駄骨ぞ。趙州の「渡驢渡馬」と比べてみ
れば、又た引ッ違つたものぢや。

習語 コレから圓悟の著語ぢや。

「孤危不立道方高」——「須らく是れ這の田地に到つて始めて得べし」、サー趙州の本意を得てか
ら好きな口をさけ。真似をしたら、シタ、カナ目に逢ふべし。「言猶ほ耳に在り」、ア、忘れ難い家
風ぞ。「他に自分の草料を還さん」、手強い働きは趙州に任せて置くぢや。

「入海還須釣巨鰲」——「要津を坐斷して凡聖を通ぜず」、「驢を渡し馬を渡す」と云ふた處は、佛
祖と雖も通すものでない。「蝦蟇螺蚌問ふに足らず」、巨鰲を釣らいて何とせう。蝦や雜魚は勘定に
かゝらぬ。「大丈夫の漢、兩兩三三なる可からず」、コノ大事を呑み込んだ趙州の如きは、サウ澤山
あるものでない。

「堪笑同時灌溪老」——「也た恁麼の人有つて、曾つて恁麼に來る」、ソレでも灌溪も只者でない。
灌溪は大丈夫の器量で騒ぐと思へ。「也た恁麼に機關を用ふる底の手脚有り」、灌溪も趙州の如き立
ち上つた手脚がある。

「解云劈箭亦徒勞」——「猶ほ半月程に較れり」、趙州の句と比ぶれば、半月程の相違ぢや。「似た
ることは似たり、是なることは未だ是ならず」、似たのは只だ表面だけぢや。

孤危不立道方高 雪竇頌趙州尋常為人處 不立玄妙 不立孤危 不似諸方道 打破虛空 擊碎
須彌海底 生塵須彌鼓 浪方稱他祖師之道 所以雪竇道孤危不立道方高 壁立萬仞 顯佛法

奇特靈明雖然孤危峭峻不立孤危但平常自然轉轉地不立而自立不高而自高機出孤危方見玄妙所以雪竇云入海還須釣巨鰲看他具眼宗師等閑垂一語用一機不釣鰲螺蚌直釣巨鰲也不妨是作家ナレバ此一句用顯前面公案堪笑同時灌溪老不見僧問灌溪久響灌溪及乎到來只見箇漚麻池溪云汝只見漚麻地且不見灌溪僧云如何是灌溪溪云劈箭急又僧問黃龍久響黃龍及乎到來只見箇赤斑蛇龍云子只見赤斑蛇且不見黃龍僧云如何是黃龍龍云拖地僧云忽遇金翅鳥來時如何龍云性命難存僧云恁麼則遭他食噉去也龍云謝子供養此總是立孤危是則也是不免費力終不如趙州尋常用底所以雪竇道解云劈箭亦徒勞只如灌溪黃龍即且置趙州云渡牯渡馬又作麼生會試辨看

【和訓】孤危立せず道方に高しと、雪竇、趙州尋常爲人の處を頌す。玄妙を立せず、孤危を立せず。諸方に、虚空を打破し、須彌を擊碎し、海底に塵を生じ、須彌に浪を鼓す道ふて、方に他の祖師の道と稱するに似す。所以に雪竇道く、孤危立せず道方に高しと。壁立萬仞にして、佛法の奇特靈明を顯す。然も孤危峭峻なりと雖も、如かず孤危を立せざるには、但だ平常自然に轉轉地に、立せずして自ら立し、高からずして自ら高し。機、孤危を出で、方に玄妙を見る。所以に雪竇云く、海に入つて還つて須らく巨鰲を釣るべしと。看よ、他の具眼の宗師、等閑に、一語を垂れ、一機を用ひて、鰲螺蚌を釣らず、直に巨鰲を釣る。也た妨げず、是れ作家なることを。此の一句、用ひて前面の公案を顯す。笑ふに堪へたり同時の灌溪老と見ずや、僧、灌溪に問ふ、久しく灌溪と響く。到來するに及んで、只箇の漚麻池を見る。溪云く、汝只箇漚麻池を見て、且らく灌溪を見ず。僧云く、如何なるか是れ灌溪。溪云く、劈箭急と。又た僧、黃龍に問ふ、久しく黃龍と響く。到來するに及んで、只箇の赤斑蛇を見る。龍云く、子只箇赤斑蛇を見て、且らく黃龍を見ず。僧云く、如何なるか是れ黃龍。龍云く、拖地。僧云く、忽ち金翅鳥の來るに遇はん時如何。龍云く、性命存じ難し。僧云く、恁麼ならば他の食取に遭ひ去らん。龍云く、子が供養を謝すと。此れ總に是れ孤危を立す。是なることは也た是、死れず力を費すことを。終に趙州の尋常用ひる底に是如かず。所以に雪竇道く、劈箭と云ふことを解するも亦た徒に勞すと。只だ灌溪、黃龍の如きんば、即ち且らく置く。趙州云く、鰲を渡し馬を渡すと。又た作麼生か會せん。試に辨じて看よ。

【提唱】コレから圓悟の評ちや。孤危立せず道方に高しと。雪竇、趙州尋常爲人の處を頌す。玄妙を立せず、孤危を立せず。諸方に、虚空を打破し、須彌を擊碎し、海底に塵を生じ、須彌に浪を鼓すと道ふて、方に他の祖師の道と稱するに似すと、サ、趙州爲人の手段にはサ、玄妙も無けらにや孤危も無い。富士山の絶頂に大浪を打たせて、コレが宗旨ちやと云ふやうな、ケチなことは云はぬ男ぢや。所以に雪竇道く、孤危立せず道方に高しと、壁立萬仞にして、佛法の奇特靈明を顯す。然も孤危峭峻なりと雖も、如かず孤危を立せざるにはと、孤危を立せざる處の孤危が、本の孤危ぞ。但だ平常自然に轉轉地に、立せずして自ら立し、高からずして自ら高し。機、孤危を出で、方に玄妙を見る」と、機、位を離れ切つて、孤危の上を超出せではサ。ソんなら何を以つて超出する。難透の話頭を以つて超出するぞ。「所以に雪竇云く」と、コノ五字は衍文ぢや。海に入つて還つて須らく巨鰲を釣るべしと、等閑の者の手に入ることでないサ。「看よ、他の具眼の宗師、等閑に一語を垂れ、一機を用ひて、鰲螺蚌を釣らず、直に巨鰲を釣る。也た妨げず、是れ作家なることを」と、

チヨイと鈎かぎを垂たれても巨鰲こらを釣つるぢや。「此このの一句、用もちひて前面ぜんめんの公案こうあんを顯あらわす」と、コリヤ「渡驢渡馬どろどま」のスサマジイ句くを云いふたものぢや。「笑わらふに堪たへたり同時どうじの灌溪くわんせき老らうと。見みずや、僧そう、灌溪くわんせきに問とふ、久ひさしく灌溪くわんせきと響ひびく。到來とらいするに及およんで、只ただ箇このの漚麻池うまぢを見る」と、「漚麻池うまぢとはサ、麻あしを浸ひたす水の入いれてある小池せうぢぢや。「毛詩もうし」に、「東門とうもんに池いけ有り、以もつて麻あしを浸ひたす可べし」とある。「溪せき云いく、汝なんぢ只ただ漚麻池うまぢを見て、且かつらく灌溪くわんせきを見みず。僧そう云いく、如何いかなるか是こゝれ灌溪くわんせき。溪せき云いく、劈箭へつせん急いそと、足あしも立たたぬ箭やを射やる如ごとき急流いそぢや。止とまる處ところは無ない。「又また僧そう、黃龍わうりゆうに向むかふ」と、コノ僧そうと云いふのは、鼓山智岳こさんちがく了宗りょうそう禪師ぜんしぢや。又また黃龍わうりゆうとは、黃龍山わうりゆうざんの開山かいざん、晦機くわいぎ禪師ぜんしのことぢや。玄泉げんせんの彦ひこに嗣ついでぎ、彦ひこは巖頭いんとうに嗣ついでいだ。コレは「會元かいげん」に出いで居ゐる。「久ひさしく黃龍わうりゆうと響ひびく。到來とらいするに及およんで、只ただ箇このの赤斑蛇せきはんじを見る」と、「赤斑蛇せきはんじ」とは、ヤマカッシのことぢや。「龍りゆう云いく、子こ只ただ赤斑蛇せきはんじを見て、且かつらく黃龍わうりゆうを見みず」と、茲こゝで、コノ僧そう、「果然こゝろとして蒼天そうてん々々」と云いふたら、黃龍わうりゆうも寢ねられはせまいぞ。「僧そう云いく、如何いかなるか是こゝれ黃龍わうりゆう。龍りゆう云いく、拖拖地たいたいぢ」と、スラ／＼と這はひ出すと。コリヤ蛇へびの行いく貌かたちぢや、龍りゆうの行いく貌かたちとするは非たがひぢや。「僧そう云いく、忽たちち金翅鳥こんしじょうの來きるに遇あはん時とき如何いか」と、茲こゝに「果然こゝろとして赤斑蛇せきはんじ」と云いふたら、黃龍わうりゆうも水を飲のんで咽喉のどに入いるまい。「龍りゆう云いく、性命じやうめい存ぞんじ難がたし」と、コノラが奇妙きせうぢや、カウは働はたらかれぬぞ。コノ答こたへは話墮わだではないぞ、黃龍わうりゆうが直ただに金翅鳥こんしじょうに成なつて云いふた、見事けんじなものぢや。「紫野抄むらしのしょう」に、コノ後の評ひやうは尾垂おしだれになつて惡わるいとあるが、笑わらふ可べしぢや。妙處めうとはコレより後にこそあれぢや。「僧そう云いく、

恁麼んやならば他の食噉じきだんに遭あひ去いらん。龍りゆう云いく、子こが供養くわうやうを謝あやすと、茲こゝ、黃龍わうりゆうの働はたらきが現あらはれた。ハレヤレ、大いごそらさでヤス、モウ強つよひてくれるな。「此このれ總すべには是こゝれ孤危こゑを立たす。是こゝなることは也なり。免ゆるみず力を費つすことと」と、コノ一節いちせつは未審みしんしい。圓悟えんご、アンマリ趙州しやうしゅうの最負さいふが過ぎたぞ。灌溪くわんせきは合頭がつとうぢやがサ、黃龍わうりゆうは流石りゅうせきの宗匠そうじやうぢやものを。「終すまに趙州しやうしゅうの尋常じんじやう用もちひる底そこには如ごとかず。所以ゆゑに雪竇せつざう道どうく、劈箭へつせんと云いふことを解と解と解とするも亦また徒たがに勞あすと、無む默もく骨こつを折やつたとサ。「只ただ灌溪くわんせき、黃龍わうりゆうの如ごときさんば、即すなはち且かつらく置おく。趙州しやうしゅう云いく、驢ろを渡わたし馬ばを渡わたすと。又また作しやう麼ま生せいか會あせん。試たまに辨わじて看みよ」と。サ一諸人しよじん、高たかく眼まなこを着きけて、趙州しやうしゅうの「渡驢渡馬どろどま」を看みよ々々。

「イキスギはならぬ」息いきは付けぬと云いふこと。「青あおか黒くろかを見みたが好このい」正當せいとうな處ところを見み分わかけること。「イキリ」力ちからを入いれる、りきむ、氣張きぢやうること。「大いごぞらさ」大いおほに御馳走ごちそうと云いふ意い。

第五十三則 馬大師野鴨子 【馬大師野鴨子】

垂示すいじ云いく、徧界べんがい不藏ふざう、全機ぜんき獨露どくろ、觸途しよくと無滯むし、着着しやくしやく有あり、出身しゆしん之機のき、句下くげ無私むし、頭頭とうとう

有殺人之意且道古人畢竟向什麼處休歇試舉看

【和訓】垂示に云く、徧界藏さず、全機獨露す。途に觸れて滯り無く、着着出身の機有り。句下私無く、頭頭殺人の意有り。且らく道へ、古人畢竟什麼の處に向つてか休歇する。試に舉す、看よ。

【提唱】第五十三則、「馬大師野鴨子」と、コノ則是、馬大師傳ふる處、別に他事なきを明すぢや。初入處より終りの耳聾に至るまで、只だ是れ向上出身の一路のみぢや。

「垂示に云く、徧界藏さず、全機獨露す」と、直下更に纖翳無しぢや。十方世界、虫一疋殘すことなく、皆な剝き出した。瀬戸も街道も丸裸體ぢや。「途に觸れて滯り無く、着着出身の機有り」と、コリヤ途中爲人ぞ。「滯り無く」で、正位に證を取らない。サー大機用を具する人なりや、佛界に入つても魔界に入つても、何んの滯りもなく、一手く、打つも觸るも、身抜けの處があるぢや。「句下私無く。頭頭殺人の意有り」と、人の爲めに一句半句を吐くも、少しも陽陰がない。ぢやから拂子を擧げて、頭を振つても、悉く殺人の機がある。「殺人」とはサ、衲僧家は一旦死なねば活せぬからぢや。コリヤ本則の、百丈を殺さうとする馬祖の手段を含んで云ふたぢや。「且らく道へ、古人畢竟什麼の處に向つてか休歇する」と、コノ處を見て取れ。生死を透脱する人は誰ぞ。「試に舉す、看よ」と、サー本則を看よ。

よ」と、サー本則を看よ。

舉馬大師與百丈行次見野鴨子飛過 ○兩箇落草漢○草裏觀○慕願

作什麼 大師云是什麼 ○和尚合知 ○這老漢鼻孔也不知 丈云野鴨子

○鼻孔已在別人手裏 ○只管供款 ○第二杓惡水更毒 大師云什麼處去也 ○

前箭猶輕後箭深 ○第二回啗啄 ○也合自知 丈云飛過去也 ○只管隨他後轉

○當面蹉過 大師遂扭百丈鼻頭 ○父母所生鼻孔却在別人手裏 ○扳轉鎗

頭裂轉鼻孔來也 丈作忍痛聲 ○只在這裏 ○還喚作野鴨子得麼 ○還識痛痒麼

大師云何曾飛去 ○莫瞞人好 ○這老漢元來只在鬼窟裏作活計

【和訓】舉す。馬大師、百丈と行く次で、野鴨子の飛過するを見て。(○兩箇落草の漢。○草裏に觀す。○慕に願みて什麼か作さん。) 大師云く、是れ什麼ぞ。(○和尚合知の合し。○這の老漢、鼻孔も也知らず。) 丈云く、野鴨子。(○鼻孔已に別人の手裏に在り。○只管、款を供す。○第二杓の惡水更に毒なり。) 大師云く、什麼の處にか去る。(○前箭は猶輕く後箭は深し。○第二回啗啄す。○也た自知す合し。) 丈云く、飛過し去る。(○只管他の後に向つて轉す。○當面に蹉過す。) 大師遂

に百丈の鼻頭を捫る。(○父母所生の鼻孔、却つて別人の手裏に在り。○鎗頭を撰轉して、鼻孔を撰轉し來れり。) 丈、忍痛の聲を作す。(○只だ這裏に在り。○選つて喚んで野鴨子と作し得てん麼。○選つて痛痒を識る麼。) 大師云く、何んぞ曾つて飛び去らん。(○人を瞞すること莫んば好し。○這の老漢元來只だ鬼窟裏に在つて活計を作す。)

【提唱】

本則 コレから本則ぢや。

「舉す。馬大師、百丈と行く次で、野鴨子の飛過するを見て」と、馬大師爲人の處、徧界藏さずぢや。サー、事がナ、笛吹かうと云ふ處に野鴨を見た。

「大師云く、是れ什麼ぞ」と、馬大師、豈に野鴨子と知らざらんや。何んとして斯く云はれるぞ。

「丈云く、野鴨子」と、直心是れ道場ぢや。門外是れ什麼の聲ぞ。云く雨滴聲と云ふと同じぢや。

ツマリ鏡清と一般ぢや。

「大師云く、什麼の處にか去る」と、サー何んと、野鴨子は餅を買ひに行つたか、茶を買ひに行つたかと。ソロ／＼恐しいものが出て來た。併しコノ南天棒なりや、モット悟れと痛棒を與へやうに。

「丈云く、飛過し去る」と、ドコへ飛んだ。ハヤ通がらからした。スカタン／＼。

「大師遂に百丈の鼻頭を捫る」と、ソコで馬大師は、百丈の鼻面をグイと扭つた。是れ何んの道理、人殺さば須らく血を見るべしぢや。

「丈、忍痛の聲を作す」と、サー此の聲はドコから出たナ。馬祖が教へたでも百丈が學んだでもない。コレを識得すりや、參學の事畢んぬぢや。コリヤ雲門が、睦州の處で脚を折られて、アイタアイタと云ふたと同じぢや。

「大師云く、何んぞ曾つて飛び去らん」と、未だソコに居たさうだ、ソリヤ飛んで行つたか見ると。

著語 コレから圓悟の著語ぢや。

「舉馬大師與百丈行次見野鴨子飛過」——「兩箇落草の漢」、ドレも／＼、やかましいゴミゴクタぢや。「草裏に輓す」、エライ世話をやいたものだ。法の爲めかサ。「巖に顧みて什麼か作さん」、ワキヒラを顧みて何んとするぞ。併しサ、是れ子を顧み孫を思ふ處ぞ。

「大師云是什麼」——「和尚知る合し」、和尚(馬祖)は知つての筈ぢや、代つて云へ。「這の老漢、鼻孔も也た知らず」、百丈は自己の鼻孔をお留守にして居る程にサ。

「丈云野鴨子」——「鼻孔已に別人の手裏に在り」、百丈、自己の鼻孔を取つ外して居るから、馬大師に奪はれたぢや。「只管歎を供す」、剩へ口書を取られて、白狀するぢや。「第二杓の惡水更に毒なり」、未だ氣が付かぬか、又た惡水を浴せられた。コリヤ下へかけて見よ。

「大師云什麼處去也」——「前箭は猶ほ軽く後箭は深し」、初めの句より毒氣が酷いぞ。「第二回啗啄す」、殼の中を出ることがならぬで、二度まで母鷄に啄かれた。「也た自知す合し」、傍から啄き散

かすナ。コリヤ自知自得の外はない。

「丈云飛過去也」——「只管他の後に随つて轉ず」、只だ人のシッコに付いて廻つちや駄目々々。
「當面に蹉過す」、板の聲も、經の聲も、皆な蹉過ぢや。

「大師遂扯百丈鼻頭」——「父母所生の鼻孔、却つて別人の手裏に在り」、アツタラ大事の鼻を人手に掛けるわい。「槍頭を振轉して、鼻孔を裂轉し來れり」、「飛過し去る」と云ふたが見事を鎗頭なれども、遂に取られた。百丈の機をおつ取り返して問ふかと思へば、鼻面を振り上げた。

「丈作忍痛聲」——「只だ這裏に在り」、秘處も悟りも、コノ忍痛の處にとめた。「還つて野鴨子と作し得てん麼」、ソレが野鴨子か。「還つて痛痒を識る麼」、ナント野鴨子、痛さを知つたか。

「大師云何會飛去」——「人を瞞すること莫んば好し」、コノ和尚、滅多に人をナブリ者にせまいぞ。「這の老漢元來只だ鬼窟裏に在つて活計を作す」、コリヤ好下語ぢや。「何んぞ曾つて飛び去らん」と云ふたは、鬼窟裏の活計ぢや。元來其方の寢處は、空理の穴ではないか。

正眼觀來却是百丈具正因馬大師無風起浪諸人要與佛祖爲師參取百丈要自救不了參取馬祖大師看他古人二六時中未嘗不在箇裏百丈卯歲離塵三學該練屬大寂闍化南昌乃傾心依附二十年爲侍者及至再參於喝下方始大悟而今有者道本無悟處作箇悟門建

立此事若恁麼見解如獅子身中蟲自食獅子肉不見古人道源不深者流不長智不長者見不遠若用作建立會佛法豈到如今看他馬大師與百丈行次見野鴨子飛過大師豈不知是野鴨子爲什麼却恁麼問且道他意落在什麼處百丈只管隨他後走馬祖遂扭他鼻孔丈作忍痛聲馬祖云何會飛去百丈便省而今有底錯會纔問着便作忍痛聲且喜跳不出宗師家爲人須爲教徹見他不曾不免傷鋒犯手只要教他明此事所以道會則途中受用不會則世諦流布馬祖當時若不扭住只成世諦流布也須是逢境遇緣宛轉教歸自己十二時中無空缺處謂之性地明白若只依草附木認箇驢前馬後有何用處看他馬祖百丈恁麼用雖似昭昭靈靈却不在昭昭靈靈處百丈作忍痛聲若恁麼見去徧界不藏頭成現所以道一處透千處萬處一時透馬祖次日陞堂衆纔集百丈出卷却拜馬祖便下座歸方丈次問百丈我適來上堂未曾說法備爲什麼便卷却蕭丈云昨日被和尚扭得鼻孔痛祖云備昨日向甚處留心丈云今日鼻頭又不痛也祖云備深知今日事丈乃作禮却歸侍者寮哭同侍者問云備哭作什麼丈云備去問取和尚侍者遂去問馬祖祖云備去問取他看侍者却歸寮問百丈丈却呵呵大笑侍者云備適來哭而今爲什麼却笑丈云我適來哭如今却笑看他悟後阿鞞鞞地羅籠不住自然玲瓏雪竇頌云

【和訓】 正眼に觀來れば、却つて是れ百丈、正因を具す。馬大師、風無きに浪を起す。諸人、佛祖の與めに師と爲らんことを要せば、百丈に參取せよ。自救不了ならんことを要せば、馬祖大師に參取せよ。看よ、他の古人、二六時中、未だ嘗て箇の裏に在らずんばならず。百丈、卯歲にして塵を離れて三學該練す。大寂の化を南昌に開くに屬して、乃ち心を傾けて依附す。二十年侍者と爲る。再參するに至るに及んで、喝下に於て方に始めて大悟。而今有る者は道ふ、本と悟處無し。箇の悟門を作つて、此の事を建立すと。若し恁麼の見解ならば、獅子身中の蟲の、自ら獅子の肉を食ふが如し。見ずや、古人道く、源、深からざれば流、長ぜず。智、大ならざれば見、遠からずと。若し用ひて建立の會を作さば、佛法豈に如今に到らんや。看よ、他の馬大師百丈と行く次で、野鴨子の飛過するを見て、大師豈に是れ野鴨子と知らざらんや。什麼と爲てか却つて恁麼に問ふ。且らく道へ、他の意、什麼の處にか落在する。百丈、只管他の後に隨つて走る。馬祖遂に他の鼻孔を捫る。夫、忍痛の聲を作す。馬祖云く、何んぞ曾つて飛び去らんと。百丈便ち省す。而今有る底は錯つて會して、總かに問着すれば便ち忍痛の聲を作すと。且喜すらくば跳不出。宗師家、人の爲めにせんには、須らく爲めに徹せしむべし。他の會せざるを見て、免れず、鋒を傷り手を犯すことを。只だ他をして此の事を明めしめんことを要す。所以に道く、會する則んば途中受用、會せざる則んば世諦流布。馬祖當時扭住せずんば、只だ世諦流布と成らん。也た須らく是れ境に逢ひ縁に遇ひ、宛轉して自己に歸せしむべし。十二時中、空鉢の處無し、之れを性地明白と謂ふ。若し只だ依草附木にして、箇の驢前馬後を認めば、何んの用處か有らん。看よ、他の馬祖、百丈、恁麼に用ふることを。昭昭靈靈に似たりと雖も、却つて昭昭靈靈の處に住せず。百丈、忍痛の聲を作す。若し恁麼に見去らば、徧界藏さず、頭頭成現せん。所以に道ふ、一處透れば千處藏處一時に透ると。馬祖次の日陞堂、衆纒かに集る。百丈出で、拜席を卷却す。馬祖便ち下座。方丈に歸る。次で百丈に問ふ、我れ過來上堂、未だ曾つて說法せず、爾什麼と爲てか便ち席を卷却する。丈云く、昨日、和尚に鼻孔を捫せられて痛し。祖云く、爾昨日甚れの處に向つてか心を留めし。丈云く、今日鼻頭又た痛からず。祖云く、爾深く今日の事を知る。丈乃ち作禮す。却つて侍者寮に歸つて笑す。同事の侍者問ふて云く、爾笑して什麼か作さん。丈云く、爾去つて和尚に問取せよ。侍者遂に去つて馬祖に問ふ、祖云く、爾去つて他に問取して看よ。侍者却つて寮に歸つて百丈に問ふ、丈却つて呵呵大笑す。侍者云く、爾適來は哭す。而今什麼と爲てか却つて笑ふ。丈云く、我れ適來は哭す。如今は却つて笑ふと。看よ、他、悟つて後ち阿鞞鞞地。羅籠すれども住らず、自然に

玲瓏たることを。雪竇頌して云く。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢやが、コノ評には圓悟、腕力を出したぞ。最も仔細があるぢや。「正眼に觀來れば、却つて是れ百丈、正因を具す」と、コノ父子の商量をサ、ハツキリと見届けてみれば、却つて百丈が正因を具して居ると。「正因」とは、正因佛性と云ふて、了因佛性、緣因佛性と共に三因佛性と云ふ。正因佛性とは、有情非情、本有の根本を具す、元と自ら天然にして了せず。了因佛性とは、一偈半句、是れ佛性を了するぢや。緣因佛性とは、一花一香、佛法の緣因を結ぶぢや。サ、野鴨子と云ふて、ナンとせう。迷ふても野鴨子、悟つても野鴨子ぢや。百丈でも達磨でも、野鴨子とより外は見ぬ。コレは圓悟の腕力ぞ。「正因」が一本には正眼になつて居る。「馬大師、風無きに浪を起す」と、野鴨子と云ふて好いに、「什麼の處にか去る」と云ふたは、風無きに浪を起したぢや。「諸人、佛祖の與めに師と爲らんことを要せば、百丈に參取せよ」と、野鴨子と切つて放つた處、成程見事ぞ。「自救不了ならんことを要せば、馬祖大師に參取せよ」と、事無きに事を生じて落草した。「看よ、他の古人、二六時中、未だ嘗つて箇の裏に在らずんばならず」と、古人は斯くの如く、行住坐臥、正念工夫を怠らなかつたものぢや。「百丈卯歲にして塵を離れて三學該練す」と、「卯歲」とは七歳のことぢや、髪が兩方に分れて居るからぢや。又た了角とも云ふ。サ、七歳で出家してか

らに、經律論の三學を兼ね備へて居つた。「大寂の化を南昌に闇くに屬ふて、乃ち心を傾けて依附す。二十年侍者と爲る」と、「大寂」とは馬祖の諡號ぢや。江西隆興府の郡名を「南昌」と云ふ。即ち江西の馬祖の、宗風大に振ふに依り、之れに師事したのぢや。二十年も侍者をして居つて、本則に出て居る通り馬祖に鼻面を扭られ、忍痛の聲を作して後ち、又た四十餘年も従つたから、馬祖を離れたのは六十九歳ぢやと云ふ。古人の如何に道の爲めに熱心なるかを看よ。今時の者にや真似も出来まい。「再參するに至るに及んで、喝下に於て方に始めて大悟」と、再參の時、馬祖にカアット大喝せられて、百丈、三日釋聲になつたとサ、恐しい一喝ぢや。ノラクラ禪者共にコンナのを浴せ掛けて、息の根を止めてやりたい。百丈もコレ始めて大悟した。雪竇がコレを評してサ、「大冶の精金變色無し」と。是なることは是、中に就いて最も淺深があるぢや。「而今有る者は道ふ、本と悟處無し。箇の悟門を作つて、此の事を建立すと。若し恁麼の見解ならば、獅子身中の蟲の、自ら獅子の肉を食ふが如し」と、本と悟りと云ふものはない、態と拵へてみせるのぢやなどと云ふ邪師もあるがサ、ソリヤ獅子身中の蟲と云ふものぢや、自分で自分の身を亡すぢや。「見ずや、古人道く、源、深からざれば流、長ぜず。智、大ならざれば見、遠からず」と、コリヤ「管子」に出て居る、コノ語貴ぶ可しぢや。サー古人の刻苦を見よ、刻苦大なれば光明も亦た従つて盛大ぢや。「若し用ひて建立の會を作さば、佛法豈に如今に到らんや」と、釋迦が雪山に骨折り抜かれたればこそぢや。然もなければ今日に

至るまで嫡傳しては居らぬぞ。「看よ他の馬大師、百丈と行く次で、野鴨子の飛過するを見て、大師豈に是れ野鴨子と知らざらんや。什麼と爲てか却つて恁麼に問ふ。且らく道へ、他の意、什麼の處にか落在する」と、サー馬大師は野鴨子と云ふことを知らないであるものか。ナゼ知つて居りながら問ふたのぢや、馬大師の意はドウぢや。「百丈、只管他の後に隨つて走る」と、百丈が野鴨子と云ふたのは、自分の腕前で云ふたではない。「馬祖遂に他の鼻孔を扭る。丈、忍痛の聲を作す。馬祖云く、何んぞ會つて飛び去らんと、見ろ、ドコへ飛び去るものぢやと。「百丈便ち省す」と、ソコデ百丈も悟つた。「而今有る底は錯つて會して、纔かに問着すれば便ち忍痛の聲を作すと。且喜すらくば跳不出」と、忍痛の聲を作して、マギラカスのぢやなどと云ふ者もあるが、ソナ見解ぢや身動きもなるまい。「宗師家、人の爲めにせんには、須らく爲めに徹せしむべし」と、サー人の爲めにしやるとならば、必らず法の淵源に徹せしめなきやならぬ。「他の會せざるを見て、免れず、鋒を傷り手を犯すことを。只だ他をして此の事を明めしめんことを要す」と、百丈の氣の付かないのを見て、馬祖が百丈の鼻柱を扭つたのは老婆ぢやけれどもサ、是れ只だ百丈を人にしたい爲めばかりぢや。「所以に道く、會する則んば途中受用、會せざる則んば世諦流布」と、コリヤ歸宗智常禪師の語ぢや。コノ人も馬祖の法嗣ぢや。「會する則んば途中受用」で、箇々轉處に立在すぢや。是れ佛國土の因縁、菩薩の威儀ぢや。又た「會せざる則んば世諦流布」で、荆棘に在りぢや。世間の妄想ぢや。「馬祖

當時扭住せずんば、只だ世諦流布と成らん」と、ソノ時馬祖が百丈の鼻面を扭らなかつたら、只だ世上の物語りとなつて仕舞つたぢやらう。「也た須らく是れ境に逢ひ縁に遇ひ、宛轉して自己に歸せしむべし」と、萬物を以つて、ヒン丸めて自己とするぢや。「十二時中、空缺の處無し、之れを性地明白と謂ふ」と、味噌をするも、火を焚くも、打成一片ぢや。コレを「性地明白」と云ふぢや。「若し只だ依草附木にして、箇の驢前馬後を認めば、何んの用處か有らん」と、然りと雖も、性根のない奴がサ、「昭昭靈靈」を認めたならば、生死を通れることはならぬぞ。「看よ、他の馬祖、百丈、恁麼に用ふることを。昭昭靈靈に似たりと雖も、却つて昭昭靈靈の處に住せず」と、コリヤずるい書きやうぢやぞ。「百丈、忍痛の聲を作す。若し恁麼に見去らば、徧界藏さず、頭頭成現せん」と、忍痛の聲は、上、霄漢に透り、下、黄泉に徹するぞ。「所以に道ふ、一處透れば千處萬處一時に透ると、本當に透過せば、碧巖百則、一時にスム場がある。ナレドモ胡乱にすると役に立たぬぞ。馬祖次の日陞堂、衆纒かに集る。百丈出でて拜蓆を卷却す」と、馬祖が登る日陞堂した。スルト大衆の漸く集つた時に、百丈が拜蓆を卷いて仕舞つた。コリヤどうぢや。昨日の外道、今日の迦葉か。今日は好い機嫌ぢやノ。「馬祖便ち下座」と、流石に馬祖も作家ぢやわい。「方丈に歸る。次で百丈に問ふ、我れ適來上堂、未だ曾つて說法せず。爾什麼と爲てか便ち蓆を卷却する」と、ソコで馬祖は方丈へ歸ると、百丈を呼び寄せてサ、衲が未だ說法もしないのに、ナゼ貴様は蓆を卷いたのぢやと問ふた。

「丈云く、昨日、和尚に鼻孔を扭得せられて痛し」と、昨日、和尚に鼻を扭ねられて痛う御座ると。コリヤ好い働さぞ。「祖云く、爾昨日甚れの處に向つてか心を留めし」と、サ昨日の悟りの心はドウぢやつたと。人を殺さば須らく血を見るべしぢや。危い處ぞ。「丈云く、今日鼻頭又た痛からず」と、虎生じて三日にして牛を喰ふの機有りぢや。持ち扱ひ者め。「祖云く、爾深く今日の事を知る」と、コノ「今日」が「會元」には「昨日」となつて居る。コリヤ「昨日」の方が正しいぞ。「丈乃ち作禮す。却つて侍者寮に歸つて哭す。同事の侍者問ふて云く、爾哭して什麼か作さん。丈云く、爾去つて和尚に問取せよ。侍者遂に去つて馬祖に問ふ、祖云く、爾去つて他に問取して看よ、侍者却つて寮に歸つて百丈に問ふ」と、百丈がサ、侍者寮に歸つて哭して居るものぢやから、朋輩の侍者が心配してからに、彼方へ行つたり此方へ來たりして問ふたと見える。「丈却つて呵呵大笑す」と、今度は大聲を出して、カラ／＼と笑つた。侍者は呆氣に取られてサ、「侍者云く、爾適來は哭す、而今什麼と爲てか却つて笑ふ。丈云く、我れ適來は哭す、如今は却つて笑ふ」と、轉身自在。サテ／＼斯うも手味噌を付けぬやうに云はるゝものかサ。「看よ、他、悟つて後ち阿鞞鞞地。羅籠すれども往らず、自然に玲瓏たることを。雪竇頌して云く」と、かう云ふ働きの出来るのも馬祖に鼻の柱を扭ねられたからぢや。サ、雪竇の頌はドウぢや。

野鴨子 ○成群作隊○又有一隻 知何許 ○用作什麼○如麻似粟 馬祖見
 來相共語 ○打葛藤有什麼了期○說箇什麼○獨有馬祖識箇俊底 話盡山雲
 海月情 ○東家杓柄長西家杓柄短○知他打葛藤多少 依前不會還飛去
 ○因○莫道他不曾言○飛過什麼處去 欲飛去 ○鼻孔在別人手裏○已是與他下
 注脚了也 却把住 ○老婆心切○更道什麼 道道 ○什麼道○不可也教山僧道
 ○不可作野鴨子叫○蒼天蒼天○脚跟下好與三十棒○不知向什麼處去

【和訓】野鴨子。(○群を成し隊を作す。○又た一隻有り。) 知んぬ何許ぞ。(○用ひて什麼か作さん。○麻の如く粟に似たり。) 馬祖見來つて相ひ共に語る。(○葛藤を打して什麼の了期か有らん。○箇の什麼をか説かん。○獨り馬祖のみ有つて箇の俊底を識る) 話り盡す山雲海月の情。(○東家の杓柄は長く西家の杓柄は短し。○知んぬ他、葛藤を打すると多少ぞ。) 依前として會せず還つて飛び去る。(○因。○道ふこと莫れ、他言ふことを會せずと。○什麼の處にか飛過し去る。) 飛び去らんと欲す。(○鼻孔別人の手裏に在り。○已に是れ他の與めに注脚を下し了れり。) 却つて把住す。(○老婆心切。○更に什麼とか道はん。) 道へ道へ。(○什麼か道はん。○也た山僧をして道はしむ可からず。○野鴨子の叫を作す可からず。○蒼天蒼天。○脚跟下好し三十棒を與ふるに。○知らず什麼の處に向つてか去る。)

【提唱】

願 コレから雪竇の頰ぢや。

「野鴨子」と、野鴨子と云へば野鴨子、釋迦と云へば釋迦。サ、野鴨子、是れ什麼ぞ。コリヤ前三

三後三三の當體ぢや。

「知んぬ何許ぞ」と、萬象森羅、何處も彼處も限りはない。コレも前三三後三三か。

「馬祖見來つて相ひ共に語る」と、馬祖が、百丈の心底を見て取つてからに、相ひ共に語ると云ふのか。併しサ、何を見るときも語ることないぢやないか。

「話り盡す山雲海月の情」と、「野鴨子」と云ふた處で、心肝五臟を吐き出した。

「依前として會せず還つて飛び去る」と、アイ野鴨子で御座ると云ふたが、鴨は飛ばいで手前が飛んだわい。

「飛び去らんと欲す」と、サ、飛び去らんとする處をサ。

「却つて把住す」と、遣りはせぬとヒツタラと捉へた。

「道へ道へ」と、サ、諸人、道へ道へと。コリヤ雪竇の名作ぞ。居つても居られず、起つても起たれずサ。

著語 コレから圓悟の著語ぢや。

「野鴨子」——「群を成し隊を作す」、瀬戸も街道も野鴨子ぢや。「又た一隻有り」、又たコ、にも

一疋出た。

「知何許」——「用ひて什麼か作さん、數を止めての用は何んの役にも立たぬ。「麻の如く粟に似たり」、盡大地、「麻の如く粟に似たり」で、足が踏み立てられぬ。

「馬祖見來相共語」——「葛藤を打して什麼の了期が有らん」、滅多に語らばムサ／＼しい。何時と云つて果しがない。「箇の什麼をが説かん」、サー何を説く積りぢや。コリヤ「語る」と云ふに就いて云ふた。「獨り馬祖のみ有つて箇の俊底を識る」、百丈の俊底を見て取つたのは、只だ馬大師ばかりぢや。

「話盡山雲海月情」——「東家の杓柄は長く、西家の杓柄は短し」、何を語るかと思へばサ。コリヤ人々屋裏の閑家具ぢや。「知んぬ他葛藤を打すること多少ぞ」、語ることもないのにサ、「海月の情」などと云ふた、わ言を吐しくする。

「依前不會還飛去」——「因」、サー此奴、許すものでないと。コリヤ飛び去つて驚いた貌ぢや。「道ふこと莫れ、他言ふことを會せずと」、百丈道ひ得て分明ぢや。「什麼の處にか飛過し去る」、サー人々眼を着けて看よ。前に充ち後に塞る、當處を離れずぢや。

「欲飛去」——「鼻孔別人の手裏に在り」、人々具足底ぢやもの、飛び去らば別人の手裏に在らうぞ。「已に是れ他の與めに注脚を下し了れり」、鼻頭を拵つた端的は、是れ注脚を下したのぢやぞ。

「却把住」——「老婆心切」、イヤハヤ、馬祖拖泥ぢやぞ。「更に什麼とか道はん」、言詮も不及ぢや。コリヤ下の句へ掛けて看よ。

「道道」——「什麼か道はん」、コノ句は福本にはない。「也た山僧をして道はしむ可からず」、サー佛と云はうか祖と云はうか。圓悟もソレは云ふことならぬ。「野鴨子の叫を作す可からず」、利口めいた奴は野鴨子と云ふぢやらうがサ、ソナ眞似ぢや駄目駄目。「蒼天蒼天」、道得底のなき處から、「蒼天蒼天」で、ア、苦々しいわい。「脚跟下好し三十棒を與ふるに」、人々、本具の佛性を打さ破れ。「知らず什麼の處に向つてか去る」、コリヤ諸人へ向つて一撻したのぢやが、コノ句は好くない、削つた方がよろ。

雪寶劈頭便頌道野鴨子知何許且道有多少馬祖見來相共語此頌馬祖問百丈云是什麼丈云野鴨子話盡山雲海月情頌再問百丈什麼處去馬大師爲他意旨自然脫體百丈依前不會却道飛過去也兩重蹉過欲飛去却把住雪寶據款結案又云道道此是雪寶轉身處且道作麼生道若作忍痛聲則錯若不作忍痛聲又作麼生會雪寶雖然頌得甚妙爭奈也跳不出

【和訓】雪竇、劈頭に便ち頌して道く、野鴨子、知んぬ何許と。且らく道へ、多少か有る。馬祖見來つて相ひ共に語ると。此れは馬祖、百丈に問ふて云く、是れ什麼ぞ。丈、野鴨子と云ふを頌す。語り盡す山雲海月の情と。再び百丈に問ふて、什麼の處にか去ると云ふを頌す。馬大師、他の爲めにする意旨、自然に脱體なり。百丈、依前として會せず、却つて道く、飛過し去ると。兩重に蹉過す。飛び去らんと欲す、却つて把住すと。雪竇、款に據つて案を結す。又た云く、道へ道へと。此れは是れ、雪竇轉身の處。且らく道へ、作麼生か道はん、若し忍痛の聲を作さば錯。若し忍痛の聲を作さずんば、又た作麼生か會せん。雪竇、然も頌し得て甚だ妙なりと雖も、争奈せん、跳不出なることを。

【提唱】コレから圓悟の評ぢや。「雪竇、劈頭に便ち頌して道く、野鴨子、知んぬ何許と。且らく道へ、多少か有る」と、數限りはない、野鴨子で眼を突くな。「馬祖見來つて相ひ共に語ると。此れは馬祖、百丈に問ふて云く、是れ什麼ぞ。丈、野鴨子と云ふを頌す」と、コレデ諸勘定濟んだと云ふこととぞ。「語り盡す山雲海月の情と。再び百丈に問ふて、什麼の處にか去ると云ふを頌す。馬大師、他の爲めにする意志、自然に脱體なり」と、馬大師のせりつめた意志、「什麼の處にか去ると云ふた處は丸出しぢや。チットモ隠さぬ。「百丈、依前として會せず、却つて道く、飛過し去ると。兩重に蹉過す」と、コレで見れば前後ともに蹉過ぢや。「飛び去らんと欲す、却つて把住す」と、ドッコイ遣らぬと取り留めた。「雪竇、款に據つて案を結す」と、雪竇がサ、ソノ時の有様を有りの儘に書いて、馬祖の白狀を一々書き付けた。「又た云く、道へ道へと。此れは是れ、雪竇轉身の處、且らく道へ、作麼生か道はん。若し忍痛の聲を作さば錯。若し忍痛の聲を作さずんば、又た作麼生か會せん」と、

サ、如何云ふたら好いかサ。「雪竇、然も頌し得て甚だ妙なりと雖も、争奈せん、跳不出なることを」と、イカナ雪竇でも、コレ「野鴨子」は跳不出ぢや、出ることはならぬぞ。釋迦でも達磨でもサ。

【スカタシ】駄目と云ふこと。「ワキヒラ」傍のこと。「板の聲」板は法器なり。「隨前馬後」隨馬は本來の面目に譬ふ。前後は其のものに非らざる意を示す。即ち本物の前後に附隨するの意にして、主人公の面目に非らざるもの、似非物、つまらぬものを意味す。「昭昭靈靈」昭昭は日月を掲げて行くが如き明々たること。靈靈は精神作用の靈妙なるを云ふ。即ち心識の微妙にして明白なるを云ふ。

第五十四則 雲門近離甚處

【雲門近離甚處】

垂示云、透出生死、撥轉機關、等閑、截鐵斬釘、隨處蓋天蓋地、且道、是什麼人行履處、試舉看。

【和訓】垂示に云く、生死を透出し、機關を撥轉す。等閑に截鐵斬釘、隨處に蓋天蓋地。且らく道へ、是れ什麼人の行履の處ぞ。試に舉す、看よ。

【提唱】 第五十四則、「雲門近離甚處」と、コノ則はサ、豈に只だ馬大師のみならんや、雲門も亦た此の事を舉揚するを明すぢや。

「垂示に云く、生死を透出し」と、坐禪も誦經も、萬行を修するも、皆な生死を透出せんが爲めぢや。「機關を撥轉す」と、佛祖も超え難き機關を取つて返す。コリヤ理智を離れて示す處を云ふたぢや。コノ二句で雲門の機用を讚歎した。「等閑に截鐵斬釘」と、ソノやうな宗師なりや、悟れば奪ひ、會すれば切り放し、押し返し、穿鑿して削り抜いてサ、「隨處に蓋天蓋地」と、天地十方世界、一ト打に叩き碎くぢや。「且らく道へ、是れ什麼人の行履の處ぞ。試に擧す、看よ」と、サー斯ラ云ふ働きの出来るのは、ドンナ人ぞ。次ぎ下の本則を看よ。

擧雲門問僧近離甚處 ○不可也道西禪 ○探竿影草 ○不可道東西南北 僧

云西禪 ○果然可煞實頭 ○當時好與本分草料 門云西禪近日有何言

句 ○欲擧恐驚和尚 ○深辨來風 ○也似和尚翻似寐語 僧展兩手 ○敗闕了也

○勾賊破家 ○不妨令人疑着 門打一掌 ○據令而行 ○好打 ○快鞭難逢 僧云

某甲話在 ○爾待要翻款那 ○却似有機旗奪鼓底手脚 門却展兩手 ○驗

○駕與青龍不解騎 僧無語 ○可惜 門便打 ○不可過放 ○此棒合是雲門喫

何故當斷不斷返招其亂 ○閑黎合喫多少 ○放過一着 ○若不放過 合作慶生

【和訓】 擧す。雲門、僧に問ふ、近離甚れの處ぞ。○也た西禪と道ふ可からず。○探竿影草。○東西南北と道ふ可からず。僧云く、西禪。○果然として可煞だ實頭。○當時好し本分の草料を與ふるに。門云く、西禪近日何の言句か有りし。○擧せんを欲すれども恐らくは和尚を驚かさんことを。○深く來風を辨ず。○也た和尚に似て翻つて寐語するに似たり。僧、兩手を展ぶ。○敗闕し了れり。○勾賊破家。○妨げず人をして疑着せしむ。門、打つこと一掌。○合に據つて行す。○好打。○快鞭難逢。僧云く、某甲に話在り。○爾待要翻款を要することを待つ那。○却つて旗を擡き鼓を奪ふ底の手脚有るに似たり。門、却つて兩手を展ぶ。○驗。○青龍を駕與すれども騎ることを解せず。僧、無語。○可惜む可し。門、便ち打つ。○放過す可からず。○此の棒合に是れ雲門喫すべし。何が故ぞ、斷るべきに當つて斷らざれば、返つて其の亂を招く。○閑黎合に多少を喫すべし。○一着を放過す。○若し放過せずんば合に作慶生。

【提唱】

本則 コレから本則ぢや。

「擧す。雲門、僧に問ふ、近離甚れの處ぞ」と、ソリヤ又た一人の坊様が出て來た。コノ僧尋常の者でないぞ。

「僧云く、西禪」と、コノ「西禪」と云ふはサ、蘇州の西禪和尚のことぢや。コリヤ南泉の法嗣ぢや。雲門とは年代隔るに似たりと雖も、「傳燈」の十、和尚の章を見るに、僧問ハ、三乘十二分數は則ち問はず、如何なるか是れ祖師西來の々意と。師(西禪)拂子を擧して之れに示した。ソコデ其の僧、禮拜せずして去つたとある。又た雪峯に參して、許多の語有り。之れに依る則んば、時代、壽享を以つて雲門に及ぶ歟。又た曹山下には蜀川西禪と云ふがある。

「門云く、西禪近日何んの言句か有りし」と、雲門もサ、コノ僧が、「西禪」と云ふ面付、一通りならぬことは知つて居る。コノ僧、若し眞に作家なりや、雲門も倒退三千ぢや。油斷めさるな。

「僧、兩手を展ぶ」と、此奴、甘酢で喰へぬ奴ぢや。

「門、打つこと一掌」と、何が打つべき過があるぞ。コリヤ中々打たるゝものでない。雪竇も圓悟も出るものでない。何故なればサ、兩手を展べたは、痒い處へ手が届いたやうな、ソレをドウして打たるゝものぢや。實にハヤ、他の及ぶ處にあらず。雲門天子と云ふは茲にあるぞ。

「僧云く、某甲に話有り」と、私もチト云ひ分が御座ると。此奴頗るな奴ぢや。

「門、却つて兩手を展ぶ」と、サテ、膽の潰れたものぢや。「傳燈」千七百人中にもあるまい。

「僧、無語」と、遂と黙つた。

「門、便ち打つ」と、蓋天蓋地ぢやない、百人の知識が出る筈ぢや。見つンべし。

著語 コレから圓悟の著語ぢや。

「擧雲門問僧近離甚處」——「也た西禪と道ふ可からず」、ナンとか云ひやうがあつたらうにサ。

「西禪」とても云ひさうな面付ぢや。「探竿影草」、サグリを入れた、油斷するな。「東西南北と道ふ可からず」、圓悟、親切の下語。サウぢや、東とも西とも云ふな。雲門の問話は、百二十斤の鐵鎚を天邊から打ち下すやうぢやから。

「僧云西禪」——「果然として可煞だ實頭」、案の如くぢや、アンマリ正直者ぢや。「當時好し本分の草料を興ふるに」。初問の下で雲門をみしらさうものを、惜しいことをした。

「門云西禪近日有何言句」——「擧せんと欲すれども恐らくは和尚を驚かさんことを」、西禪の佛法、聞きたくば云ひませうがサ、聞いたらビツクリさつしやるべいと。コリヤ圓悟、コノ僧に代つての語ぢや。「深く來風を辨ず」、雲門、コノ僧を見ホシして再勸したぢや。「也た和尚に似て翻つて寐語するに似たり」、圓悟、コノ僧に代つて云はうには、西禪もソナタのやうに寢言を申すのサ。

「僧展兩手」——「敗闕し了れり」、コノ語は錯つて下したぢや。コリヤ敗闕でない、好い働さぞ。

「勾賊破家」、コノ僧、賊の手引をして身上を仕舞ふた。兩手を展べたのを雲門が打つたからぢや。「妨げず人をして疑着せしむ」、兩手を開いたは、何か事ありさうナ。

「門打一掌」——「令に據つて行す」、掟の通り打つた。是でも非でもサ。「好打」、コリヤ好い打

ち處ぢや。「快鞭逢ひ難し」、斯う云ふ打ち處は滅多にない。コ、で打たでナンとせう。

「僧云某甲話在」——「爾翻款を要することを待つ那」、證文の出し直しをしやうと云ふのか。「却つて旗を挽き鼓を奪ふ底の手脚有り」、お主はエライ奴ぢやナ。コリヤ弄して云ふたぢや、「似」と云ふ字が面白。

「門却展兩手」——「嶮、危い。僧が打つのに詔へ向きの處ぢや。「青龍を駕興すれども騎ることを解せず」、青龍に騎せてやらうと、ナンボ引き立て、も、引き立て甲斐のない奴ぢや。

「僧無語」——「惜む可し」、打つべき處ぢやにサ。

「門便打」——「過放す可からず」、コリヤ放してはならぬ。「此の棒合に是れ雲門喫すべし。何が故ぞ、斷るべきに當つて斷らざれば、返つて其の亂を招く」、コノ棒は、雲門お主が喫ふべきぢや。

雲門が手を展べた處で打つのが本當ぢや。「開黎合に多少を喫すべし」、ヤイ坊主、イクラ程喫はされたら足りるぞ。「一着を放過す」、未だ打ち様がヌルイ。「若し放過せずんば合に作麼生」、ソレならドウぢや。若し令に據つて行せば、大地の人皆な棒を喫ふてあらぞ。

雲門問、這僧近離甚處、僧云、西禪、這箇是當面話如閃電相似、門云、近日有何言句也、只是平常說話、這僧也不妨是箇作家、却到去驗、雲門便展兩手、若是尋常人、遭此一驗、便見手忙

脚亂他、雲門有石火電光之機、便打一掌、僧云、打即故是爭奈某甲話在這僧有轉身處、所以雲門放開却展兩手、其僧無語、門便打看他、雲門自是作家、行一步、知一步、落處會、瞻前亦解、願後不失蹤、由這僧只解瞻前不能願後、願後願

【和訓】 雲門、這の僧に問ふ、近離甚れの處ぞ。僧云く、西禪と。這箇は是れ當面の話、閃電の如くに相ひ似たり。門云く、近日何んの言句か有りしと。也た只だ是れ平常の說話。這の僧也た妨げず、是れ箇の作家なることを、却つて到り去つて雲門を驗す。便ち兩手を展ぶ。若し是れ尋常の人ならば、此の一驗に遭ふて、便ち手忙しく脚亂るゝことを見ん。他の雲門、石火電光の機有つて、便ち打つこと一掌す。僧云く、打つことは即ち故に是、爭奈せん、某甲話在るとを。這の僧、轉身の處有り。所以に雲門放開して、却つて兩手を展ぶ。其の僧無語。門便ち打つ。看よ他の雲門、自らは是れ作家なることを。一歩を行すれば一歩の落處を知る。前を瞻ることを會し、後を願ふことを解して、蹤由を失せず。這の僧、只だ前を瞻ることを解して、後を願ふこと能はず。願して云く。

【提唱】 コレから闡悟の評ぢや。「雲門、這の僧に問ふ、近離甚れの處ぞ。僧云く、西禪と。這箇は是れ當面の話、閃電の如くに相ひ似たり」と、コリヤ出合ひ頭ぢや、ビクともすると、内胃を見透されるぞ。「門云く、近日何んの言句か有りしと。也た只だ是れ平常の說話なり」と、併し送り狼ぢや、氣味の悪い。「這の僧也た妨げず、是れ箇の作家なることを」と、ナニ、作家の處があるものか。「却つて到り去つて雲門を驗す。便ち兩手を展ぶ。若し是れ尋常の人ならば、此の一驗に遭ふて、便ち手

忙しく脚亂る、ことを見ん」と、雲門のやうな人でなきや、カウ云ふ時には勝手がモメテ来るぢやらう。「他の雲門、石火電光の幾有つて、便ち打つこと一掌す」と、コ、がドウも及ばれぬ處ぢや。「僧云く、打つことは即ち故に是。争奈せん、某甲話在ることを」と、打つたつしやるのも随分好う御座るが、身共が方にも、少しばかり云ひたいことが有ると。「この僧、轉身の處有り」と、コレで一働さすべいと掛つた。「所以に雲門放開して、却つて兩手を展ぶ」と、ソコで雲門がコノ僧を見んとして網を張つた。「其の僧無語。門便ち打つ。看よ他の雲門、自らはれ作家なることを。一步を行すれば一步の落處を知る」と、左へ廻れば右へ抜け、右へ廻れば左へ抜けぢや。「前を瞻ることを會し、亦た後を顧ることを解して蹤由を失せず」と、八方睨みぢやから、由來筋道を違へぬ。「この僧、只だ前を瞻ることを解して、後を顧ることは能はず。頌して云く」と、コノ坊主は數睨みぢやから、本當のことは見えぬのぢや。サー頌を看よ。

虎頭虎尾一時收

○殺人刀活人劍○須是這僧始得○千兵易得一將難求 凛

凛威風四百州

○坐斷天下人舌頭○蓋天蓋地 却問不知何太峻 ○不可盲枷瞎棒○雪竇元來未知在○閻黎相次着也 師云放過一着 ○若不放過

又作麼生○盡天下人一時落節○擊禪床一下

【和訓】 虎頭虎尾一時に收む。(○殺人刀活人劍。○須らく是れ這の僧にして始めて得べし。○千兵は得易く一將は求め難し。○凛威風たる威風四百州。(○天下の人の舌頭を坐斷す。○蓋天蓋地。) 却つて問ふ知らず何んぞ太だ峻なる。(○盲枷瞎棒す可からず。○雪竇元來未知知らざること。○閻黎相次着也。) 師云く一着を放過す。(○若し放過せずば又た作麼生。○盡天下の人一時に落節す。○禪床を撃つこと一下。)

【提唱】

コレから雪竇の頌ぢや。

「虎頭虎尾一時に收む」と、コノ僧、虎のやうな奴ぢやがサ、雲門能く捉へた。

「凛凛たる威風四百州」と、コリヤ雲門を美めたのぢや。雲門のやうな人は、四百州にも稀れぢやと。コノ語甚だ新鮮、雪竇のトットキぞ。

「却つて問ふ知らず何んぞ太だ峻なる」と、ドコに加減、何がホウカの種で「太だ峻なる」ぢや。イヤ外のもが種ではない、まだ「一手許した、コレぢや存分ではないぞ。サー雪竇、諸人に問ふて、雲門の機鋒はナゼ是のやうぢやと問ひ掛けて打ち置かれた。コノ三句で頌し盡したぢや。末後の句は頌の中ではない、結語のやうなものぢや。

「師云く一着を放過す」と、コノ「師」といふは雪竇のことぢや。サーこの句を見徹する者は、天下を一拂するぢやが、恐らくは一箇も無けん。雲門宗の大事、此の中にありぢや。

著語 コレから圓悟の著語ぢや。

「虎頭虎尾一時收」——「殺人刀活人劍」、殺すも活すも、雲門の手裏に在る。「須らく是れ這の僧にして始めて得べし」、コノ坊主、アタレ者ぢやに依つて、コノ矢が出た。雲門の相手にはコノ僧で無くてはと弄したぢや。「千兵は得易く一將は求め難し」、雲門のやうなは容易く得られぬぢや。「凜凜威風四百州」——「天下の人の舌頭を坐断す」、茲が手に入ると、智者でも愚者でも、人に口は開かさぬ。「蓋天蓋地」、凜凜たる威風には、天上天下、頭をあげるものはない。

「却問不知何太嶮」——「盲枷瞎棒す可からず」、ソウ云ふたとて、滅多に打つなよ。「枷」は枷で、五穀を打つ棒ぢや、日本で麥を打つやうなものぢや。「雪竇元來未だ知らざること有り」、雲門の手段に至つては、雪竇ですら、知らぬことがあるぞ。「閻黎相次着也」、けれども念を入れたら知らずも知れぬと弄した。

「師云放過一着」——「若し放過せずんば又た作麼生」、放過しなければサー如何ぢやと。コノ下語では本意を失するぞ。「盡天下の人一時に落節す」、サウなれば、天下の人は一時に立場がなくなるぢやらう。「禪床を撃つこと一下」、コレで雪竇及び圓悟の葛藤を收めた。

雪竇頌得此話極易會大意只頌雲門機鋒所以道虎頭虎尾一時收古人云據虎頭收虎尾第一句下明宗旨雪竇只據款結案愛雲門會據虎頭又能收虎尾僧展兩手門便打是據虎頭雲門展兩手僧無語門又打是收虎尾頭尾齊收眼似流星自然如擊石火似閃電光直得凜凜威風四百州直得盡大地世界風颯颯地却問不知何太嶮不妨有嶮處雪竇云放過一着且道如今不放過時又作麼生盡大地人總須喫棒如今禪和子總道等他展手時也還他本分草料似則也似是則未是雲門不可只恁麼教爾休也須別有事在

【和訓】 雪竇、此の話を頌し得て、極めて會し易し。大意只だ雲門の機鋒を頌す。所以に道く、虎頭虎尾一時に收むと。古人云く、虎頭に據つて虎尾を收むるは、第一句下に宗旨を明むと。雪竇只だ款を據つて案を結す。雲門の、虎頭に據ることを會して、又た能く虎尾を收むることを愛す。僧、兩手を展ぶ。門、便ち打つ。是れ虎頭に據るなり。雲門、兩手を展ぶ、僧無語。門又た打つ。是れ虎尾を收むるなり。頭尾齊しく收めて、眼、流星に似たり。自然に擊石火の如く、閃電光に似たり。直に得たり、凜凜たる威風四百州と。直に得たり盡大地世界、風颯颯地なることを。却つて問ふ知らず何んぞ太だ嶮なるかと。妨げず嶮處有ることを。雪竇道く、一着を放過すと。且らく道へ、如今放過せざる時又た作麼生。盡大地の人、總に須らく棒を喫すべし。如今の禪和子總に道ふ、他の手を展ぶる時を等つて、也た他に本分の草料を還さんと。似たる則は也た似たり、是なる期は未だ是ならず。雲門只だ恁麼に備をして休せしむ可からず。也た須らく別に事の在る有るべし。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢや。「雪竇、此の話を頌し得て、極めて會し易し」と、イヤ／＼大いに

會し難いぞ。「大意只だ雲門の機鋒を頌す」と、雲門は暫らく置き、雪竇の一句、天に倚る長劍ちやものをサ。「所以に道く、虎頭虎尾一時に收むと。古人云く、虎頭に據つて虎尾を收むるは、第一句下に宗旨を明むと」、コノ第一句で佛法の筋骨を抜いて置いたと。コノ古人は羅山の道閑ちや。「雪竇只だ款に據つて案を結す。雲門の、虎頭に據ることを會して、又た能く虎尾を收むることを愛す」と、併しコリヤ愛するではないぞ。雪竇、上の事をば片付けて置いてサ、第一は一着の放過を知らさせたぢや。「僧、兩手を展ぶ。門、便ち打つ。是れ虎頭に據るなり。雲門、兩手を展ぶ。僧無語。門又た打つ。是れ虎尾を收むるなり。頭尾齊しく收めて、眼、流星に似たり。自然に擊石火の如く、閃電光に似たり。直に得たり、凛凛たる威風四州と。直に得たり盡大地世界、風颯颯地なることを。却つて問ふ知らず何んぞ太だ嶮なると。妨げず嶮處有ることを」と、コレは讀んだ通りで、別に云ふこともない。「雪竇云く、一着を放過すと」、コレは通り道の者の、上汗も吸ふことはならぬ場ぢや。「且らく道へ、如今放過せざる時又た作麼生。盡大地の人、總に須らく棒を喫すべし。如今の禪和子總に道ふ、他の手を展ぶる時を待つて、也た他に本分の草料を還さんと。似たる則は也た似たり、是なる則は未だ是ならず」と、雲門が兩手を展べた處で打つてやらうと云ふ者もあるが、ソレぢや未だく届かぬ。「雲門只だ慇懃に働をして休せしむ可からず」と、若し雲門に棒ダテでもしやうぞならば、只は置くまいぞよ。「也た須らく別に事の在る有るべし」と、サー雲門には別に仔細のあることと思へ。

ことと思へ。

註釋 「何がホウカの種類」 何か手品の種でもあつてのことか。「棒ダテ」棒立にして、抵抗するの意。

第五十五則 道吾漸源弔孝

〔道吾漸源弔孝〕

垂示云穩密全眞當頭取證涉流轉物直下承當向擊石火閃電光中坐斷誦訛於據虎頭收虎尾壁立千仞則且置放一線道還有爲人處也無試舉看

〔和訓〕 垂示に云く、穩密全眞當頭に取證し、涉流轉物、直下に承當す。擊石火閃電光中に向つて、誦訛を坐斷し、虎頭に據つて虎尾を收むるに於て、壁立千仞なることは且らく置く。一線道を放つて還つて爲人の處有りや、也た無や。試に舉す、看よ。

【提唱】 第五十五則、「道吾漸源弔孝」と、コノ則は、即ち參禪は本と生死到來の爲めに此の事を用ひ得て、出身の一路有るを要するとを明すぢや。是の以に須らく道吾、漸源の一則を究むべく、最も參取すべしぢや。今時の人皆な輕薄にして、古人の則を失するぞ。

「垂示に云く、穩密全眞」と、コリヤ把住ぢや、言詮不及の地、機用に涉らずして、其の儘「全眞」ぞ。即ちスツキリとサシなしの紫磨黃金ぢや。サ一難透を透過しさへすれば、何處も彼處も紫磨黃金ぞ。コ、をサ、「堂頭に取證し」と、業を改めず、擧足下足、皆な本分ぢや。長者は長法身、短者は短法身ぢや。「涉流轉物」と、コリヤ放行ぢや。一切事に渡つて、逆行順行、物を轉ずるぢや。菩提心でやれば、味増をするも、歌ふも舞ふも四辯八音の說法ぢや。頭々物々、皆な是れ本地の風光と轉じなすぢや。白雲守端禪師が、コノ「涉流轉物」を頌して云ふのに、「物理詎んぞ應に忽にすべけん、時に逢へば各々鳴くとを解す。亂蛙雨を迎へて急に、狐歎霜を帯びて清し。歴々何んぞ先後あらん、寥々性情を異にす。泪羅醉者を嫌ふ、病分明ならざるに在り」と、コレは「普燈錄」の二十九に出て居る。醉ふた者も皆な流に涉つて物を轉ずるものを、嫌ふ處は小見の爲めぢやと云ふことぢや。サ一茲をも、「直下に承當す」と、是れ何んと承當する。本地の風光と承當するぞ。或る説にサ、「穩密全眞」は自行ぢや、「涉流轉物」は化他ぢやと。コレは教意ぢや、取るに足らない。蓋し「穩密全眞」は、風吹けども入らず、水洒げとも着かず、都盧一團の鐵ぢや。全眞實際理地、一塵を

も涉けざる貌ぢや、已上は自受用で、已下は他受用ぢや。「擊石火閃電光中に向つて」と、上求菩提、下化衆生の處でサ、チヨロリとすると、モウ遁さん。「講訛を坐斷し」と、學者の講訛、即ち入り組みを尻に引ッ敷いてサ。「虎頭に據つて虎尾を收むるに於て、壁立千仞なることは且らく置く」と、學者を従へるのぢやが、コノやうに、ナカク齒も立たせぬ手段は且らく置き。「一線道を放つて還つて爲人の處有りや也た無や。試に擧す、看よ」と、サ一手法放して、第二機に涉つて、ドウ説得するか本則に就いて看よ。

舉道吾與漸源至一家弔慰源拍棺云生邪死邪 ○道什麼 ○好不惺惺 ○這漢猶在兩頭 吾云生也不道死也不道 ○龍吟霧起虎嘯風生 ○買帽相頭 ○老婆心切 源云爲什麼不道 ○蹉過了也 ○果然錯會 吾云不道不道 ○惡水蘸頭澆 ○前箭猶輕後箭深 回至中路 ○太惺惺 源云和尚快與某甲道若不道打和尚去也 ○却較些子 ○竿逢穿耳客多遇刻舟人 ○似

這般不啣囉漢入地獄如箭 吾云打即任打道即不道 ○再三須重事○就身

打劫○這老漢滿身泥水○初心不改 源便打○好打○且道打他作什麼○屈棒元來

有人喫在 後道吾遷化源至石霜舉似前話 ○知而故犯○不知是 不是

○是則也太奇 霜云生也不道死也不道 ○可煞新鮮○這般茶飯却元來有

人喫 源云爲什麼不道 ○語雖一般意無兩種○且道與前來問是問是別 霜

云不道不道 ○天上天下○曹溪波浪如相似無限平人被陸沈 源於言下有

省 ○瞎漢○且莫瞞山僧好 源一日將鉢子於法堂上從東過西從西

過東 ○也是死中得活○好與先師出氣○莫問他○且看這漢一場懺懺 霜云作

什麼 ○隨後婁藪也 源云覓先師靈骨 ○喪車背後拋藥袋○悔不償當初

○備道什麼 霜云洪波浩渺白浪滔天覓什麼先師靈骨 ○也須還

他作家始得○成群作隊作什麼 雪竇着語云蒼天蒼天 ○太遲生○賊過後

張弓○好與一坑埋却 源云正好着力 ○且道落在什麼處○先師曾向備道什麼

○這漢從頭到尾直至如今出身不得 太原孚云先師靈骨猶在 ○大衆見麼
○閃電相似○是什麼破草鞋○猶較些子

【和訓】 擧す。道吾、漸源と一家に至つて事。源、槍を拍つて云く、生か死か。(○什麼と道ふぞ。○好し惶懼ならず。○この漢猶ほ兩頭に在り。) 吾云く、生とも也た道はじ、死とも也た云はじ。(○龍吟すれば霧起り、虎嘯けば風生ず。○帽を買ふに頭を相す。○老婆心切。) 源云く、什麼と爲てか道はざる。(○踏過了也。○果然として、錯つて會す。) 吾云く、道はじ、道はじ。(○惡水灘頭に瀕ぐ。○前箭は猶ほ輕く後箭は深し。) 回つて中路に至つて。(○太だ惶懼。) 源云く、和尚快く某甲が與めに道へ、若し道はずんば和尚を打し去らん。(○却つて些子に較れり。○穿耳の客に逢ふこと罕なり、多くは舟を刻む人に遇ふ。○這般の不啣囉の漢に似たらば、地獄に入ること箭の如し。) 吾云く、打つことは即ち打つに任す、道ふことは即ち道はじ。(○再三須らく事を重んずべし。○就身打劫。○這の老漢滿身泥水。○初心改めず。) 源、便ち打つ。(○好打。○且らく道へ、他を打つて什麼か作さん。○屈棒元來人の喫する在り。○後には道吾遷化す。源、石霜に至つて前話を舉げ可煞だ新鮮。○這般の茶飯却つて元來人の喫する有り。源云く、什麼と爲てか道はざる。(○語、一般なりと雖も、意に二種無し。○且らく道へ、前來の問と是れ同か是れ別か。) 霜云く、道はじ、道はじ。(○天上天下。○曹溪の波浪如し相ひ似たらば、限り無き平人も陸沈せられん。) 源、言下に於て省有り。(○瞎漢。○且つ山僧を購すること莫んば好し。) 源、一日鉢子を將つて、法堂上に於て、東從り西に過ぎ、西從り東に過ぐ。(○也た是れ死中に活を得たり。○好し先師の與めに氣を出すに。○他に問ふこと莫れ。○且らく看よ、這の漢一場の懺懺。) 霜云く、什麼をか作す。(○隨後婁藪也。) 源云く、先師の靈骨を覓む。(○喪車背後に藥袋を抛つ。○悔ゆるは當初を慎まざりしことを。○備什麼と道ふぞ。) 霜云く、洪波浩渺、白浪滔天、什麼の先師の靈骨をか覓めん。(○也た須らく他の作家に還して始めて得べし。○群を成し隊を作して什麼か作さん。)

雪寶着語して云く、蒼天蒼天。(○太遲生。○賊過ぎて後ち弓を張る。○好し與に一坑に埋却するに。) 源云く、正に好し力を着くるに。(○日らく道へ、什麼の處にか落在する。○先師曾つて備に向つて什麼とか道ひし。○道の漢頭從り尾に到り、直に如今に至るまで出身すること得じ。) 太原の字云く、先師の靈骨猶ほ在り。(○大衆見る處。○閃電に相ひ似たり。○是れ什麼の破草鞋ぞ、○猶ほ些子に較れり。)

【提唱】

本則 コレから本則ぢや。

「擧す。道吾、漸源と一家に至つて弔慰す、源、棺を拍つて云く、生か死か」と、道吾は圓智と云ふて藥山の法嗣ぢや。又た漸源は仲興禪師と云ふた人で、コノ時は道吾の侍者をして居つた。サ、道吾、漸源を伴つて或家へ弔みに行つたと見える、「弔慰」とはサ、人の死を訪ふのぢや、物を贈るではない、只だ弔ふのぢや。ス、漸源が棺を拍つて、「生か死か」と問ふた。佛は不生不滅と云ふたが、お前はドウぢやとサ。コノ漸源は有機の漢ぢやが、併しハヤ生死に涉つた、落節ぢや。サ、諸人、「生か死か」、七尺單前に向つて工夫してみよ。若し會らなけりや、門前の石地藏に問ふて來し。

「吾云く、生とも也た道はじ、死とも也た道はじ」と、盤に和して托出す夜明珠ぢや。好言語々々。是れ「低頭歸庵」の旨ぢやぞ。コノ南天棒ならばサ、「即今爾は是れ活底か、是れ死底か」と云

はうぞ。

「源云く、什麼と爲てか道はざる」と、漸源の奴、道吾が秘して云はぬのぢやと思ふたから、カウ問ふた。馬鹿め。

「吾云く、道はじ、道はし」と、コリヤ没巴鼻ぢや。七賢女の「作麼々々」と云ふと如何ぢや。

「回つて中路に至つて」と、道吾に「道はじ道はじ」と云はれて、漸源、ムシ／＼と腹が立つたものぢやから、歸り途になつてサ。

「源云く、和尚快く某甲が興めに道へ、若し道はずんば和尚を打し去らん」と、コノ「快く」と云ふのは、「急」の意ぢや。大馬鹿者め、ドコまでも道へ々と吐しくさる。ナセ手前で即今コノ座敷は生か死かと究めて見ぬ。困つた鶉の糞ぢや。

「吾云く、打つことは即ち打つに任す、道ふことは即ち道はじ」と、天に倚る長劍ぢや、實に有り難い、是れは大慈大悲と思へ。

「源、便ち打つ」と、思ひ知つたかとサ。覺えもないことを、イヤハヤ残念千萬ナ。

「後に道吾遷化す。源、石霜に至つて前話を擧似す」と、漸源は道吾の慈悲で轉轉し、ソノ後住庵の時大悟したなれども、ソノ時道吾は已に遷化されたものぢやから、石霜の處へ行つたとみえる。コ、が「傳燈」と「會元」とは少し違つて居る。「傳燈」では、石霜の處で大悟したとあるが、コリヤを

かしい。「會元」には、「源、石霜に到つて一轉語を請ふ」とあつて、漸源大悟して後、昔日の事を悔いて懺悔せんが爲め、又た見解を呈して、證明を求めんが爲めに行つたとある。コノ方が好い。コノ圓悟の下語は「傳燈」に依つたのぢや。

「霜云く、生とも也た道はじ、死とも也た道はじ」と、道吾の答を其の儘に云ふた、コリヤ可憐だ親切ぢや。

「源云く、什麼と爲てか道はざる」と、龜心猶ほ改めず、昔しの儘ぢや。

「霜云く、道はじ、道はじ」と、大機大用、盤に和して托出す夜明珠ぢや。

「源、言下に於て省有り」と、ハア、今迄は錯つたとサ。虚空消殞、サテ／＼今迄は鬢もソ、ゲズに居るものを、可愛や、「省有り」は少しばかりのことぢや。一旦眞黑暗になつた處より、吹返さなければツでない。コレ等の處より疑を起せ。ソレでもマア氣が付いて好かつたわい。

「源、一日鎌子を將つて、法堂上に於て、東從り西に過ぎ、西從り東に過ぐ」と、コリヤ徳山の二の舞のやうぢやがサ、見事なものぢや。死漢が活きて働くだ。歩々清風を起すか。

「霜云く、什麼をか作す」と、何をするのぢやと。コリヤとんとはまつたぞ。

「源云く、先師の靈骨を覓む」と、道吾が宗旨を呑み込み切つたのぢや。

「霜云く、洪波浩渺、白浪滔天、什麼の先師の靈骨をか覓めん」と、十方法界、一團の靈骨ぢやも

のを、靈骨を覓めるのは、海中に入つて水を尋ねるがやうぢやと。併しサ、是れ眞の宗匠の語ではないぞ。ぢやから雪竇も許さない、コレが「蒼天々々」ぢや。茲で毒氣を浴せかければ好いにサ。間拔けな石霜ぢやわい。

「雪竇着語して云く、蒼天蒼天」と、雪竇、しかめツ面をして、ア、苦々しいわいと。コノ著語は、八意界を具した語ぞ、「碧巖」中の鏡ぢや。斷る可きに當つて斷つたぞ。

「源云く、正に好し力を着くるに」と、サテ／＼お助け下されて、忝ふ御座ると、師の慈恩を謝したのぢや。甚だ好言語、老僧ども見損ふな。

「太原の孚云く、先師の靈骨猶ほ在り」と、「正に好し力を着くるに」と云ふに代つて云ふたが、スサマジイものぢや。己もコノ語を見て、ゾツとしたぞ。老僧ども見錯るな。コレが南天棒が拖泥滯水ぞ。海神貴さことを知つて價を知らずぢや。「太原の孚」は雪峯の法嗣ぢや、敢て禪苑に出世せず、一生上座で終つた人ぢや。

【著語】 コレから圓悟の著語ぢや。

「學道吾與漸源至一家弔慰源拍棺云生邪死邪」——「什麼と道ふ」、コレは面白い、汝は今生れたか死んだか。「好し惺惺ならず」、コノ鈍漢めが、汝が身を見よ。「這の漢猶ほ兩頭に在り」、此奴まだ生死の二途に涉つて居るわい。

「吾云生也不道死也不道」——「龍吟すれば霧起り、虎嘯けば風生ず」、道吾の機用、見事なものぢや。問ふに随つて答へた程にサ。「帽を買ふに頭を相す」、恰好よく答へた。相應して居るぞ。「老婆心切」、併しコリヤ老婆ぢや。

「源云爲什麼不道」——「蹉過了也」、漸源、ハヤ取ッ放いた。「果然として錯つて會す」、ソレ見たことか。道吾が心肝を吐き出したのを、貴様は遁らかした。

「吾云不道不道」——「惡水驀頭に澆ぐ」、雷の落ちかゝつたやうナ。「前箭は猶ほ軽く後箭は深し」、初めより二度目の「道はじ道はじ」が手強いぞ。

「回至中路」——「太だ惺惺」、エ、利巧者めと。コリヤ弄したぢやわい。

「源云和尚快與某甲道若不道打和尚去也」——「却つて些子に較れり」、ソレでも斯う云ふたのは、少しは取柄があると冷かした。「穿耳の客に逢ふこと罕なり、多くは舟を刻む人に遇ふ」、利巧な人は少くて、多くは漸源のやうな馬鹿者ばかりぢや。「穿耳」とは、胡の貴人は耳環を穿めて居るからぢや。コリヤ利巧な人を指したぢや。又た「舟を刻む人」とはサ、「呂氏春秋」に出て居る故事ぢや。楚人が舟に乗つて居つて劍を遺したから、ソノ遺した處で舟に印を刻んで云ふのに、吾れ此に於て劍を墜したから、コノ印に據つて求めて、必らず之れを得んと。コリヤ馬鹿者を云ふたぢや。「這般の不啣喙の漢に似たらば、地獄に入ること箭の如し」、漸源のやうな、コンナ取り留めのない奴

ならばサ、地獄へ逆飛ぢやぞ。

「吾云打即任打道即不道」——「再三須らく事を重んずべし」、ア、貴い。法を惜しむぢやない、人を惜んでぢや。返すくも重んずべしぢや。「就身打切」、漸源、イツの間にか巾着を切られて知らずに居る。「這の老漢滿身泥水」、滿身の慈悲、キツイ親切ぢや。「初心改めず」、初めより點滴も施さぬ。是れ祖師門下の風、ドコ迄も遣り通すぢや。

「源便打」——「好打」、好く打つたと。コレも弄したぢや。「且らく道へ、他を打つて什麼か作さん」、盲目打ちや何の役に立たぬ。「屈棒元來人の喫する在る有り」、無理に打つと、罪なきに打たるゝこともあるものぢや。

「後道吾遷化源至石霜學似前話」——「知つて故に犯す」、實は漸源、知つて居つて石霜に問ふたのぢやと。コリヤ弄して云ふたが、コノ下語は好くない。「知らず是か不是か」、打つたのは、好いか悪いかを知つてか。「是ならば也太奇」、會して問ふたなら奇特よ。

「霜云生也不道死也不道」——「可煞だ新鮮」、コリヤ一人新しいぞ。「這般の茶飯却つて元來人の喫する有り」、コンナ人の喰ひ餘しを又た喫ふ奴もあるのサ。

「源云爲什麼不道」——「語、一般なりと雖も、意に兩種無し」、漸源の「コノ語は、道吾に云ふたのも、石霜に云ふのも同じことぢやがと。コノ下語も面白くない。意は別ぢや、差別が有るぞ。」且

らく道へ、前來の問と是れ同か是れ別か、サー先の問と同か別か、云ふてみよ。

「霜云不道不道」——「天上天下」、コリヤ正しく、上は霄漢に透り、下黄泉に徹するの答話ぢや。「曹溪の波浪如し相ひ似たらば、限り無き平人も陸沈せられん」、「道はじ道はじ」の大毒浪で、陸上の平民共も浮きつ沈みつしべい。

「源於言下有省」——「瞎漢」、馬鹿め、今になつて「省有り」もあるものかい。「且つ山僧を瞞ずること莫んば好し」、人をば欺さうがサ、己はイツカナ合點せぬぞ。悟るべきあればこそ、耕夫の牛を騙るぢや。

「源一日將鍬子於法堂上從東過西從西過東」——「也た是れ死中に活を得たり」、コノ坊主、漸々息を吹き返したわい。「好し先師の與めに氣を出すに」、道吾のためにヤツと息が出たと。コリヤ喜ぶことぢや。「他に問ふこと莫れ」、漸源が鍬子を將つてサ、ノサ／＼法堂上を歩き廻つて居つても、關はずに打ッちやつて置いたら困るべい。「且らく看よ、這の漢一場の懺懼」、關はずに置いたらサ、漸源、ソノ場で大い耻掻さぢや。

「霜云作什麼」——「隨後婁藪也」、石霜、黙つて置けば好いにと。コリヤ方語で、是非を分たず人の語に随ふと云ふことぢや。

「源云覓先師靈骨」——「喪車背後に藥袋を抛つ」、先師の靈骨を覓めても、今となては遅い／＼。

コレモ方語で、「事已に及ばず」と云ふ意ぢや。「悔ゆるは當初を慎まざりしことを」、トツクに合點すれば好い。「爾什麼と道ふぞ」、先師の靈骨を覓めんと云ふが、金の草鞋で探しても靈骨は見付からぬぞ。

「霜云洪波浩渺白浪滔天覓什麼先師靈骨」——「也た須らく他の作家に還して始めて得べし」、ソノ事ならば他の作家へ渡すが好い。サーこの處に、ドウも云はれぬ魂膽がある。「群を成し隊を作して什麼か作さん」石霜もまじやくに合はぬ。ドレもコレも甲斐ない奴ばかりぢや。

「雪竇看語云蒼天蒼天」——「太遲生」、おそい／＼と。コノ下語は不是ぢや。コ、へ「蒼天蒼天」と下したは、古今の鏡ぞ。ナカ／＼是れでは届かぬ。「賊過ぎて後ち弓を張る」、コノ句も不可ん。「好し興に」坑に埋却するに、イヤ／＼さうではない。斯く云ふも、過一つ在るなれども、宗師の役で免れぬ。

「源云正好着力」——「且らく道へ、什麼の處にか落在する」、漸源が、力を着くると云ふたは、ドウ云ふとか。漸源が鍬子を將つてからに、法堂の上に於て、東より西に過ぎ、西より東に過ぎた處を、石霜が、「洪波浩渺、白浪滔天、什麼の先師の靈骨をか覓めん」と云ふたので、漸源がサ、ア、忝う御座ると云ふた意はドウぢや。「先師曾つて爾に向つて什麼とか道ひし」、道吾の「道はじ道はじ」と、石霜の「洪波浩渺」とはドウぢや。「這の漢頭従り尾に到り、直に如今に至るまで出身す

ること得し、イツまで經つても、見解のカスが抜けぬ。

「太原孚云先師靈骨猶在」——「大衆見る麼、太原孚は、先師の露骨在りと云ふがサ、コノ靈骨を見るかドウぢや。「閃電に相ひ似たり」、眼を眨すれば蹉過ぢや。「是れ什麼の破草鞋ぞ」、靈骨などど勿體らしく云ふが、ムサくしい破れ草鞋ぢやないかと。コリヤ太原孚を抑下したぢや、「猶ほ些子に較れり」、サリながら、コノ語、少しは取柄があると、コリヤ扶けて云ふたぞ。

道吾與漸源至一家弔慰源拍棺木云生邪死邪若向句下便入得言下便知歸只這便是透脫生死底關鍵其或未然往往當頭蹉過看他古人行住座臥不妨以此事爲念纔至人家弔慰漸源便拍棺問道吾云生邪死邪道吾不移易一絲毫對他道生也不道死也不道漸源當面蹉過逐他語句走更云爲什麼不道吾云不道不道吾可謂赤心片片將錯就錯源猶自不惺惺回至中路又云和尚快與某甲道若不道打和尚去也這漢識什麼好惡所謂好心不得好報道吾依舊老婆心切更向他道打即任打道即不道源便打雖然如是却是他贏得一籌道吾恁麼血滴滴地爲他漸源得恁麼不替地道吾既被他打遂向漸源云汝且去恐院中知事探得與爾作禍密遣漸源出去道吾忒煞傷慈源後來至一小院聞行者誦觀音經云應以此丘身得度者即現比丘身而爲說法忽然大悟云我當時錯怪先師爭知此事不在言句上

古人道沒量大人被語脈裏轉却有底情解道道吾云不道不道便是道了也喚作打背翻筋斗教人摸索不着若恁麼會作麼生得不穩去若腳踏實地不隔一絲毫不見七賢女遊屍陀林遂指屍問云屍在這裏人在什麼處大姉云作麼作麼一衆齊證無生法忍且道有幾個千個萬個只是一個漸源後到石霜舉前話石霜依前云生也不道死也不道源云爲什麼不道霜云不道不道他便悟去一日將鐵子於法堂上從東過西從西過東意欲呈己見解霜果問云作什麼源云覓先師靈骨霜便截斷他脚跟云我這裏洪波浩渺白浪滔天覓什麼先師靈骨他既是覓先師靈骨石霜爲什麼却恁麼道到這裏若於生也不道死也不道處言下薦得方知自始至終全機受用爾若作道理擬議尋思直是難見漸源云正好着力看他悟後道得自然奇特道吾一片頂骨如金色擊時作銅聲雪竇着語云蒼天蒼天其意落在兩邊太原孚云先師靈骨猶在自然道得穩當這一落索一時拈向一邊且道作麼生是省要處作麼生是着力處不見道一處透千處萬處一時透若向不道不道處透得去便乃坐斷天下人舌頭若透不得也須是自參自悟不可容易過日可惜許時光雪竇頌云

【和訓】 道吾、漸源と一家に至つて弔慰す。源、棺木を拍つて云く、生か死かと。若し句下に向つて便ち入得せば、言下に便ち歸を知らん。只だ這れ、生死を透脱する底の關鍵なり。其れ或は未だ然らずんば、往々當頭に蹉過せん。看よ、他の古人、行住坐臥、妨げず此の事をもつて念と爲すことを。纔かに人家に至つて弔慰す。漸源便ち棺を拍つて道吾に問ふて云く、生

か死か。道吾、一絲毫を移易せず、他に對して道ふ、生とも也た道はじ。死とも也た道はじ。漸源、當面に蹉過して、他の語句を逐ふて走つて更に云く、什麼と爲てか道はざる、吾云く、道はじ道はじと。吾、謂つ可し、赤心片片、錯を將つて錯に就くと。源、猶ほ自ら惺惺ならず、回つて中路に至つて又た云く、和尚快く某甲が與に道へ、若し道はずんば、和尚を打し去らんと。道の源、什麼の好惡をか識らん。所謂好心、好報を得ずと。道吾、舊に依つて老婆心切、更に他に對して道ふ、打つことは即ち打つに任ず、道ふことは即ち道はじと。源、便ち打つ。然も是の如くなりとも、却つて是れ、他、一籌を贏ち得たり、道吾、恁麼に血滴滴地に他の爲めにす。漸源、恁麼に替地ならざることを得たり。道吾既に他に打たる。遂に漸源に向つて云く、汝且らく去れ、恐らくは院中の知事探得して、備が與めに禍を作さんことを。密かに漸源をして出で去らしむ。道吾忒然だ傷悲。源、後來一小院に至つて、行者の觀音經を誦して、應以比丘身得度者、即現比丘身而爲說法と云ふを聞いて、忽然大悟して云く、我れ當初、錯つて先師を怪しむ、争でか知らん、此の事、言句上に在らざることを。古人道く、没量の大人、語脈裏に轉却せらんと。有る底は情解して道ふ、道吾、道はじ道はじと云ふ、便ち是れ道ひ了れり。喚んで、背翻の筋斗を打して、人をして摸索不着ならしむと作す。若し恁麼に會せば、作麼生か平穩なることを得去らん。若し脚、實地を踏まば一絲毫を隔てず。見ざや、七賢女、屍陀林に遊ぶ。遂に屍を指して問ふて云く、屍は這裏に在り、人、什麼の處にか在る。大姉云く、作麼作麼と。一衆齊しく無生法忍を證す。且らく道へ、幾箇か有る、千個萬個、只だ是れ一個。漸源、後に石霜に到つて前話を舉す。石霜以前として云く、生とも也た道はじ、死とも也た道はじと。源云く、什麼と爲てか道はざる。霜云く、道はじ道はじと。他、便ち悟り去る。一日鐵子を將つて、法堂上に於て、東從り西に過ぎ、西從り東に過ぎ。意、己が見解を呈せんと欲す。霜、果して問ふて云く、什麼をか作す。源云く、先師の靈骨を覓む。霜便ち他の脚眼を截斷して云く、我が這裏洪波浩渺。白浪滔天、什麼の先師の靈骨をか覓めんと。他既に是れ先師の靈骨を覓む、石霜什麼と爲てか、却つて恁麼に道ふ。這裏に到つて、若し生とも也た道はじ、死とも也た道はじと云ふ處に於て、言下に應得せば、方に始め自り終に至つて、全機受用することを知らん。倘若し道理を作して擬議尋思せば、直に是れ見難し。漸源云く、正に好し力を着くるに。看よ、他、悟つて後ち道ひ得て自然に奇特なることを。道吾、一片の頂骨、金色の如し、擊つ時銅聲を作す。雪寶、着語して云く、蒼天蒼天と。其の意、兩邊に落在す。太原の孚云く、先師の靈骨猶ほ在りと。自然に道ひ得て穩當なり。這の一落索、一時に一邊に

拈向す。且らく道へ作麼生か是れ省要の處、作麼生か是れ着力の處。道ふことを見ずや、一處透れば、千處萬處一時に透ると。若し道はじ道はじと云ふ處に向つて透得し去らば、便乃ち天下の人の舌頭を生斷せん。若し透不得ならば、也た須らく是れ自ら參じ、自ら悟るべし。容易に日を過す可からず、可惜許時光。雪寶頌して云く。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢや。道吾、漸源と一家に至つて弔慰す。源、棺木を拍つて云く、生か死かと、コノ下へ以つて、「吾云く、生とも也た道はじ、死とも也た道はじ」と入れて見るが好い。「若し句下に向つて入得せば、言下に便ち歸を知らん」と、サ、此の句を手に入れるであらうぞならば、直に歸趣を知らう。「只だ這れ、便ち是れ生死を透脱する底の關鍵なり」と、是れ他事でない、生死を透脱する鍵ぢや。「其れ或は未だ然らずんば、往往當頭に蹉過せん。看よ、他の古人、行住坐臥、妨げず此の事を以つて念と爲すことを」と、古人は、行住坐臥、寢ても起きても、コノ一念を忘れない。ぢやからコノ本則にあるやうな商量も出来るぢや。「纔かに人家に至つて弔慰す。漸源便ち棺を拍つて道吾に問ふて云く、生か死かと。道吾、一絲毫を移易せず」と、ソノ儘ぢや、引き換へなし、手目を見せずの説法ぢや。「他に對して道ふ、生とも也た道はじ、死とも也た道はじと。漸源、當面に蹉過して、他の語句を逐ふて走つて更に云く、什麼と爲てか道はざる。吾云く、道はじ道はじと。吾、謂つ可し、赤心片片、錯を將つて錯に就くと」、コリヤ祖々傳來の錯りぢや。コノ錯りを傳へてサ、二十四流の家風も起つたぢや。「源、猶ほ自ら惺惺ならず、回つて中路に至つて又た云く、

和尙快く某甲が與めに道へ、若し道はずんば、和尙を打し去らんと。この漢、什麼の好惡をか識らん」と、漸源は酸いも甘いも知らぬ奴ぢや。所謂好意、好報を得ずと、ロリヤ恩を仇で返すぢや。酒買ふて尻切られるも同じぢや。道吾、舊に依つて老婆心切、更に他に向つて道ふ、打つことは即ち打つに任す、道ふことは即ち道はじと、第三重も亦た有りぢや。源、便ち打つ」と、飼犬に手を咬まれたぞ。然も是の如くなりと雖も、却つて是れ、他、一籌を贏ち得たり」と、勝つたこともないのに、何故圓悟が斯く云ふたかを見よ。道吾、恁麼に血滴滴地に他の爲めにす。漸源、恁麼に瞥地ならざることを得たり」と、道吾、馬鹿な目に逢ふたが、實にハヤ、血の出る程の親切ぢやがサ、漸源の奴、チョツと見て得取らぬ鈍漢ぢや。道吾既に他に打たる。遂に漸源に向つて云く、汝且らく去れ、恐らくは院中の知事探得して、備が與めに禍を作さんと、密かに漸源をして出て去らしむ」と、道吾が打たれてから、漸源に向つて云ふのに、今お前が衲を打つたことを知事が知つたならば、お前に咎を申し付けるぢやらうから、且らく此處を立ち退くが好いと。ソコデこつそり漸源を出してやつた。知事」とは、禪院の事務を司る役名ぢや。道吾忒煞だ傷慈」と、コリヤ過分の慈悲ぢや。唐人は慈悲の過ぎたのを「傷鹽傷慈」と云ふぢや。源、後來一小院に至つて、行者の觀音經を誦して、應比丘身得度者、即現比丘身而爲說法と云ふを聞いて、忽然大悟して云く、我れ當時、錯つて先師を怪しむ、争でか知らん、此の事、言句上に在らざることをと、ソノ後漸源

が或る寺へ行くと、一人の行者が「觀音經」を誦して居つたが、「應に比丘身を以つて得度すべき者には、即ち比丘身を現じて爲に說法す」と云ふのを聞いて、忽然大悟した。先師が「道はじ道はじ」と云つたのを、異なることを秘せられたのぢやと怪んだが、ソリヤ言句上にあるのではなかつた。併しサ、又た言句を離れてもならぬぢや。「古人道く、没量の大人、語脈裏に轉却せらると」、ドンナ度はずれの者でも、言語につき廻されると。コリヤ雲門の語ぢや。「有る底は情解して道ふ、道吾、道はじ道はじと云ふ、便ち是れ道ひ了れり。喚んで、背翻の筋斗を打して、人をして摸索不着ならしむと作す」と、或者は閑妄想してサ、道吾が「道はじ道はじ」と云ふつたのは、實は道ひ了つたのぢやが。道吾がむづかしく、後方へモンドリ返して、引ッ違へて答へられた程に、漸源、摸り當てぬのぢやと。ナンの筈棒めが。「若し恁麼に會せば、作麼生か平穩なることを得去らん」と、若しサウなればサ、ドウして佛法の眞只中に坐つて居らりやうぞ。若し脚、實地を踏まば、一絲毫を隔てず」と、サ、眞實に骨折つて見性了々たらば、卵の毛も動かぬぢや。「見ずや、七賢女、屍陀林に遊ぶ。遂に屍を指して問ふて云く、屍は這裏に在り。人、什麼の處にか在る。大姉云く、作麼作麼と。一衆齊しく無生法忍を證す」と、コリヤ「七賢女經」に出て居る、趣が似たから引いたのぢや。「七賢女經」は「大藏詞字函」中に在る。經文を見ると、「七賢女、屍陀林に遊ぶ。一女、屍を指して曰く、屍は這裏に在り、人、什麼の處に向つてか去ると。一女曰く、作麼作麼と。諸姉諦觀して各々

契悟す。感じて帝釋、花を散して曰く、唯願はくは聖姉、何んの所須か有る。我れ當に身を終つて供給すべしと。女曰く、我が家四事七珍、悉く皆な具足す。唯だ三般の物を要す。一には無根樹子一株を要す、二には無陰陽地一片を要す、三には叫んで響かざる山谷一所を要すと。帝釋曰く、一切の所須、我れ悉く之れを有す。三般の物の若さんば、我れ實に得る無し。女曰く、汝若し此れ無くんば、争でか人を濟ふことを解せん。帝釋措くこと罔し。遂に同じく往いて佛に白す。佛言はく、橋屍迦、我が諸の弟子、大阿羅漢、此の義を解せず。唯だ諸の大菩薩有つて乃ち此義を解すと、カウ有る。七賢女が「屍陀林」に遊んだ。「屍陀林」とは梵語ぢや、翻して寒林と云ふ、即ち鳥部野のとぢや。一人の女が屍を指して、屍はコ、にあるが、人はドコに居るのぢやと問ふた。スルト大姉がサ、「作麼作麼」と、云ふた。何んとナ〜と。サテ〜すさまじい一句ぞ、是くの如き底は大姉一人ぢや。道吾の「生とも也た道はじ、死とも也た道はじ。道はじ道はじ」の語とドウぢや。コノ「大姉」と云ふは、女を敬つて云ふのぢや。漢の元帝の母の乳母から稱へ始めたと云ふ。「且らく道へ、幾個か有る、千個萬個、只だ是れ一個」と、是くの如き底の人は、サウ澤山にあるものぢやない。千人萬人の中でも一人位なものぢや。漸源、後に石霜に到つて前話を擧す。石霜依前として云く、生とも也た道はじ、死とも也た道はじと。源云く、什麼と爲てか道はざる。霜云く、道はじ道はじと。他、便ち悟り去る。一日鍬子を將つて、法堂上に於て、東從り西に過ぎ、西從り

東に過ぐ。意、己が見解を呈せんと欲す」と、ドコモカシコも先師の靈骨ぢや。「霜、果して問ふて云く、什麼をか作す。源云く、先師の靈骨を覓む。霜便ち他の脚跟を截斷して云く」と、去ればサ、コノ刀では切れまい。「我が這裏、洪波浩渺、白浪滔天、什麼の先師の靈骨をか覓めんと」と、人と云ふには非らず、人々分上、法界に周遍すぢや。コノ南天棒ならばコンナことは云はぬ。嗟呼是々、其の靈骨を大事にして貰はうと云はうぞ。「他既に是れ先師の靈骨を覓む。石霜什麼と爲てか却つて恁麼に道ふ。這裏に到つて、若し生とも也た道はじ、死とも也た道はじと云ふ處に於て、言下に聽得せば、方に始め自ら終に至つて、全機受用することを知らん」と、道吾の全機受用を知るであらうぞ。「爾若し道理を作して、擬議尋思せば、直に是れ見難し。漸源云く、正に好し力を着くるにと」、漸源が、ソコよ〜と石霜の語を美めたが、石霜、漸源、兩箇泥團を弄する漢ぢや。コレでは骨に粘したのぢや。「看よ、他悟つて後ち、道ひ得て自然に奇特なることを。道吾、一片の頂骨、金色の如し。撃つ時銅聲を作す」と、「會元」の石霜章に曰ふのに、「問ふ、和尚(道吾)一片の骨、敲着すれば銅鳴に似たり。什麼の處に向つてか去ると。吾、侍者を喚ぶ。侍者應諾す。吾曰く、驢年にし去れと」。又た宋の「高僧傳」には、「道吾遷化の時、灰とならざるの骨數片有り。頂骨一片、特異にして清瑩、其の色の如く、其の響き銅の如し」とある。「先師の靈骨」とあるから、是れ等を引いて、「道吾一片の頂骨」と云ふたぢや。「雪竇着語して云く、蒼天蒼天と」、大出來々々々。「其の意、兩邊に

落在」と、石霜と漸源との兩邊に落在すと云ふが、落在ではない。只だ手前で合點せよ。コノ六字は削つた方が好い。「太原の孚云く、先師の靈骨猶ほ在り」と、コノ語極妙、雪峯下、向上の秘曲ぢや。「自然に道ひ得て穩當なり」と、ナニ穩當のことがあるか。コリヤ怖いものぢや。「這の一落索、一時に一邊に拈向す」と、今コノ公案を一ク、リにして、諸人の爲めに拈向するが、「且らく道へ、作麼生か是れ省要の處、作麼生か是れ着力の處」と、サー何處が肝要の處ぞ、何處が着力の處ぞ。ドウも此の邊の評は面白くないぞ。道ふことを見ずや、一處透れば、千處萬處一時に透ると。若し道はじ道はじと云ふ處に向つて透得し去らば、便乃ち天下の人の舌頭を坐斷せん」と、誰が出て來やうともサ、グツとも云はせぬぞ。「若し透不得ならば、也た須らく是れ自ら參じ、自ら悟るべし。容易に日を過す可からず。可惜許時光。雪竇頌して云く」と、今この一日は地獄の八百年ぢや。ウツかりして日を送るまいぞ。サー雪竇の頌を看よ。

兔馬有角

○斬○可煞奇特○可煞新鮮

牛羊無角

○斬○成什麼模樣○

瞞別人即得

絕毫絕毫

○天上天下唯我獨尊○備向什麼處摸索

如山如獄

○在什麼處○平地起波瀾○壓着個鼻孔

黃金靈骨今猶在

○截却舌頭塞

却咽喉○拈向一邊○只恐無人識得伊

白浪滔天何處着

○放過一着○脚跟

下蹉過○眼裏耳裏着不得

無處着

○果然○却較些子○果然沒溺深坑

隻履

西歸曾失却

○祖禰不了累及兒孫○打云爲什麼却在這裏

【和訓】 兔馬に角有り。(○斬。○可煞だ奇特。○可煞だ新鮮。) 牛羊に角無し。(○什麼の模樣をか成す。○別人を瞞することは即ち得たり。) 毫を絶し毫を絶す。(○天上天下唯我獨尊。○備什麼の處に向つてか摸索せん。) 山の如く嶽の如し。(○什麼の處に在る。○平地に波瀾を起す。○備が鼻孔を壓着す。) 黄金の靈骨今猶ほ在り。(○舌頭を截却し咽喉を塞却す。○一邊に拈向す。○只だ恐くは人の伊を識得する無からんことを。) 白浪滔天何れの處にか着けん。(○一着を放過す。○脚跟下に蹉過す。○眼裏耳裏着ること得じ。) 着くるに處無し。(○果然。○却つて些子に較れり。○果然として深坑に沒溺す。) 展西に歸つて曾つて失却す。(○祖禰了せざれば果兒孫に及ぶ。○打して云く、什麼と爲てか却つて這裏に在る。)

【提唱】

頤 コレから雪竇の頤ぢや。

「兔馬に角有り」と、道吾の語、奇怪のものぢや。ソノ有様は、大將かと思れば續く勢もない。コノ句より「山の如く嶽の如し」に至る四句は、全體道吾の語を頤出したぢや。

「牛羊に角無し」と、コノ二句が合點云くと、道吾の、「生とも也た道はじ、死とも也た道はじ」と

云ふが合點行くがナ。

「毫を絶し毫を絶す」と、根切りへり切り、佛でも違ふ、祖でも違ふ。サゝ無いと云ふ段には拂ひ果て、塵一つバ無いぞ。

「山の如く嶽の如し」と、毫を絶し毫を絶す」端的は、山の如し嶽の如しぢや。無いかと思へば、前も後も一抔ぢや。

「黄金の靈骨今猶ほ在り」と、コリヤ特に太原の語を賞したのぢやが、ドコもカモ、さうぢやと見ると違ふぞ。

「白浪滔天何れの處にか着けん」と、白浪滔天で、一抔満ちた如く、片付け處はあるまい。

「着くるに處無し」と、片付け處は何處にもない。コリヤ「何處にか着けん」の意を繰返して強く云ふたのぢや。

「隻履西に歸つて曾つて失却す」と、「失却」を云はんがために、御苦勞様にも達磨を引ツ張つて來たのぢやが、コリヤ雪竇、最後の一ツ印籠ぢや。コノ句は佛祖の命を奪ふ底、コレが明かなるときは、太原の句亦た明かなりぢや。

コレから圓悟の著語ぢや。

「兔馬有角」——「斬」有る角をホシ折れと。天晴れな下話ぢや。「可煞だ奇特」、兔馬の角とは、コ

リヤ珍らしい。玉を振れば金聲を作すぢや。「可煞だ新鮮」、「兔馬に角有り」の句法は甚だ新しい。ビチ／＼して居るやうぞ。

「牛羊無角」——「斬」ソノ無い角をホシ折れと。コレも好い。「什麼の模様をか成す」、「生とも也た道はじ、死とも也た道はじ」には、ナニを云ふても云ひ當てられぬぞ。「別人を嘯することは即ち得たり」、人を馬鹿にしたナ。併しコノ圓悟を嘯することは出來まい。

「絶毫絶毫」——「天上天下唯我獨尊」、毫を絶し毫を絶する端的は、「天上天下唯我獨尊」ぢや。併しサ、コノ語、錯つて會すること莫れ。「爾什麼の處に向つてか摸索せん」、爾諸人、何處をかかぐり廻らうとするぞと。イヤハヤ御叮嚀過ぎた、老婆な下話ぢやわい。

「如山如嶽」——「什麼の處にか在る」、瀬戸も街道も、眞向是くの如しぢや。「平地に波瀾を起す」、不思議はないのに、雪竇ナンぢや。「爾が鼻孔を壓着す」、鼻先へスリ付けられて、我も人も押し分けられぬわい。

「黄金靈骨今猶在」——「舌頭を截却し咽喉を塞却す」、此「今猶ほ在り」と、在つては舌頭では云ひ現されぬ程に。言詮不及ぢや。咽喉迄満ち／＼して居るがサ。「一邊に拈向す」、ソノ沙汰は古い／＼片隅へ退ける／＼。「只だ恐らくは人の伊を識得する無からんことを」、在るはあれども眼には見えぬ。

「白浪滔天何處着」——「一着を放過す」、雪竇も老婆に説いて、遣過したぞ。「脚跟下に蹉過す」、

コリヤ負ふた子を三日尋ねたのぢや。踏んだ草履も彌陀なりや、下駄も彌陀ぢや。「眼裏耳裏着くること得じ」ドコモカシコも一杯ぢや。

「無處着」——「果然」ソレ見ろ、片付け處はない筈ぢや。却つて些子に較れり、少しは取柄があるがサ、佛くさい。「果然として深坑に没溺す」、着くるに處が無いと見違ふと、佛の穴へスツテンコロリぢや。

「隻履西歸會失却」——「祖彌了せざれば累兒孫に及ぶ」「祖」は始廟、「彌」は親廟ぢや。コノ「隻履」恐しいものぞ。先祖がサツパリして置かぬから、兒孫までの胸腹病となるぢや。「打して云く、什麼と爲てか却つて這裏に在る」、隻履西へ歸ると云ふたならば、今まコ、に居るはドツぢやと。コレでは見えぬぞ。

雪寶偏會下注脚他是雲門下兒孫凡一句中具三句底鉗鏈向難道處道破向撥不開處撥開去他緊要處頌出直道兔馬有角牛羊無角且道兔馬爲什麼有角牛羊爲什麼却無角若透得前話始知雪寶有爲人處有者錯會道不道更是道無句是有句兔馬無角却云有角牛羊有角却云無角且得沒交涉殊不知古人千變萬化現如此神通只爲打破箇這精靈鬼窟若透得去不消一箇了字兔馬有角牛羊無角絕毫絕毫如山如嶽這四句似摩尼寶珠一顆

相似雪寶渾淪地吐在偏面前了也末後皆是據款結案黃金靈骨今猶在白浪滔天何處着此頌石霜與太原乎語爲什麼無處着隻履西歸會失却靈龜曳尾此是雪寶轉身爲人處古人道他參活句不參死句既是失却他一火爲什麼却競頭爭

【和訓】雪寶、偏に會して注脚を下す。他は是れ雲門下の兒孫、凡そ一句の中に三句底の鉗鏈を具す。難道の處に向つて道破し、撥不開の處に向つて撥開し、他の緊要の處に去つて、頌出して直に道ふ、兔馬に角有り、牛羊に角無しと。且らく道へ、兔馬什麼と爲てか角有り、牛羊什麼と爲てか却つて角無き。若し前話を透得せば、始めて雪寶、爲人の處有ることを知らん。有る者は錯つて會して道ふ、道はざるは便ち是れ道ふ、無句は是れ有句、兔馬に角無ければ却つて角ありと云ひ、牛羊に角有れば却つて角無しと云ふと。日得沒交涉、殊に知らず、古人千變萬化、此の如き神通を現すことを。只だ偏が道の精靈の鬼窟を打破せんが爲めなり。若し透得し去らば、一箇の了の字を消せじ。兔馬に角有り、牛羊に角無し。毫を絶し毫を絶して、山の如く嶽の如しと。這の四句、摩尼寶珠の一顆に似て相ひ似たり。雪寶、渾淪地に偏が面前に吐在し了れり。末後は皆た是れ、款に據つて案を結す。黄金の靈骨今猶在り、白浪滔天何れの處にか着けん。此れ石霜と太原の字との語を頌す。什麼と爲てか着くるに處無き、隻履西に歸つて會つて失却すと。靈龜、尾を曳く。此れは是れ、雪寶、轉身爲人の處。古人道く、他、活句に參じて死句に參せざれと。既に是れ失却す。他の一火、什麼と爲てか却つて頭を競ふて争ふ。

【提唱】コレから圓悟の評ぢや。「雪寶、偏に會して注脚を下す。他は是れ雲門下の兒孫」と、注脚と云ふては面白くない。雪寶は生死にも有無にも涉らぬ、盤に和して托出す夜明珠ぢやものを。「凡そ一句の中に、三句底の鉗鏈を具す」と、カウ云ふては好くない。只だ學者には生で喰はするが好い

ぞ。コノ十字は削つた方が好い。「難道の處に向つて道破し、撥不開の處に向つて撥開し」と、權の廻らぬ、地ばなしもならぬ處で、働かぬばならぬと思へ。「他の緊要の處に去つて、願出して直に道ふ、兎馬に角有り、牛羊に角無し」と、コレへ三句を少し交ると役に立たぬ。好一釜の羹、兩箇の鼠糞に汚却せらるぢや。「且らく道へ、兎馬什麼と爲てか角有る、牛羊什麼と爲てか却つて角無き」と、コリヤ如何ぢや。「若し前話を透得せば、始めて雪寶、爲人の處有ることを知らん」と、サー「生とも也た道はじ、死とも也た道はじ」と云ふを透得しやうぞならば、コノ「兎馬に角有り、牛羊に角無し」の落處も知るであらうぞ。「有る者は錯つて會して道ふ、道はざるは便ち是れ道ふ、無句は是れ有句。兎馬に角無ければ却つて角有りと云ひ、牛羊に角有れば却つて角無しと云ふと。且得没交涉」と、糞垂れ共めが、コンナたわ言を云ひくさる。「殊に知らず、古人千變萬化、此の如き神通を現すことを。只だ爾が這の精靈を打破せんが爲めなり」と、サー古人がコノやうに、さまざまにして方便を立てるのも、只だく爾諸人を、界外へ引き出したいためばかりぢや。コノ生死の穴の中からは出ぬ者はない。「若し透得し去らば、一箇の了の字を消せじ」と、生死を透脱すりや、悟りと云ふこともいるまい。「兎馬に角有り、牛羊に角無し、毫を絶し路を絶して、山の如く嶽の如しと。這の四句、摩尼寶珠の一顆に似て相ひ似たり」と、コノ評は好くない。諸人、崑崙に棗を呑む莫れ。「雪寶、渾淪地に爾が面前に吐存し了れり」と、コレも不是ぢや。斯うマン丸に其の儘見ると大錯りぞ。

「末後は皆な是れ款に據つて案を結す。黄金の靈骨今猶ほ在り、白浪滔天何れの處にか着けん」と、「兎馬に角有り、牛羊に角無し」ばかりにも掛けられぬ、大切の語ぞ。「此れ石霜と太原の孚との語を頌す」と、併し二師の語には、精龜大いに別がある。ソレを一處にするのは、恰かも銅杓子を黄金柱に比するがやうぢや。比べものにやならぬぞ。「什麼と爲てか着くるに處無き、隻履西へ歸つて曾つて失却すと」、コリヤ又た一重ぢや。百二十斤の鐵鎚を行燈に付けた様ぞ。サウして如何ぢや。何を失却した。コノ中に、漸源一生の受用、佛一代の教を封じ込めて置いた。「靈龜、尾を曳く」と、失却と云ふもハヤ尾が見えたと。此評は未審しい。「此れは是れ、雪寶、轉身爲人の處」と、コリヤ「曾つて失却す」と云ふたのを指したのぢやが、コノ已下の評は不徹底ぢや。「古人道く、他、活句に參じて死句に參ぜざれと。既に是れ失却す。他の一火、什麼と爲てか却つて頭を競ふて争ふ」と、サ「失却したものならばサ、今に諸方の學者共が、競ひ争ふは、コリヤ如何したものぢやと。コレぢや尻のク、リが付いて居らぬ。

【註】「サシなし」差し障り無しと云ふこと。四辯八音の一項をとる。「二十四流」日本に於ける禪宗の流浪。「根切りヘリ切り」根本を盡くすこと。「胸腹痛」グツともスツとも云へず、息詰つたこと。「地ばなしはならぬ」どうすることも出来ぬ。「崑崙に棗を呑む莫れ」丸呑みにして仕舞ふなどの意。

第五十六則 欽山一鐵破三關 【欽山一鐵破三關】

垂示云、諸佛不會出世亦無一法與人、祖師不會西來未嘗以心傳授、自是時人不了向外馳求、殊不知自己脚跟下一段大事、因緣千聖亦摸索不着、只如今見不見聞不聞說不說、知不知從什麼處得來、若未能洞達、且向葛藤窟裏會取試舉看。

【和訓】垂示に云く、諸佛會つて出世せず、亦た一法の人に興ふる無し。祖師會つて西來せず、未だ嘗つて心を以つて傳授せず。自らは是れ時の人了せずして外に向つて馳求す。殊に知らず、自己脚跟下、一段の大事因緣、千聖も亦た摸索不達なることを。只だ如今、見不見、聞不聞、說不說、知不知、什麼の處よりか得來る。若し未だ洞達すること能はずんば、且らく葛藤窟裏に向つて會取せよ。試みに舉す、看よ。

【提唱】第五十六則、「欽山一鐵破三關」と、コノ則はサ、古人達道、言句見難きことを明すぢや。是れを以つて、衲子は能く言句に通ずる、是れを第一とするぢや。今更欽山の如さんば、始め師法

に依るも動もすれば智用を失して趙州に如かず。又た良禪客の如さんば、既に此の事、他と異なる有るを知ると雖も、全く雪峯、三聖の學地に在りし時、或は雲門の乾峯、翠巖に在つて、受用自在の如き時には似ず。是の故に彼此、知音たることを得ず、唱拍、時を失ふ。笑ふ可き事有り。是れ此の一則、見難く明め難く、講師大いに錯り、一褒一貶、平意を得ずぢや。諸人、等閑の看をなすな。「會元」の十三、欽山章に云ふのに、「師(欽山)歳二十七、欽山に止る。大衆の前に對して、自ら過を省み、洞山に參する時の語を舉す。山(洞山)問ふ、甚れの處よりか來る。師曰く、大慈。曰く(洞山)、還つて大慈を見る麼。師曰く、見る。曰く、色前に見るか、色後に見るか。師曰く、色の前後に非らずして見る。洞山、黙し置く。師乃ち曰く、師を離るゝ太だ早うして、師の意を盡さず」と。コレが前にも云ふた、「動もすれば智用を失す」と云ふのぢや。サ一垂示ぢや。

「垂示に云く、諸佛會つて出世せず、亦た一法の人に興ふる無し」と、サ一各々、骨折つて自己を識得してみよ、三世の如來も、面出しはならぬぞ。コノ時「法華」は耳に一杯ぢや。併しサ、ソノ身ソノ儘ぢや不可ぬぞ。「華嚴經」には、「諸佛出世せず、亦た涅槃の有る無し」と云ふてある。又た徳山(宣鑑)の云ふには、「吾が宗、諸の句無し、實に一法の人に興ふる無し」と。「祖師會つて西來せず、未だ嘗つて心を以つて傳授せず」と、コノ座敷の男女、皆な紫磨黄金の彌陀ぢや。「心を以つて傳授する」などと云ふことが、ドウして有らうぞ。「自らは是れ時の人、了せずして」と、初めからコ

レまては一向掃蕩ぢや。外に向つて馳求す。殊に知らず、自己脚跟下、一段の大事因縁」と、然るをサ、人々は根本を了せずして、多くは技末に着くから、イッ迄經つても埒が明かぬのぢや。「千聖も亦た摸索不着なることを」と、教外別傳とも、摸索不着とも、又た一字不説とも、皆なコ、から云ふたぞ。「只だ如今、見不見、聞不聞、説不説、知不知」と、コノ座敷、全體真如實相ぢや、僧俗男女一人も居らぬ。貴様達の見聞覺知、是れ何んぞと看よ。ソレが看えると、「見不見、聞不聞」と云ふも、ハツキリ見えるぞ。「什麼の處よりか得來る」と、サー上の如く働く者はサ、ソレを何處から得たのか。「若し未だ洞達すること能はずんば、且らく葛藤窟裏に向つて會取せよ」と、圓悟、前には、外に向つて求めなト云ひながら、又たコ、では、「葛藤窟裏に向つて會取せよ」と云ふは、コリヤ何んのことぢや。「試に擧す、看よ」と、マア本則を看やれ。

舉良禪客問、欽山一鏃破三關時如何。○嶮○不妨奇特○不妨是箇猛將。山云、放出關中主看。○劈面來也○也要大家知。○主山高按山低。良云、恁麼則知過必改。○見機而作○已落第二頭。山云、更待何時。○有擒有縱○風行草偃。良云、好箭放不着所在便出。○果然○擬待翻款那○第

二棒打人不痛。山云、且來闍黎。○呼則易遣則難。○喚得回頭堪作什麼。良回首。○果然把不住○中也。山把住云、一鏃破三關即且止試與欽山發箭看。○虎口裏橫身○逆水之波○見義不爲無勇也。良擬議。○果然摸索不着○打云、可惜許。山打七棒云、且聽這漢疑三十年。○令合恁麼○有始有終○頭正尾正○這箇棒合是欽山喫。

【和訓】擧す。良禪客、欽山に問ふ、一鏃破三關の時如何ん。(○嶮。○妨げず奇特なることを。○妨げず是れ箇の猛將なることを。) 山云く、關中の主を放出せよ、看ん。(○劈面來也。○也た大家知らんことを要す。○主山は高く按山は低し。) 良云く、恁麼ならば過を知つて必らず改めん。(○機を見て作す。○已に第二頭に落つ。) 山云く、更に何れの時をか待たん。(○機有り縱有り。○風行けば草偃す。) 良云く、好箭放つて、所在を着けずと云ふて、便ち出づ。(○果然。○翻款を待たんと擬する那。○第二棒、人を打つとも痛からず。) 山云く、且來闍黎。(○呼ぶことは易く、遣ふことは難し。○呼び得て頭を回さば、什麼を作すにか堪へん。) 良、首を回らす。(○果然として把不住。○中れり。) 山、把住して云く、一鏃破三關は即ち且らく止く、試に欽山が與めに箭を發せよ、看ん。(○虎口裏に身を横ふ。○逆水の波。○義を見て爲さざるは勇無きなり。) 良、擬議す。(○果然として摸索不着。○打つて云く、可惜許。) 山、打つこと七棒して云く、且らく聽す、這の漢疑ふこと三十年ならんことを。(○令、合に恁麼なるべし。○始有り終有り。○頭正しく尾正し。○這箇の棒合に是れ欽山喫すべし。)

【提唱】

本則 コレから本則ぢや。

「舉す、良禪客、欽山に問ふ、一鏃破三關の時如何ん」と、コノ則是サ、只だ關中の王を争ふのぢや。丁度、高祖と項羽との争ひのやうぢや。「良禪客」は巨良和尚と云ふて、スサマジイ戰將ぞ。雲門、乾峯の手筋をトクと合點して居る男ぢや。故に初問がスサマジイ。サー「一鏃破三關の時如何ん」と、一鏃で秦の三關をグット射貫いて、天下泰平にするぢや。コノ矢の根を知ると、三關ばかりでない、あらゆる諸法をも、生死をも射透すぢや。コノ「三關」と云ふことを、三路ぢやの、三玄三要ぢやの、或は三句ぢやの、眼、耳、口の三關ぢやなどと云ふ者もあるがサ、ソリヤ皆な邪解ぢや。茲では只だ良禪客が、自己の見解を以つて、軍陣になぞらへて問ふて來たのぢやと見れば好い。「欽山」は洞山良价禪師の法嗣、澧州欽山の文遂禪師ぢや。福州の人、業を大慈の寰中和尚に受け、二十七歳にして欽山に住した。

「山云く、關中の主を放出せよ、看ん」と、ソノ射手は誰れぞ、云ふて看よと。コリヤ好一撈ぢや、天晴れ欽山候よ。

「良云く、恁麼ならば過を知つて必らず改めん」と、出損ひか。ソナナラ重ねては改んと。群を驚かし衆を動かす。是れ即ち一千五百人の善知識の語ぢや。

「山云く、更に何れの時を待たん」と、ソリヤ何時改めるなど。良禪客が「恁麼ならば過を知つて必らず改めん」と云ふたは、草木も靡く働さぢやに、コリヤ蹉過了ぢや。コノ南天棒、欽山に代つて、蒼天々と云ふて、禪床を下つて恐るゝ勢をしたら、ケチなものであんべい。或は兩手を以て額上を蔽ひ、冷眼にして良公を見ん。

「良云く、好箭放つて所在を看けずと云ふて、便ち出づ」と、ソコデ良公は、折角好箭を射たが、欽山落處をも知らぬと云ふて、出て行かうとした。あゝ能く働いたぞ。欽山、コリヤ膽を射貫かれたわい。

「山云く、且來闍黎」と、コリヤ賊過ぎて後ち弓を張るぢや。あそい〜。

「良、首を回らす」と、オ、何んぢやと。貴ぶ可く惜しむ可しぢや。コ、が良公の無調法ぢや、尻召せ觀音〜と云ふて走れば好いにサ。

「山、把住して云く、一鏃破三關は即ち且らく止く、試に欽山が與めに箭を發せよ、看ん」と、良禪客、コレから別調に吹かれた。コ、は欽山を打たいでならぬ處ぢや。ナゼ打たぬ。

「良、擬議す」と、コリヤまかなひ兼ねるではないぞ、フトつまることがある。互先の恭ぢやけれども、一手打ち損じた。コ、で欽山を打たいではならぬ處を、欽山が地團太踏んでも關はぬ、見事な擬議ぞ。雪竇が「的的分明なり箭後の路」と頌したは此處のことぞ。

「山、打つこと七棒して云く、且らく聽す、這の漢疑ふこと三十年ならんことを」と、欽山、コリヤ盲目棒ぢや。恐くは良公の疑議を、欽山が疑ふと三十年か。三十年」とは前にも云ふたが、一生の間と云ふことぢや。世の字は、三十の劃ぢやからぢや。今まコノ一則の公案を評するに、小鼓師は能く打つたなれども、大鼓師がツイ拍子違へたやうな。譬へば名人が秘曲を調へ出したる時、相手がアラ者で曲調を知らぬ故、滅多打に打つたて、名人は止めて、無調法な振りをしたやうなぞ。

〔習語〕 コレから圓悟の著語ぢや。

「舉良禪客問欽山一鏃破三關時如何」——「嶮、欽山、ア、あぶないぞ。妨げず奇特なることを、危ない所作をする良禪客の志氣は奇特ぢや。妨げず是れ箇の猛將なることを、良公の機鋒、イヤハヤ鋭い。コリヤ確かに一箇の猛將ぢや。」

「山云放出關中主看」——「劈面來也、コリヤ百二十斤の鐵鎚を打ち掛けたやうぞ。大家知らんことを要す、コノ「關中の主」は、諸人知らねばならぬ。主山は高く按山は低し、「按山」とは客山のとぢや。サ、此の城は中々落ちませ。」

「良云慙麼則知過必改」——「機を見て作す、氣の利いた働さぢやと。コノ下語も評も皆な違ふた、南天棒は取らぬ。「已に第二頭に落つ、少とニスイナ。」

「山云更待何時」——「擒有り縦有り、「何れの時をか待たん」と云ふに當てたのぢやが、納なら斯

うは云はんど。「風行けば草偃す」、欽山の威風は、風の行つて草の偃す如しぢやとサ。

「良云好箭放不着所在便出」——「果然、扱てこそな。翻款を待たんと擬する那、口書の出直しをしたがるか。第二棒、人を打つとも痛からず、始めに一箭射損じた程にサ、又た射ても痛むまいと。コリヤ不可ん。」

「山云且來闍黎」——「呼ぶことは易く遣ふことは難し、呼ぶのは好いが、手に合はぬ時、遣ふのに困るべいと。面白い下語ぢや。コリヤ蛇を呼ぶ故事ぢや。喚び得て頭を回さば、什麼を作すにか堪へん、呼ばれて来るやうでは役に立たぬ。」

「良回首」——「果然として把不住、コノ下語は取らぬ。中れり、欽山の箭に中つた。」

「山把住云一鏃破三關即且止試與欽山發箭着」——「虎口裏に身を横ふ、欽山、學者の爲めに身命を惜まらず打たせやうとした。あぶないものぢや。逆水の波、コノ機用、こわい。義を見て爲さざるは勇無きなり、コ、デ欽山を打たなかつたのは、サリとは残り多いぞ。」

「良擬議」——「果然として摸索不着、コリヤ欽山か良公か。コノ下語も好くない。「打つて云く、可惜許」、大いに脱かつたぞ。」

「山打七棒云且聽這漢疑三十年」——「令、合に慙麼なるべし、馬鹿なことを云ふナ。コレも不可ぢや。「始有り終有り」、「頭正しく尾正し」、コリヤ欽山のことか、良のことか、見分けてみよ。「這箇の

良禪客也不妨是一員戰將向欽山手裏左盤右轉墜鞭閃韜末後可惜許弓折箭盡雖然如是李將軍自有嘉聲在不得封侯也是閑這箇公案一出入一擒一縱當機靚面提靚面當機疾都不落有無得失謂之玄機稍虧些子力量便有頭腦這僧亦是箇英靈底衲子致箇問端不放驚群欽山是作家宗師便知他問頭落處鐵者箭鏃也一箭射透三關時如何欽山意道備射透得則且置試放出關中主看良云恁麼則知過必改也不妨奇特欽山云更待何時看他恁麼祇對欽山所問更無些子空缺後頭良禪客却道好箭放不着所在拂袖便出欽山纔見他恁麼道便喚云且來閑黎良禪客果然把不住便回首欽山擒住云一鐵破三關則且止試與欽山發箭看良擬議欽山便打七棒更隨後與他念一道咒云且聽這漢疑三十年如今禪和子盡道爲什麼不打八下又不打六下只打七下不然等他問道試與欽山發箭看便打似則也似是則未是在這箇公案須是胸襟裏不懷些子道理計較超出語言之外方能有一句下破三關及有放箭處若存是之與非卒摸索不着當時這僧若是個漢欽山也大險他即不能行此令不免倒行且道關中主畢竟是什麼人看雪竇頌云

【和訓】良禪客、也た妨げず是れ一員の戰將なることを。欽山の手裏に向つて、左盤右轉して、鞭を墜し韜を閃す。末後可惜許、弓折れ箭盡く。然も是の如くなりと雖も、李將軍自ら嘉聲の在る有り。封侯を得ざれば也た是れ閑なり。這箇の公案、一出入、一擒一縱、當機靚面に提げ、靚面當機に疾し。都て有無得失に落ちず、之れを玄機と謂ふ。稍や些子の力量を虧けば、便ち頭腦有り。這の僧亦た是れ箇の英靈底の衲子。箇の問端を致す、妨げず群を驚かすことを。欽山は是れ作家の宗師、便ち他の問頭の落處を知る。簇は箭鏃なり。一箭、三關を射透する時如何と。欽山の意に道く、備が射透し得ることは且らく置き、試に關中の主を放出せよ、看ん。良云く、恁麼ならば過を知つて必ず改めんと。妨げず奇特なることを。欽山云く、更に何れの時をか待たんと。看よ、他、恁麼の禪對、欽山の所問、更に些子空缺の處無し。後頭に良禪客却つて道ふ、好箭放つて所在を著けずと云ふて、拂袖して便ち出づ。欽山纔かに他の恁麼に道ふを見て、便ち喚んで云く、且來閑黎と。良禪客果然として把不住。便ち首を回らす。欽山擒住して云く、一鐵破三關は則ち且らく止く、試に欽山が與めに箭を發せよ、看ん。良、擬議す。欽山便ち打つこと七棒して、更に後に隨つて、他の與めに一道の咒を念じて云く、且らく聽す、這の漢疑ふこと三十年せんことを。如今の禪和子盡く道ふ、什麼と爲てか打つこと八下せざる、又た打つこと六下せざる、只だ打つこと七下すと。然らずんば、他問ふて、試に欽山が爲めに箭を發せよ、看んと道ふを等つて、便ち打たんと。似たることは也た似たり、是なることは未だ是ならざる在り。這箇の公案、須らく是れ、胸襟裏、些子の道理計較を懐かず、語言の外に超出して、方に能く一句下に三關を破すること有り、及び箭を放つ處有るべし。若し是と非とを存せば、卒に摸索不着。當時這の僧、若し是れ個の漢ならば。欽山也た大いに險ならん。他既に此の命を行すること能はず、免れず倒に行せらるゝことを。且らく道へ、關中の主、畢竟して是れ什麼人ぞ。看よ、雪竇頌して云く。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢやが、コノ評は好くない、取らぬ方が好い。併しサ、今更コレを扶けて見る則んば、欽山亦か好一員の宗匠、只だ是れ不便を欠くか。良禪客、也た妨げず是れ一員の戰將なることを。欽山の手裏に向つて、左盤右轉して、鞭を墜し韜を閃す」と、良禪客、欽山に向つ

てサ、馬上の働き、自由自在なものぢや。「未後可惜許、弓折れ箭盡く」と、コノ評取るべからずぢや。茲に仔細が有る。良禪客、首を回して擬議したは恐しいものぞ。「然も是の如くなり」と雖も、李將軍自ら嘉聲の在る有り、封侯を得ざれば也た是れ閑なり」と、コリヤ李將軍を良公に比して云ふたぢや。コレは羅隱(唐代の人)の詩の句ぢや。「韋公子に題する詩」に云ふのに、「狂歌を擊著して別顔を慘ましむ、百年人事夢魂の間、李將軍自ら嘉聲有り、封侯を得ざれば也た是れ閑なり」とある。李將軍とはサ、初めの第四則の頌の中にあつたが、李廣のことぢや。コノ人は弓取りの名人として評判ぢやつたが、過分の知行奉祿も得なだから、取るに足らぬと。コリヤ如何云ふ譯かと云ふに、「前漢書」を見れば能く分る。李廣傳の中に斯うある。「廣(李廣)爵邑を得ず、官、九卿に過ぎず。廣の軍吏及び士卒、或は封侯を取る。廣、望氣(即ち人相見なり)王朔と語つて云く、匈奴を征してより、廣、未だ嘗つて其の中に在らざるはあらず。而も諸凡て校尉より下る、材能、中に及ばざるも、軍功を以つて侯を取る數十人。廣、人に後れを爲さず。然も終に尺寸の功の封邑を得る無きは何んぞや。豈に吾が相、侯に當らざらんやと。朔曰く、將軍自ら忽にす。豈に嘗つて恨むる者在るや。廣曰く、吾れ隴西の守と爲る。危、嘗つて反す。吾れ降者八百余人を誘ふて、詐つて同日に之れを殺す。今に至る迄、獨り之れを恨むのみ。朔曰く、禍、己れに降れるを殺すより大なるは莫し。此れ乃ち將軍の侯を得ざるものなり」と。併し茲に良公の働きを、李將軍に比するは當らぬ。「這箇の

公案、一出入、一擒一縱、當機觀面に提げ、觀面當機に疾し。都て有無得失に落ちず、之れを玄機と謂ふ」と、サ、欽山と良公、法戦一場、互に手目は見せぬ、甲乙はないぞ。傍からは計られぬ。「稍や些子の力量を虧けば、便ち顛蹶有り」と、然も少しケツマツイタと云ふがサ、衲はケツマツイタとは思はんど。「這の僧亦た是れ箇の英靈底の衲子。箇の間端を致す、妨げず群を驚かすことを。欽山は是れ作家の宗師、便ち他の問頭の落處を知る。鏃は箭鏃なり。一箭、三關を射透する時如何と。欽山の意に道く、爾が射透し得ることは且らく置く、試に關中の主を放出せよ、看ん」と、併し欽山、眞只中を射抜かれたぢや。「良云く、慙慙ならば過を知つて必らず改めんと。妨げず奇特なることを」と、群を驚かし衆を動かす。コリヤ向上の調べぢや。「欽山云く、更に何れの時をか待たんと」、大小大の欽山、語に隨つて解を生ずぢや。サ、良公が此處に於て力を失ふは何故ぢや。是れ知己に遇はざるが爲めぢや。小鼓は能く打つたれども、大鼓が拍子を違へたぞ。「看よ、他、慙慙の祇對、欽山の所問、更に些子空缺の處無し」と、コノ評はニスイぞ。「後頭に良禪客却つて道ふ、好箭放つて所在を着けずと云ふて、拂袖して便ち出づ」と、アツタラ矢を打つ捨つて残念々々と、コレ勘定はすんだ。コレより別調の中に入つてサ。「欽山纔かに他の慙慙に道ふを見て、便ち喚んで云く、且來聞黎と。良禪客、果然として把不住。即ち首を回らす」と、此處で敗缺したと。サウぢやないぞ。「欽山擒住して云く、一鏃破三關は則ち且らく止く、試に欽山が爲めに箭を發せよ、看ん」

と、コリヤ第二重ぢや。「良、擬議す」と、コレを眞の擬議と見るは誤りぞ。「欽山便ち打つこと七棒して、更に後に随つて、他の與めに一道の咒を念じて云く、且らく聽す、這の漢疑ふこと三十年ならんことを」と、コリヤ第三重ぢや。瞎棒なりや、イクラ打たれても耻辱ぢやないぞ。「一道の咒」と云ふのはサ、涉らざる義ぢや。「如今の禪和子盡く道ふ、什麼としてか打つこと八下せざる、又打つこと六下せざる、只だ打つこと七下すと」、棒の數にまで取り付いて、四の五のと云ひくさる。埒なし者共めが。「然らずんば、他問ふて、試に欽山が與めに箭を發せよ、看んと道ふを等つて、便ち打たんと。似たることは也た似たり、是なることは未だ是ならざる在り」と、是でも非でも許さぬ處と。アツタラこれも違ふた。「這箇の公案、須らく是れ、胸襟裏、些子の道理計較を懷かず、語言の外に超出して、方に能く一句下に三關を破すること有り、又た箭を放つ處有るべし」と、サ一是れでは届かぬ。コノ語を見損ふと、白木の禪法になるぞ。是れ等は難透を咬み砕いた後の物語ぢやものを。「若し是と非とを存せば、卒に摸索不着ならん。當時這の僧、若し是れ個の漢ならば、欽山也た大いに險ならん」と、サウぢやない、素知らぬ顔して居る處は怖い。他既に此の令を行すること能はず、免れず倒に行せらるゝことを。且らく道へ、關中の主、畢竟して是れ什麼人ぞ。看よ、雪竇頌して云く」と、「關中の主」とは何者ぢや。三世諸佛の母かサ、天地虚空の父がサ。サ一雪竇の頌する處を看よ。

與君放出關中主

○中也○當頭蹉過○退後退後

放箭之徒莫莽鹵

○一死不再活○大語訛過了

取箇眼兮耳必聾

○左眼半斤○放過一着○左

邊不前右邊不後

捨箇耳兮目雙瞽

○右眼八兩○只得一路○進前則墮坑落

墮○退後則猛虎銜脚

可憐一鏃破三關

○全機恁麼來時如何○道什麼○破

也隨也

的的分明箭後路

○死漢○咄○打云還見麼

君不見○癩兒

牽伴○打葛藤去也

玄沙有言兮

○那箇不是玄沙

大丈夫先天爲心

祖○一句截流萬機寢削○鼻孔在我手裏○未有天地世界已前在什麼處安身立命

【和訓】 君が與めに放出す關中の主。○中れり。○當頭に蹉過す。○退後退後。○放箭の徒莽鹵なること莫れ。○一死不再活せず。○大いに訛訛、過ぎ了れり。箇の眼を取れば耳必ず聾す。○左眼半斤。○一着を放過す。○左邊前まず右邊後れず。箇の耳を捨れば目雙ら瞽す。○右眼八兩。○只だ一路を得たり。○進前する則んば坑に墮ち墮に落つ。○退後する則んば猛虎脚を銜む。○葛藤可し一鏃破三關。○全機恁麼に來る時如何。○什麼と道ふぞ。○破也隨也。○的的分明なり箭後の路。○死漢。○咄。○打つて云く、還つて見る麼。○癩兒伴を牽く。○葛藤を打し去る。○玄沙言へること有り。○那箇か是れ玄沙にあらざる。○大丈夫天に先つて心の祖爲り。○一句截流、萬機寢削。○鼻孔我が手裏に在り。○未だ天地世界在ら

【提唱】

願 コレから雪竇の頌ぢや。雪竇、良禪客の後の語を愛して頌出した。録中、五首とはない頌ぞ。コノ頌は極めて會し難い、老衲も昔日錯つて會した。諸人、等閑の看をなすな。

「君が與めに放出す關中の主」と、コレは「恁麼ならば過を知つて必らず改めん」と云ふ語を頌したのぢや。サー斯うして「關中の主」を眞ッ裸體にして示した程に、各々見參せよ。

「放箭の徒莽齒なること莫れ」と、天下の老和尚も明眼の衲僧も、胡乱に見て遣り損ふな。參學の徒は是れ「放箭の徒」ぢや。

「箇の眼を取れば耳必らず聳す」と、良公が「恁麼ならば過を知つて必らず改めん」と云ふた一句子、言語を絶する底ぢや。賞翫の餘り云はん方なさに、切めて見んとすれば眼聳し、聞かんとすれば耳又た聳すぢや。目に見れば耳は留守ぢや。コレと次ぎ下の二句には、雪竇、許多の工夫有り。神を究め力を盡して、若し能く信受せば、別に生涯が有らうぞ。コノ句からは、歸宗の頌中の語を用ひた。

「箇の耳を捨れば目雙ら聳す」と、鳳、金網を離れ、鶴、籠を脱する處を識得せねば不可ぬ。六根

收つた處が「關中の主」ぢやなどと邪解しまいぞ。コレは又た雪竇が、椗の木枕を五つに割つて、茶を煮て頌した。難有く思へば神仙の絆も切れたぞ。サー前の一、二の句は、諸人の爲めに「關中の主」を投げ出す程に、精出して射て取れと云ふのぢや。又た三、四の句はサー「關中の主」、歴然なれども、見ることはならぬ。何故となれば、眼で物を見れば、色惑に障えられて、耳に聞えぬ。又た耳で物を聞く時は、聲惑に障えられて、眼が見えぬ。斯くの如く六根融通せぬに依つてのとぢや。「憐む可し一鏃破三關」と、良公の一箭、「恁麼ならば過を知つて必らず改めん」の語、天晴々々。良公は愛い奴ぢや。

「的的分明なり箭後の路」と、良公が、首を回して擬議した脚下、コリヤ佛祖傳來の些子ぞ。サー三關破れて後は、十日雙へ照すが如く、百發百中、幾度射ても違はぬ矢先あれども人が知らぬ。

「君見すや」と、サー諸人看よ。

「玄沙言へること有り」と、コ、に到つて轉じて玄沙の語とした。茲に妙處有り。本來歸宗の語ぢやけれども、玄沙が拈するに及んで、別に旨趣があるぞ。

「大丈夫天に先つて心の祖爲り」と、良公、眞の大丈夫の處ぢや。七十棒打たれても、知らぬ顔して居る、取り合はぬ、煮ても焼いても疵はない、確かなものぢや。サー此の場になつて、初めて三關を破るぢや。

「コレから圓悟の著語ぢや。」

「與君放出關中主」——「中れり、雪竇こそ確かに射當てたぞ。當頭に蹉過す、あたまた下しに蹉過ぢや。サ、こりや欽山か良公かサ。退後退後、蹉過した奴輩、シツク、其處退け。」

「放箭之徒莫莽鹵」——「死再活せず、コノ箭に當つては、イカな者でも堪るものでない。關中の主」を放出した處を知らねば死人ぞ。大いに譎訛、過ぎ了れり、胡亂にするナなどと云ふて居る中に、「關中の主」はモウそこらには居らぬ。コレで見ると、圓悟も滿更ぢやないわい。

「取箇眼兮耳必聲」——「左眼半斤、コリヤ兩句互換ぢや。眼でも耳でも何も違つたことはない、ツマリ同じぢや。半斤は八兩ぢや。一着を放過す、雪竇、大切な妙處を云ふて仕終ふて、落草ぢやないか。左邊前まず右邊後れず、眼でもなけりや耳でもない。關中の主」は眞ッ只中ぞ。

「捨箇耳兮目雙瞽」——「右眼八兩、兩句互換ぢや。八兩は半斤ぢや。只だ一路を得たり、耳も瞽、眼も瞽なりや、二邊に渡らぬ。所謂前後の路は一筋ぞ。進前する則んば坑に墮ち墮ち落つ、退後する則んば猛虎脚を銜む、過、不及の兩邊に墮するぞ。コリヤ是れ肝要な下語、兩句眞の當意ぢや。」

「可憐一鏃破三關」——「全機恁麼に來る時如何、サ、一鏃破三關」の全機が驀に來る時、諸人はドウしやるぞ。「什麼と道ふぞ、コリヤ圓悟の意がすめぬので、雪竇に云ふたかサ。破也墮也、

三關の當位も破れて仕舞ふた。

「的的分明箭後路」——「死漢、我空法空を以つて見る馬鹿者め。箭後は毒海ぢやから、皆な死人となるぢや。咄、圓悟堪へ兼ねて遣つた。打つて云く、還つて見る麼、分明と云ふが、サ、諸人。ナンと前後の路を見たかどうぢや。」

「君不見」——「癩兒伴を牽く、雪竇、手前だけでスマサないで、又た癩兒の道伴をこしらえて、ドウする積りぞ。葛藤を打し去る、モウ聞きたくないぞと。コノ二句は、下へ掛けて見よ。」

「玄沙有言兮」——「那箇か是れ玄沙にあらざる、玄沙ばかりぢやない、誰れも知つたぢや。大丈夫先天爲心祖」——「一句截流、萬機囊削、コノ一句で云ひ盡した、コノ一句が出ると、佛を切り祖を切るぢや。鼻孔我が手裏に在り、諸人の鼻孔は、悉くコノ圓悟の手の裏に在るぞ。ソレで何んとして心の祖」となり得られうぞ。未だ天地世界有らざる已前、什麼の處に在つてか安身立命せん、心の祖」となるはソノ通りぢやらうが、まだ天地ない時、「關中の主」は先づ何處で安身立命したものぢやう。

此頌數句取歸宗頌中語歸宗昔日因作此頌號曰歸宗宗門中謂之宗旨之說後來同安聞之云良公善能發簡要且不解中的有僧便問如何得中的安云關中主是什麼人後有僧舉

似欽山山云良公若恁麼也未免得欽山口雖然如是同安不是好心雪竇道與君放出關中主開眼也着合眼也着有形無形盡斬為三段放箭之徒莫莽鹵若善能放箭則不莽鹵若不善放則莽鹵可知取箇眼兮耳必聾捨箇耳兮目雙瞽且道取箇眼爲什麼却耳聾捨箇耳爲什麼却雙瞽此語無取捨方能透得若有取捨則難見可憐一鏃破三關的分明箭後路良禪客問一鏃破三關時如何欽山云放出關中主看乃至末後同安公案盡是箭後路畢竟作麼生君不見玄沙有言今大丈夫失天爲心祖尋常以心爲祖宗極則這裏爲什麼却於天地未生已前猶爲此心之祖若識破這箇時節方識得關中主的分明明箭後路若要中的箭後分明有路且道什麼生是箭後路也須自着精彩始得大丈夫先天爲心祖玄沙常以此語示衆此乃是歸宗有此頌雪竇誤用爲玄沙語如今參學者若以此心爲祖宗參到彌勒佛下生也未曾在若是大丈夫漢心猶是兒孫天地未分已是第二頭且道正當恁麼時作麼生是先天地

【和訓】此の頌數句、歸宗の頌中の語を取る。歸宗昔日、此の頌を作るに因つて、號して歸宗と曰ふ。宗門中に之れを宗旨の説と謂ふ。後來同安之れを聞いて云く、良公善能く箭を發す、要且つ的に中ることを解せず。僧有り、便ち問ふ、如何んが的に中ることを得ん。安云く、關中の主、是れ什麼人ぞと。後に僧有り、欽山に舉似す。山云く、良公若し恁麼なるも、也た欽山か口を死れ得ずと。然も是の如くなりと雖も、同安是れ好心にあらず。雪竇道く、君の與めに放出す關中の主と。開眼も也た着たり、合眼も也た着たり、有形無形、盡く斬つて三段と爲す。放箭の徒莽鹵なること莫れと。若し善能く箭を放たば、則ち莽鹵ならず。若し善く放たずんば、則ち莽鹵なること知る可し。箇の眼を取れば耳必ず聾す、箇の耳を取れば目必ず聾すと。且らく道へ、箇の眼を取れば、什麼と爲てか却つて耳聾する。箇の耳を取れば、什麼と爲てか却つて雙ら聾す。此の語、取捨無くんば方に能く透得せん。若し取捨有らば、則ち見難し。憐む可し一鏃破三關、的的分明なり箭後の路と。良禪客問ふ、一鏃破三關の時如何。欽山云く、關中の主を放出せよ、看んと。乃至末後同安の公案、盡く是れ箭後の路なり。畢竟して作麼生。君見ずや、玄沙言へること有り、大丈夫先に先つて心の祖爲りと。尋常心を以つて祖宗の極則と爲す。這裏什麼と爲てか、却つて天地未生已前に於て、猶ほ此の心の祖と爲る。若し這箇の時節を識破せば、方に關中の主を識得せん。的的分明なり箭後の路と。若し的に中らんと要せば、箭後分明に路有り。且らく道へ、作麼生か是れ箭後の路。也た須らく自ら精彩を着けて始めて得べし。大丈夫先に先つて心の祖爲りと。玄沙常に此の語を以つて衆に示す。此れ乃ち是れ歸宗、此の頌有り。雪竇誤つて用ひて、玄沙の語と爲す。今の參學者の如きんば、若し此の心を以つて祖宗と爲さば、參じて彌勒佛下生に到るとも、也た未だ會せざること有らん。若し是れ大丈夫の漢ならば、心猶ほ是れ兒孫、天地未分も已に是れ第二頭。且らく道へ、正當恁麼の時、作麼生か是れ天地に先んず。

【提唱】コレから圓悟の評ぢや。「此の頌數句、歸宗の頌中の語を取る。歸宗昔日、此の頌を作るに因つて、號して歸宗と曰ふ。宗門中に之れを宗旨の説と謂ふ」と、雪竇のこの頌は、歸宗の頌の中から數句を取つて居る。ソノ歸宗の頌と云ふは、ドウあるかと云ふに、「傳燈」の二ノ八に出て居る。曰く、「宗に歸して事理絶し、日輪正に午に當る。自在なること獅子の如く、物の與めに依怙せず。四山の頂を獨歩して、三大路を優游す。缺味すれば飛禽墜ち、嗔呻すれば衆邪怖る。機豎て箭及び易く、影没して手覆ひ難し。施張すること工伎の若く、裁翦すること尺度の如し。巧に萬般の名を

鏃^さみ、宗に歸して還つて土に似たり。語默音聲絶え、旨の妙情措き難し。箇の眼を棄れば還つて聲し、箇の耳を取れば還つて瞽^こす。一鏃破三關、分明なり箭後の路。恰^{おほ}む可し大丈夫、天に先つて心の祖爲り」と。コノ述作が絶倫ぢやから、禪宗を此の師(歸宗)に歸すと云ふ義で「歸宗」と云はれた。コノ頌は宗門の中では、宗旨の説と云ふて甚だ評判ぢや。歸宗は智常と云ふて、馬祖の嗣ぢや。「後來同安之れを聞いて云く」と、同安常察は九峯道虔^{くわうたうけん}に嗣ぎ、虔は石霜慶諸^{せきしようけいしよ}に嗣いだ。「良公善能く箭を發す、要且つ的に中ることを解せず」と、是れ知つて道ふたか、知らずして道ふたか。「僧有り、便ち問ふ、如何んか的に中ることを得ん。安云く、關中の主是れ什麼人ぞ」と。良公の「恁麼ならば過を知つて必らず改めん」と云ふたこそスマジイのにサ。コノ語は八里下つたわい、汚^{きた}ない、惜む可し。後に僧有り、欽山に舉似す。山云く、良公若し恁麼なるも、也た欽山が口を免れ得ずと、ながく無駄口さくまいものと。「然も是の如くなりとも雖も、同安是れ好心にあらず」と、コノ句、味有るに似たり、良公に恐しい處が有るを知らぬか。「雪竇道^{せつざう}く、君が與めに放出す關中の主と、サー回避するに處無しぢや。開眼も也た着たり、合眼も也た着たり。有形無形、盡く斬つて三段と爲すと、有無を斬り盡した處こそ關中の主よ。「放箭の徒莽鹵なること莫れと。若し善能く箭を放たば、則ち莽鹵ならず。若し善く放たずんば則ち莽鹵なること知る可し」と、弓矢取る身は善く放たなければならぬ。必らず莽鹵にすまいぞ。「箇の眼を取れば耳必らず聾す、箇の耳を捨れば目雙ら

見すと。且らく道へ、箇の眼を取れば、什麼と爲てか却つて耳聾する。箇の耳を捨れば、什麼と爲てか却つて雙ら聾す」と、コレが如何してとどかぬ。已下の評は不徹ぢや。「此の語、取捨無くんば方に能く透得せん。若し取捨有らば、則ち見難し」と、設へ取捨無くとも、亦た透得し難いぞ。コノ穿鑿より、良公の「恁麼ならば」の語。石火矢より恐しいことを知れ。コレから已下の評は別して好くない、取らぬ方が好いが、まあザツと讀んで置から。「憐む可し一鏃破三關、的的分明なり箭後の路と。良禪客問ふ、一鏃破三關の時如何。欽山云く、關中の主を放出せよ、看んと、乃至末後同安の公案、盡く是れ箭後の路なり」と、イ、ヤ違つた、不是々々。「畢竟して作麼生。君見ずや、玄沙言へると有り、大丈夫に天先つて心の祖爲り」と、コリヤ良公の擬議を云ふた。「擬議」、キブイものぢや。「尋常心を以つて祖宗の極則と爲す」と、サー一心法界、法界を蹴破るであらうでならば、魔界に入つて抜くぞ。「這裏什麼と爲てか、却つて天地未生已前に於て、猶ほ此の心の祖と爲る。若し這箇の時節を識破せば、方に關中の主を識得せん」と、サー此の天地未生已前に於て、心の祖と爲る時節を識得すれば、又た關中の主をも識得するぞ。良公、天晴れの「關中の主」ぢや。「的的分明なり箭後の路」と、幾筋射ても路は違へぬ。「若し的に中らんと要せば、箭後分明に路有り。且らく道へ、作麼生か是れ箭後の路。也た須らく自ら精彩を着けて始めて得べし」と、各々自分で工夫して看よ。「大丈夫天に立つて心の祖爲り」と。玄沙常に此の語を以て衆に示す。此れ乃ち是れ歸宗、此の

頌有り。雪竇誤つて用ひて、玄沙の語と爲す」と、コリヤ決して誤つたのぢやない、只だ假りに玄沙の語としたのぢや。雪竇、始め歸宗の語を用ひ來つて、轉じて玄沙の句としたのは、甚だ妙處が有るぢや。ソレをサ、コ、で雪竇が、歸宗の語を誤つて玄沙の語としたと云ふのは、却つて誤りぢや。歸宗と玄沙と、言も心も同様で、些子の仔細あるを知つて、雪竇が上げ用ひた。良公が心と玄沙の心と同事ぞとて、良公の知音なきを頌したものだ。玄沙の頌は斯うぢや、「二三四五、日輪正に午に當る。怜ひ可し大丈夫、天に先つて心の祖爲り」と。「今の參學の者の如きんば、若し此の心を以つて祖宗と爲さば、參じて彌勒佛下生に到るとも、也た未だ會せざること存らん」と、サ、此の心を以つて極則としたらば、いつまで經つても埒はあくまいと。「若し是れ大丈夫の漢ならば、心猶ほ是れ兒孫」と、根元に向つて看よ。サウなければならぬ。「天地未分も已に是れ第二頭」と、コノ座敷は何處にあるかナ。「且らく道へ、正當恁麼の時、作麼生か是れ天地に先んず」と、サー展ぶる則んば法界に彌綸し、收むる則んば一絲も立せずぢや。ドウモ此の評は面白くない。

【三關】 洞山(良价)、常に三路を以つて人を接す。曰く、玄路、鳥路、展手、之れなり。「大慈寰中」 百丈懷海の法嗣。
 【アラ者】 疎忽者、亂暴者と云ふこと。「蛇を呼ぶ故事」 蛇は呼べは出て來るも、去らしむること能はずして困却すと云ふ傳説を指す。「徑の木枕を五つに割る」 微細にすること。「八里下つた」 劣つたこと。「キパイもの」 不氣味なもの。

第五十七則 趙州至道無難

【趙州至道無難】

垂示云未透得已前一似銀山鐵壁及乎透得了自己元來是銀山鐵壁
 或有人問且作麼生但向他道若向箇裏露得一機看得一境坐斷要津
 不通凡聖未爲分外苟或未然看取古人樣子

【和訓】 垂示に云く、未だ透得せざる已前、一に銀山鐵壁に似たり。透得し了るに及んで、自己元來是れ銀山鐵壁。或は人有つて、且つ作麼生と問はば、但だ他に向つて道はん。若し箇裏に向つて、一機を露得し、一境を看得せば、要津を坐斷して、凡聖を通せざるも、未だ分外と爲さず。苟し或は未だ然らずんば、古人の様子を看取せよ。

【提唱】 第五十七則、「趙州至道無難」と、コノ則はサ、便ち趙州自在の境界、以つて、欽山、良公、則を失し、知寄底を錯つて、這の公案を圖らざるの類に如かざるに通ずるとを明すぢや。

「垂示に云く、未だ透得せざる已前、一に銀山鐵壁に似たり」と、コノ垂示は、白雲守端禪師の上堂の語を用ひたのぢや。ソノ上堂に曰く、「古人一言半句を留む。未だ透得せざる時は、鐵壁に撞着するに相ひ似たり。忽然として一日觀看して透る後は、方に知る、自己便ち鐵壁なることを。如今

作麼生か透らん。復た曰く、鐵壁鐵壁」と(會元の十九卷にあり)。サー隻手の聲を聞かなけりや、佛祖の關門は銀山鐵壁のやうで、寄り付くこともならぬ。捨て置かれず、爪も立たずぢや。併しサ、「透得し了るに及んで、自己元來是れ銀山鐵壁」と、隻手の聲を聞き得るであらうぞならば、自己が全體隻手の聲ぢや。佛祖も手を挟むこと能はず、爪も立てることもならぬぞ。昔は法が銀山鐵壁ぢやつたが、今は自己が即ち銀山鐵壁ぢや。「或は人有つて、且つ作麼生と問はば」と、人が有つて、如何やうに致して好からうかと問へばサ。「但だ他に向つて道はん。若し箇裏に向つて、一機を露得し、一境を看得せば」と、サー此の銀山鐵壁の處に向つて、「一機を露得し」と、一機とは何んぢや。是れ人々具足の一機ぢや。頭の天邊から足の爪先まで、コボレくあるは。ソレをムキ出しにしてサ、「一境を看得せば」で、コリヤ「法華經」の眞ツ只中をチラリと見るのと違はぬぞ。「要津を坐斷して、凡聖を通ぜざるも、未だ分外と爲さず」と、眞向是くの如く、百由旬をして、諸の患ひ無からしめ、諸天花を捧ぐるに路無きも、何も珍らしいことではない。是れ本來の有様、コノ場は各々手前にあるぞ。「苟し或は未だ然らずんば、古人の様子を看取せよ」と、若しサウでないならばサ、古人の作略を看て取れ。

舉僧問趙州至道無難唯嫌揀擇如何是不揀擇 ○這鐵蒺藜○多

少人吞不得○大有入疑着在○滿口含霜 州云天上天下唯我獨尊 ○平地
上起骨堆○衲僧鼻孔一時穿却○金剛鑄鐵券 僧云此猶是揀擇 ○果然隨他
轉了也○拶着這老漢 州云田庫奴什麼處是揀擇 山崩石裂 僧無語
○放爾三十棒○直得目瞪口呆

【和訓】 舉す。僧、趙州に問ふ、至道無難、唯嫌揀擇、如何なるか是れ不揀擇、(○この鐵蒺藜。○多少の人吞むこと得じ。○大いに人の疑着する在ること有り。○滿口に霜を含む) 州云く、天上天下、唯我獨尊、(○平地上に骨堆を起す。○衲僧の鼻孔一時に穿却す。○金剛、鐵券を鑄る。) 僧云く、此れ猶ほ是れ揀擇。○果然として他に隨つて轉じ了れり。○這の老漢拶着す。州云く、田庫奴、什麼の處か是れ揀擇、(○山崩れ石裂く。) 僧、無語。(○爾に放す三十棒。○直に得たり目瞪口呆すること。)

【提唱】

本則 コレから本則ぢや。

「舉す。僧、趙州に問ふ、至道無難、唯嫌揀擇、如何なるか是れ不揀擇」と、コノ坊主、趙州の醜態の上味を、猫のヘドにして仕舞ふたわい、アツタラものぢや。「至道無難、唯嫌揀擇」と、佛祖以

來の大事、コノ中に在るを見徹して、家常茶飯の示ぢや。コノ南天棒もサ、茲に久しく迷惑した、歌にも連歌にも詠まれぬ。サ、此れを、我は凡、他は聖と見ては、三祖は夢にも見ることはならぬぞ。「如何なるか是れ不揀擇」とサ、這の僧、趙州が如何に答ふるも、ソリヤ揀擇ぢやと云はん機ぢや。「州云く、天上天下、唯我獨尊」と、コリヤ講釋はない。是れ佛、初生の語なりと雖も、一代説教も祖師の大事も、悉くコノ一句の中に含まれて居る。サ、此の當體、揀擇すべきものがあるかサ、東西南北鐵一團ぢや。「唯我獨尊」と、コリヤ抑しても違ふ、讀しても違ふぞ。

「僧云く、此れ猶ほ是れ揀擇」と、コノ坊主は鈍漢ぢや。「唯我」の我を、人我、物我の我と見た、然れば二法が立つから、コナナことをホザイたのぢや。

「州云く、田圃奴、什麼の處か是れ揀擇」と、スルト趙州がサ、コノ下司野郎めと。趙州、忍俊不禁にして云ふた、いつもの名作か、ナンだか怖いく。「圃」は、「事苑」に「當に舍に作るべし。圃は式夜の切。姓也、義に非らず」と云ふてある。即ち田舎者の下賤無智なるを云ふぢや。

「僧、無語」と、趙州に斯う出られぢや、コノ坊主も口は開けまじ。

〔著語〕 コレから圓悟の著語ぢや。

「舉僧問趙州至道無難唯嫌揀擇如何是不揀擇」——「這の鐵蒺藜」、「多少の人呑むこと得じ」、コノ「至道無難」の的意は、鐵蒺藜のやうぢや。誰れ一人、齒も立つまい、容易な問題でない。「大いに

人の疑着する在ること有り」、茲に至つては、ナカ／＼見えぬぞ。「滿口に霜を含む」、「至道無難」は説不得ぢや。

「州云天上天下唯我獨尊」——「平地上に骨堆を起す」、無事に事を生じて、海内亂れて麻の如しぢや、「衲僧の鼻孔一時に穿却す」、衲僧もコレで鼻を拗り上げられる。「金剛、鐵券を鑄る」、金剛で鑄た鐵券なら確かなものぢや。「券」とは誓書のことぢや。

「僧云此猶是揀擇」——「果然として他に隨つて轉じ了れり」、そりやこそ、趙州のシッコに付いて廻つた。「這の老漢を撻着す」、ナレドモ能く云ふたと、コリヤ弄したのぢや。

「州云田圃奴什麼處是揀擇」——「山崩れ石裂く」、恐る可しく。

「僧無語」——「衲に放す三十棒」、今日は先づ放してやらうかい。「直に得たり目瞪し口呿すること」、ケロリとして笑止千萬ナ。「瞪」は直視ぢや、「呿」は口を開ける、即ち無語底ぢや。

僧問趙州至道無難唯嫌揀擇三祖信心銘劈頭便道這兩句有多少人錯會何故至道本無難亦無不難只是唯嫌揀擇若恁麼會一萬年也未夢見在趙州常以此語問人這僧將此語倒去問他若向語上覓此僧却驚天動地若不在語句上又且如何更參三十年這箇些子關捩子須是轉得始解拈虎鬚也須是本分手段始得這僧也不顧危亡敢將虎鬚便道此猶是

揀擇趙州劈口便塞道田軍奴什麼處是揀擇若問着別底便見脚忙手亂爭奈這老漢是作
 家向動不得處動向轉不得處轉爾若透得一切惡毒言句乃至千差萬狀世間戲論皆是醍
 醐上味若到着實處方見趙州赤心片片田軍奴乃福唐人鄉語罵人似無意智相似這僧道
 此猶是揀擇趙州道田軍奴什麼處是揀擇宗師眼目須至恁麼如金翅鳥擊海直取龍吞雪
 寶頌云。

【和訓】僧、趙州に問ふ、至道無難、唯嫌揀擇と。三祖の信心銘、劈頭に便ち這の兩句を道ふ。多少の人有つて錯つて會す。何
 か故ぞ。至道本と難きこと無し、亦た難からざること無し。ただ是れ唯だ揀擇を嫌ふと。若し恁麼に會せば、一萬年にも也た未
 だ夢にも見ざることならん。趙州常に此の語を以つて人に問ふ。這の僧、此の語を將つて倒に去つて他に問ふ。若し語上に向つ
 て覓めば、此の僧却つて天を驚かし地を動かす。若し語句上に在らずんば、又た且らく如何。更に參ぜよ三十年。這箇の些子の
 關捩子、須らく是れ轉じて始めて解すべし。虎鬚を持つることは、也た須らく是れ本分の手段にして始めて得べし。這の僧
 也た危亡を顧みず、敢て虎鬚を拵せて便ち道ふ、此れ猶ほ是れ揀擇と。趙州劈口に便ち塞いで道ふ、田軍奴、什麼の處か是れ揀
 擇と。若し別底に問着せば、便ち脚忙しく手亂るゝことを見ん。爭奈せん、這の老漢是れ作家なることを。動不得の處に向つ
 て動し、轉不得の處に向つて轉す。爾若し透得せば、一切惡毒の言句、乃至千差萬狀、世間戲論、皆な是れ醍醐の上味なり。
 若し着實の處に到らば、方に趙州赤心片片たることを見ん。田軍奴は乃ち福唐の人の郷語、人の無意智に似て相ひ似たるを
 罵る。這の僧道く、此れ猶ほ是れ揀擇と。趙州道く、田軍奴、什麼の處か是れ揀擇と。宗師の眼目、須らく恁麼なるに至つ
 て、金翅鳥の海を擊いて、直に龍を取つて吞むが如くなるべし。雪寶頌して云く。

【提唱】コレから圓悟の評ぢや。「僧、趙州に問ふ、至道無難、唯嫌揀擇と、三祖の信心銘、劈頭に
 便ち這の兩句を追ふ」と、「至道無難、唯嫌揀擇」とは「信心銘」の最初に云ふてある句ぢや。「多少の
 人有つて錯つて會す。何が故ぞ。至道本と難きこと無し、亦た難からざること無し、只だ是れ唯だ
 揀擇を嫌ふと。若し恁麼に會せば、一萬年にも也た未だ夢にも見ざることならん」と、多くの者がコ
 ノ句を見錯つてサ、至道には難もない又た不難もない。只だく揀擇を嫌ふのぢやなどと、すまし
 て置くが、ソナナことぢや、千年萬年經つても、「信心銘」を見ることはならぬぞ。イヤ〜「信心
 銘」ばかりではない。「外、諸縁を止め、内、聲色を絶す」と云ふ句も、世尊の云はれた「吾に正法眼
 藏、涅槃妙心、實相無相、微妙の法門在り」の語も、皆な錯つて會すぢや。イヤハヤ困つたものぢ
 や。「趙州常に此の語を以つて人に問ふ。這の僧、此の語を將つて倒に去つて他に問ふ。若し語上に
 向つて覓めば、此の僧却つて天を驚かし地を動かす」と、コノ大事が語句上に在ると云ふて問ふて來
 た處が、ナンの這の僧、天を驚かし地を動かすものぞ。「若し語句上に在らずんば、又た且らく如何。
 更に參ぜよ三十年。這箇の些子の關捩子、須らく是れ轉じて始めて解すべし」と、このカラクリの
 根柢は、佛界魔界をデングリ返して始めて合點することぞ。「虎鬚を持つることは、也た須らく是れ
 本分の手段にして始めて得べし」と、コリヤ本分の眼の明いた者のすることぢや。「這の僧也た危亡
 を顧みず、敢て虎鬚を拵せて便ち道ふ、此れ猶ほ是れ揀擇と」、コノ坊主は馬鹿太い奴ぢやから、身の

程も知らずニサ、趙州に取つて掛つた。「趙州劈口に便ち塞いで道ふ、田庫奴、什麼の處か是れ揀擇と、趙州、隙間なく、直に「田庫奴」と云ふて、坊主の口を塞いで仕舞ふた。「若し別底に問着せば、便ち脚忙しく手亂るゝことを見ん。争奈せん、這の老漢是れ作家なることを。動不得の處に向つて動し、轉不得の處に向つて轉ず」と、サ、良公がやうな者に向つて問ふたらドウぢや。大方「首を回らし」と擬議とて、無語なるべきにサ。趙州の作略は又た格別ぢや。「爾若し透得せば、一切惡毒の言句、乃至千差萬狀、世間戲論、皆な是れ醍醐の上味なり」と、若し此の「至道無難」を手に入れやうぞならば、「牛過窓櫺」、「乾峯三種病」の話も、世間の茶飲話しも、皆な醍醐の上味となるぞ。「法華」を咬み破りさへすりや、一切の言句は醍醐の上味ぢや。「若し着實の處に到らば、方に趙州赤心片片たることを見ん」と、眞實徹底したならばサ、趙州の赤心片片たる處も、三世如來の肝腸も見ホスであらう。「田庫奴は福唐の人の郷語、人の無意智に似て相ひ似たるを罵る」と、「福唐」とは福州に在る郡の名ぢや。「這の僧道く、此れ猶ほ是れ揀擇と。趙州道く、田庫奴、什麼の處か是れ揀擇と。宗師の眼目、須らく恁麼なるに至つて、金翅鳥の海を壁いて、直に龍を取つて吞むが如くなるべし。雪竇頌して云くと、サ、こゝ處に至つて、ソノ小氣味の好さは、金翅鳥が海水を壁開してからに、龍を一ト吞みにするやうぢや。「金翅鳥」は梵語では迦樓羅と云ひ、龍を以つて食と爲すと稱せられて居る。サ、雪竇の頌はドウか。

似海之深 ○是什麼度量 ○淵源難測 ○也未得一半在 如山之固 ○什麼人
 據得 ○猶存半途 蚊蟲弄空裏猛風 ○也有恁麼底 ○果然不料力 ○可煞不自
 量 螻蟻撼於鐵柱 ○同坑無異土 ○且得沒交涉 ○闍黎與他同參 揀兮擇
 兮 ○擔水河頭賣 ○道什麼 ○趙州來也 當軒布鼓 ○已在言前 ○一坑埋却 ○如
 麻似粟 ○打云 ○塞却備咽喉

【和訓】 海の深きに似。(○是れ什麼の度量ぞ。○淵源測り難し。○也未得一半を得ざること有り。○山の固きが如し。(○什麼人か據得せん。○猶ほ半途に在り。○蚊蟲空裏の猛風を弄し。(○也た恁麼底有り。○果然として力を料らず。○可煞だ自ら量らず。○螻蟻鐵柱を撼かす。(○同坑に異土無し。○且得沒交涉。○闍黎他と同參。○揀たり擇たり。(○水を擔つて河頭に賣る。○什麼と道ふぞ。○趙州來也。○軒に當る布鼓。(○已在言前に在り。○一坑に埋却す。○麻の如く粟に似たり。○打つて云く。○備が咽喉を塞却す。)

【提唱】

○コレから雪竇の頌ぢや。

「海の深きに似」、「山の固きが如し」と、サ、「至道無難」の當體は、例へば海の深きが如く、山の固きがやうで、測り難く、犯し難い。コリヤ骨折れば骨折る程、段々深くなり、固くなる。イヤ

ハヤ手が付けられぬぞ。

「蚊窟空裏の猛風を弄し」と、この僧、此れ猶ほ是れ揀擇」と云ふたは大膽ぢやがサ、蚊窟が猛風を弄するやうなもので、まるツきり力に及ばぬことぢや。

「螻蟻鐵柱を撼す」と、丁度又た螻蟻が鐵の柱を動かさうとするやうなもので、身動きもするものぢやない。

「揀たり擇たり」と、コリヤ「至道無難、唯嫌揀擇」も、「天上天下、唯我獨尊」も引ッからげて、「揀たり擇たり」ぢや。サテ、見事なものぢや。コノ僧、無暗矢鱈と揀擇を問ひ廻るがサ、人に聞いたとて會るものぢやない、人々手前にあることぢや。

「軒に當る布鼓」と、是れ什麼ぞ、奇怪なものを吊るくつた。「揀たり擇たり」は、頭は猿、尾は蛇ぞ。ぢやからコンナ變哲もないものが出て來た。「漢書」に云ふのに、「漢の王尊、東平(地名)の相たり。王の太傅に謂つて曰く、布鼓を持つて雷門に向ふこと毋れと。説く者曰く、雷門とは越の會稽城門なり。大鼓有り、越、之れを撃てば、聲、洛陽に聞ゆ。布鼓は布を以つて鼓と爲す、聲無きなり」と。「軒に當る布鼓」とは、鳴らぬと云ふことか、馬鹿なと云ふことか、役に立たぬと云ふことか。サウでもない、兎角親切に參じて知れ。

〔著語〕 コレから圓悟の著語ぢや。

「似海之深」——「是れ什麼の度量ぞ」、至道が海に似たかサ。イヤ、似たものはないぞ。「淵源測り難し」、サハさりながら底はない。「也た未だ一半を得ざること有り」、雪竇、ナンボ讀しても、シヤ、二合半でもなし。ナカ、趙州の全體は云ひ取れぬ。

「如山之固」——「什麼人が撼得せん」、サ、此の山を撼り動かす人があるか。「猶ほ半途に在り」、趙州の力量に比べては、雪竇の額は半分程ぢや。

「蚊窟弄空裏猛風」——「也た恁麼底有り」、コノやうな大膽者もある。「果然として力を料らず」、己が分際をも知らぬ。「可憐な自ら量らず」、サ、諸人は力量が及ばないのか。左程むづかしいこともあるまいにサ。

「螻蟻撼於鐵柱」——「同坑に異土無し」、雪竇も亦たソノ同類ぢやらう。「且得沒交涉」、此れ猶ほ是れ揀擇」といふ底は、且得沒交涉ぢや。「閻黎他と同參」、雪竇もこの坊主もサ、同じやう馬鹿ツ面な奴ぢや。

「揀兮擇兮」——「水を擔つて河頭に賣る」、珍らしくもない、ソノやうなこと。圓悟、己はトツクに知り切つて居るぞ。「什麼と道ふぞ」、元來、至道に揀擇はない筈ぢやに、ナンと云やるぞ。「趙州來也」、コノ額は又た趙州が出て來たやうぢや。

「當軒布鼓」——「已に言前に在り」、ソレなら最早トツクに承知ぢや。「一坑に埋却す」、たとへ

「軒に當る布鼓」でも用ひたなら、趙州でも雪竇でも、圓悟許さぬぞ。「麻の如く粟に似たり」、布鼓は珍らしいことはない、何處にでもザラにある。「打つて云く」、「爾が咽喉を塞却す」、學者の喉クビリ、一句も云はせん積りぢや。

雪竇注兩句云似海之深如山之固僧云此猶是揀擇雪竇道這僧一似蚊蟲弄空裏猛風螻蟻撼於鐵柱雪竇賞他膽大何故此是上頭人用底他敢恁麼道趙州亦不放他便云田軍奴什麼處是揀擇豈不是猛風鐵柱揀今當軒布鼓雪竇末後提起教活若識得明白十分爾自將來了也何故不見道欲得親切莫將問來問是故當軒布鼓

【和訓】雪竇、兩句を注して云く、海の深きに似、山の固きが如しと。僧云く、此れ猶ほ是れ揀擇と。雪竇道く、這の僧一へに蚊蟲空裏の猛風を弄し、螻蟻鐵柱を撼すに似たりと。雪竇、他の膽、大なることを賞す。何が故ぞ。此れは是れ上頭の人の用ひる底、他敢て恁麼に道ふ。趙州亦た他を放さず、便ち云く、田軍奴、什麼の處か是れ揀擇と。豈に是れ猛風の鐵柱にあらざるや。揀たり擇たり、軒に當る布鼓と、雪竇、末後に提起して活せしむ。若し識得して明白ならば、十分に爾自ら將ち來り了れり。何が故ぞ。道ふことを見ずや。親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れと。是の故に、則に當る布鼓と。

【提唱】コレから圓悟の許ぢや。「雪竇、兩句を注して云く、海の深きに似、山の固きが如しと、

兩句と云ふのは、初めの「天上天下」の句と、後の「田軍奴」の句ぢや。「僧云く、此れ猶ほ是れ揀擇と。雪竇道く、這の僧、一に蚊蟲空裏の猛風を弄し、螻蟻鐵柱を撼すに似たりと。雪竇、他の膽、大なることを賞す」と、コノ「賞す」と云ふは笑ふ義ぢや。ナンのく大馬鹿く。「何が故ぞ。此れは是れ上頭の人の用ひる底」と、コリヤ法窟の爪牙を握つた人のする仕事ぢや。テンデ畑が違ふわ。他敢て恁麼に道ふ。趙州亦た他を放さず、便ち云く、田軍奴、什麼の處か是れ揀擇と。豈に是れ猛風の鐵柱にあらざるや」と、撼さるゝものかい。「揀たり擇たり。軒に當る布鼓と」、鼓かと思へば鳴らぬ、鳴らぬかと思へば鼓ぢや。「雪竇、末後に提起して活せしむ」と、人々自知自悟を知るは、雪竇の活句處ぢや「若し識得して明白ならば、十分に爾自ら將ち來り了れり」と、コノ骨合を明白に識得したなら、お寺の造作には預らぬぞ。「何が故ぞ。道ふことを見ずや。親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れと」、コリヤ首山省念の語ぢや。「是の故に軒に當る布鼓と」、是れ問を將ち來つて問ふから、打てども鳴らさるが如く、問ふても不會ぢや。コノ「當軒布鼓」は面白い。皆が風邪引いて咳をする、是の故に軒に當る布鼓サ。今日は三月七日好い天氣、是の故に軒に當る布鼓サ。

【註】「山崩石裂」一本山崩れを山高しに作る。「福唐人の郷語」福唐は明の福清縣なり。

第五十八則 趙州時人窠窟

【趙州時人窠窟】

舉僧問趙州至道無難唯嫌揀擇是時人窠窟否。○兩重公案。○也。是疑人處。○踏着秤鎚硬似鐵。○猶有這箇在。○莫以己妨人。州云曾有人問我直得五年分疎不下。○面赤不如語直。○胡孫喫毛蟲。○蚊子咬鐵牛。

【和訓】 舉す。僧、趙州に問ふ、至道無難、唯嫌揀擇、是れ時の人の窠窟なりや否や。○兩重の公案。○也。是れ人を疑はしむる處。○秤鎚に踏着すれば硬きこと鐵に似たり。○猶ほ這箇の在ること有らん。○己を以つて人を妨ぐることを莫れ。州云く、曾つて人有つて我に問ふ、直に得たり、五年分疎不下なることを。○面赤からんより語の直からんには如かず。○胡孫毛蟲を喫す。○蚊子鐵牛を咬む。

【提唱】 第五十八則、「趙州時人窠窟」と、コノ則是、又た趙州の智用、大いに他師と異なることを明すぢや。コレには垂示がない、直に本則ぢや。

本則

「舉す。僧、趙州に問ふ、至道無難、唯嫌揀擇。是れ時の人の窠窟なりや否や」と、コノ僧は作家ぢや。法と云ふものがサ、且らく是と云ふものが立つと、窠窟になる。ぢやから寢處ではないかと。コノ糞坊主、ヘン利口なことを云ふた。コノ「至道」の語はすさまじいが、知らねば窠窟になるぞ。「州云く、曾つて人有つて我に問ふ、直に得たり、五年分疎不下なることを」と、スルト趙州はサ、昔し其のやうなとを問ふた者があるが、今に答話を見付け出さぬと。サテ、趙州は如何なる月日の下で生れたれば、かゝる不思議自在を得たぞ。コノやうな語が出るものかサ。

【著語】 コレから圓悟の著語ぢや。

「舉僧問趙州至道無難唯嫌揀擇是時人窠窟否」——「兩重の公案」、コノ僧が三祖の語と、趙州の示衆とを持つて來たからぢや。又た示衆と窠窟と兩重の公案ぢや。「也。是れ人を疑はしむる處」。コノ所問はサ、這の僧ばかりの疑處ではないぞ。「秤鎚に踏着すれば硬きこと鐵に似たり」、「至道無難」の當位、硬きことは鐵のやうぢや。「猶ほ這箇の在ること有らん」、世界に、コノ「至道無難」のやうな厄介者があるものか。ソレより未だ硬いものがあらうか。「己を以つて人を妨ぐることを莫れ」、コノ「妨」は「方」に作つた方が好い。「論語」にも、「子貢、人に方ふ」とある。比ぶると云ふことぢや。コリヤ「時の人」と云ふに當て、サ、貴様が窠窟に這入つて居るからとて、人までサウぢやなどと思ふまいぞ。

「州云曾有人問我直得五年分疎不下」——「面の赤からんより語の直からんには如かず」、面の赤くなるより、語の正直なるに如くはない。物事は取り繕ふて耻搔かうより、有り體に云ふが増しぢや。「胡孫毛蟲を喫す」、コリヤ方語ぢや。趙州の此の語は、呑みも吐きもならぬ。ぢやから、酸いも旨いも知り人はない。「胡孫」とは猿のことぢや。「蚊子鐵牛を咬む」、コレも方語ぢや。サー何處から喰ひ付いたら好いかサ、備が口を下すに處なけんぢや。

趙州平生不行棒喝用得過於棒喝這僧問得來也甚奇怪若不是趙州也難答伊蓋趙州是作家只向伊道曾有人問我直得五年分疎不下問處壁立千仞答處亦不輕他只恁麼會直是當頭若不會且莫作道理計較不見投子宗道者在雪竇會下作書記雪竇令參至道無難唯嫌揀擇於此有省一日雪竇問他至道無難唯嫌揀擇意作麼生宗云畜生畜生後隱居投子凡去住持將袈裟裹草鞋與經文僧問如何是道者家風宗云袈裟裹草鞋僧云未審意旨如何宗云赤脚下銅城所以道獻佛不在香多若透得脫去縱奪在我既是一問一答歷歷現成爲什麼趙州却道分疎不下且道是時人窠窟否趙州在窠窟裏答他在窠窟外答他須知此事不在言句上或有箇漢徹骨徹髓信得及去如龍得水似虎靠山頌云

【和訓】 趙州、平生棒喝を行せず、用ひ得て棒喝に過ぎたり。道の僧、問ひ得て來る、也た甚だ奇怪なり。若し是れ趙州にあらずんば、也た伊に答へ難し。蓋し趙州は是れ作家。只だ伊に向つて道ふ、曾つて人有つて我れに問ふ、直に得たり、五年分疎不下なることを。問處、壁立千仞なれば、答處も亦た他を輕せず。只だ恁麼に會せば、直に是れ當頭。若し會せずんば、且らく道理計較を作すこと莫れ。見ずや、投子の宗道者、雪竇の會下になつて書記と作る。雪竇、至道無難、唯嫌揀擇に參せしむ。此に於て省有り。一日雪竇、他に問ふ。至道無難、唯嫌揀擇の意作麼生。宗云、畜生畜生と。後、投子に隱居す。凡そ去つて住持するに、袈裟を將つて、草鞋と經文とを裹む。僧問ふ、如何なるか。是れ道者の家風。宗云、袈裟に草鞋を裹む。僧云、未審し、意旨如何。宗云、赤脚にして銅城に下ると。所以に問ふ、佛に獻るには、香の多きに在らずと。若し透得脱し去らば、縱我れに在り。既に是れ一問一答、歷歷現成す。什麼と爲てか趙州却つて道ふ、分疎不下と。且らく道へ、是れ時人の窠窟なりや否や。趙州、窠窟の裏に在つて他に答ふるか、窠窟の外に在つて他に答ふるか、須らく知るべし、此の事、言句上に在らざることを。或は箇の漢有つて、徹骨徹髓、信得及しまらば、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似ん。頌して云く。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢや。「趙州、平生棒喝を行せず、用ひ得て棒喝に過ぎたり」と、サー趙州は、徳山や臨濟のやうに、平生棒喝は用ひないけれども、ソノひどいとは棒喝に幾層倍も増つて居ることを知らねばならぬ。「這の僧問ひ得て來る、也た甚だ奇怪なり」と、此奴、怪しからん奴ぢや。至道無難も知らぬ僻に問ひくさるテ。「若し是れ趙州にあらずんば、也た伊に答へ難し。蓋し趙州は是れ作家。只だ伊に向つて道ふ、曾つて人有つて我れに問ふ、直に得たり、五年分疎不下なることを。問處、壁立千仞なれば、答處も亦た他を輕せず。只だ恁麼に會せば、直に是れ當頭」と、

コノ「常頭」の二字が可厭ぢや。「只だ恁麼に會せば、直に是れ常頭」で、サウさへ合點すれば好からうと。コレ等は老婆親切の評ぞ。ナニ是れで好いものか。「若し會せずんば、且らく道即計較を作すこと莫れ」と、道理計較せいでナンとせう。「見ずや、投子の宗道者、雪竇の會下に在つて書記と作る。雪竇、至道無難、唯嫌揀擇に參ぜしむ。此に於て省有り。一口雪竇、他に問ふ。至道無難、唯嫌揀擇の意作麼生。宗云く、畜生畜生と」、コリヤ雪竇と宗道者との商量ぢや。宗道者は投子山の法宗禪師で、雪竇の法嗣ぢや。「會元」の十六に出て居る。雪竇が、「至道無難 唯嫌揀擇」を宗道者に問ふたら、宗道者は答へて「畜生畜生」とサ。宗道者も一休の類で、あぐんた奴サ。云ふことに事を缺いて、「畜生畜生」とはドウぢや。コリヤ醍醐の上味の如しぢや。アンマリ好く出来いた、趙州も舌を吐くぢやらう「後に投子に隱居す。凡そ去つて住持するに、袈裟を將つて、草鞋と經文とを裹む」と、コノ宗道者は後に投子に隱居したが、又た他處へ移る時に、草鞋と經文とを袈裟で裹んだ。イヤハヤ恐しい見解ぢやわい。「僧問ふ、如何なるか是れ道者の家風。宗云く、袈裟に草鞋を裹む。僧云く、未審し、意旨如何。宗道く、赤脚にして銅城に下ると」、或る坊サマがサ、宗道者に、道者の家風はドウぢやと聞くと、宗道者は云ふのに、袈裟に草鞋を裹むのが己の家風ぢやと。サテノ思ひ切つたことを云ふたものぢや。併しソノ坊サマは會らなかつたから、ソレはドウ云ふわけに御座ると問ふと、宗道者は答へて「走脚にして銅城に下る」と、素足で岩舟に上ると。働

も働いた話ぢや、愛いものぢや。コレならば、「袈裟に草鞋を裹む」と云ふも許されるぞ。コノ「銅城」の銅は桐に作つた方が好い。桐郷も投子も共に舒州に在る。「所以に道ふ、佛に獻るには、香の多きに在らずと」、佛の供物はナニも澤山するには及ばない。只々蘭花一枝、沈水一ヒネリで結構ぢや。コリヤ五祖法演の上堂の語ぢや。ソノ上堂に云ふのに、「淺く聞きて深く悟れ、深く聞けば悟らず。争てか奈何せん、争てか奈何せん。佛に獻るには香の多きに在らず」と。「若し透得脱し去らば、縱奪我に在り」と、サー向上の關捩子を透脱したならば、悟りを遣るも引つたくも、我に在る三昧ぢや。「既に是れ一問一答、歷歷現成す。什麼と爲てか趙州却つて道ふ、分疎不下と」、趙州の「會つて人有つて我に問ふ」の語、極めて絶妙。埒明けなんだと、コリヤどうしたものぞ。コノ語を雪竇の賞翫で、「象王囉呻し、獅子哮吼す」と頌した。雪竇、千七百則の中で斯くの如く賞美して頌したのは、ナゼかと參究す可しぢや。「且らく道へ、是れ時の人の窠窟なりや否や」と、「分疎不下」と答へたは、窠窟ではあるまいかサ。「趙州、窠窟の裏に在つて他に答ふるか、窠窟の外に在つて他に答ふるか。須らく知るべし、此の事、言句上に在らざることを」と、窠窟の内ぢや、外ぢやなどと云ふて居るより、根本に眼を着けて看るが好い。「或は箇の漢有つて、徹骨徹髓、信得及し去らば、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似ん、頌して云く」と、サー是れに徹底すりや確かなものぢや。ソレこそ鬼に鐵棒ぢや。天下に恐ろしいものはないぞ。雪竇の頌を看よ。

象王嘔呻 ○富貴中之富貴○誰人不悚然○好箇消息 獅子哮吼 ○作家中
 作家○百獸腦裂○好箇入路 無味之談 ○相罵饒餽接鬚○鐵樵子相似○有什
 麼咬嚼處○分疎不下五年強一葉舟中載大唐渺渺兀然波浪起誰知別有好思量 塞
 斷人口 ○相唾饒餽潑水○啖○閻黎道甚麼 南北東西 ○有麼有麼○天上
 天下○蒼天蒼天 烏飛兔走 ○自古自今○一時活埋

【和訓】象王嘔呻し。(○富貴の中の富貴。○誰人か悚然たるざらん。○好箇の消息。○獅子哮吼す。(○作家の中の作家。○百獸腦裂す。○好箇の入路。○無味の談。○相ひ罵ることは備に饒す。鬚を接げ。○鐵樵子に相ひ似たり。○什麼の咬嚼の處か有らん。○分疎不下五年強、一葉舟中に大唐を載す。渺渺兀然として波浪起る。誰れか知らん別に好思量有ることを。) 人口を塞斷す。○相ひ唾することは備に饒す。水を潑け。○啖。○閻黎甚麼と道ふぞ。南北東西。(○有り麼有り麼。○天上天下。○蒼天蒼天。) 烏飛び兔走る。(○自古自今。○一時に活埋せん。)

【提唱】

○コレから雪竇の頌ぢや。

「象王嘔呻し」と、雪竇、趙州の一句子を賞歎してからに、例へば象王の高く嘶き、獅子の高く吼えるやうな、百獸も腦裂するぞ。「嘔呻」とはサ、四蹄を展舒して、威勢を振ふ處の貌ぢや。

「獅子哮吼す」と、趙州の答話のすさまじさ。

「無味の談」と、「無味の談、人口を塞斷す」とは、洞山守初禪師の語ぢや。「無味の談」で、甘いとも酸いとも、味もスッバイもない處でサ。併し若し能く咬嚼せば、醍醐の上味の如しぢや。

「人口を塞斷す」と、一切の人の舌根を抜き取るぢや。コノ趙州の答話には、如何なる者でも、氣を呑み聲を飲むぞ。

「南北東西」と、乾坤大地、日月星辰、皆なクル／＼と廻る。コリヤ雪竇のト振り刀ぢや。

「烏飛び兔走る」と、日も月も眼を廻して、天地虚空、七顛八倒ぢや。

【著語】 コレから圓悟の著語ぢや。

「象王嘔呻」——「富貴の中の富貴」、コ、に到つては、四海の富も物かは。釋迦も達磨も下風に立つぢや。「誰人か悚然たらざらん」、一目見て身の毛の悚立たないものがあらうか。「好箇の消息」、佛法の好か便宜ぢや。

「獅子哮吼」——「作家の中の作家」、作家の中でも、趙州のやうな作家は殊に少い。「百獸腦裂す」、安悟りは一縮みぢや。「好箇の入路」、コリヤ好い便宜ぢや。ソコを取り失はぬやうにしる。

「味之談」——「相ひ罵ることは備に饒す、蕎を接げ」、コノ「無味の談」こそ、獅子哮吼ぢや。鐵槩子に相ひ似たり、「什麼の咬嚼の處が有らん」、趙州の答話は鐵槩子のやうぢや、齒の立つものぢやない。「分疎不下五年強、一葉舟中に大唐を載す、渺渺兀然として波浪起る、誰れか知らん別に好思量あることを」と、コレは白雲守端禪師が、本則を頌した頌ぢや。本則の評の中に入れるのが本當ぢや。錯つて此處に置いたものか。「分疎不下五年強」と、五年も分疎不下ぢやとはと、先づ拈起してサ。「一葉舟中に大唐を載す」と、コノ語はサ、一葉舟中に大唐を載せるやうな、奇妙な奇體な味ぢや。ウツかホンか、コリヤ如何ぢや。印籠の二重目の富士山が見えると、コレも見えるがナ。「渺渺兀然として波浪起る」と、趙州の答話は、無事の中に、太だ峻峻な處がある。「誰れか知らん別に好思量あることを」と、旨い味のあることは誰れも知らぬ。

「塞斷人口」——「相ひ唾することは備に饒す、水を潑け」、開けと云はれても口は開かれぬ。

「噢」、雪竇、ナンと云はるゝとも、圓悟は口を開かうと閉ぢやうと手前の好き勝手ぢや。「噢」とはセ、ラ笑ふ貌ぢや。「閑黎甚麼と道ふぞ」、雪竇、お主こそ口が開けまい。

「南北東西」——「有り麼有り麼」、サー手に立つ者は有るかドウぢや。道へく。「天上天下」、

「蒼天蒼天」、天上天下、コレ程満ちたれども、會する者のないは情けない。嗚呼蒼天蒼天。

「烏飛兔走」——「自古自今」、一時に活埋せん、三世古今を貫通して、有り難い至道ぢやが、

四の五のとやかましいから、至道も何も彼も、一時に投り込め。

趙州道會有人問我直得五年分疎不下似象王囉呻獅子哮吼無味之談塞斷人口南北東西烏飛兔走雪竇若無末後句何處更有雪竇來既是烏飛兔走且道趙州雪竇山僧畢竟落在什麼處

【和訓】 趙州道會、會つて人有つて我れに問ふ、直に得たり、五年分疎不下なるを。象王囉呻し、獅子哮吼するに似たり。無味の談、人口を塞斷す。南北東西、烏飛び兔走ると。雪竇、若し末後の句無くんば、何れの處にか更に雪竇有つて來らん。既に是れ烏飛び兔走る。且らく道へ、趙州、雪竇、山僧、畢竟して什麼の處にか落在する。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢやが、コノ評は餘んまりサツバとした評ぢや。頌がサツバとして、云ふことが無かつた爲めか。但し火後に入れ添へが出來なんだ爲めか。いから短い評ぞ。併しサ、五十七、八、九則と、三つながら同様の評ぢやから、長いことはいらぬ、短い等ぢや。「趙州道會、會つて人有つて我れに問ふ、直に得たり、五年分疎不下なることを」と、コレがサ、「象王囉呻し、獅子哮吼するに似たり。無味の談、人口を塞斷す。南北東西、烏飛び兔走ると」、コリヤ前に云ふた通りぢや。「雪竇、若し末後の句無くんば、何れの處にか更に雪竇有つて來らん」と、サー末後の句が

無ければ、雪竇とは云はさんぞ。「既に是れ鳥飛び兎走る」と、コノやうな騒ぎには、何處へ行つて居やうナ。「且らく道へ、趙州、雪竇、山僧、畢竟して什麼の所にか落在する」と、サー諸人、穩坐の地は何處ぢやと思ふナ。

【和訓】「象王」。「涅槃經德王品」に曰く、「大涅槃、唯だ大象王、能く其の底を盡す。大象王とは諸佛を謂ふなり」と。「獅子」。「涅槃經獅子吼菩薩品」に曰く、「若し能く是くの如く諸相を具する有らば、當に知るべし、是れ則ち獅子吼、乃至、一切の禽獸、獅子吼を聞けば、水性之屬は深淵に潜伏し、陸行の類は窟中に藏伏し、飛ぶ者は墮落す云々」と。

第五十九則 趙州唯嫌揀擇

【趙州唯嫌揀擇】

垂示云、該天括地、越聖超凡、百草頭上、指出涅槃妙心、于戈叢裏、點定衲僧命脈、且道、承箇什麼人、恩力、便得恁麼試舉看。

【和訓】垂示に云く、天を該ね地を括り、聖を越え凡を超ゆ。百草頭上に涅槃妙心を指出し、于戈叢裏に衲僧の命脈を點定す。且らく道へ、箇の什麼人の恩力を承けてか、便ち恁麼なることを得たる。試に舉す、看よ。

【提唱】第五十九則、「趙州唯嫌揀擇」と、コノ則はサ、前と同じく三則共に、趙州、逸群の辯、後人驚く可く、勤め進んで益々倚る可きことを明すぢや。

「垂示に云く、天を該ね地を括り、聖を越え凡を超ゆ」と、コリヤ宗師の大機を云ふたものぢや。サー上は非想非非想天より、下は金輪水際まで、只だ一枚の彌陀ぢや。ソノ天地を引ッ括つて絲毫も漏さず、諸位をポツ越えて自由自在ぢや。ソレぢやからサ、「百草頭上に涅槃妙心を指出し、于戈叢裏に衲僧の命脈を點定す」と、コリヤ盤に和して托出す夜明珠か。堅拳拈草も外のものではない、コノ指もコノ頭巾も、皆な涅槃妙心を指出するぞ。ソコデ衲僧を法戰場中へ引き出し、難透難解の話頭を浴せ掛けてからに、根性を入れ換へ、末後向上の大事を知らしむるぢや。「且らく道へ、箇の什麼人の恩力を承けてか、便ち恁麼なることを得たる。試に舉す、看よ」と、サー上件の如き働きは、誰れのお蔭であるぞ。ソレには本則を看るが好い。

學僧問、趙州至道無難、唯嫌揀擇。○再運前來。○道什麼。○三重公案。纔有語言、是揀擇。○滿口含霜。和尚如何爲人。○移着這老漢。○四州。

云、何、不、引、盡、這、語、
○賊是、小人智過、君子○白拈賊○騎賊馬、越賊 僧云、某
 甲、只、念、到、這、裏、
○兩箇弄泥團、漢○逢着箇賊○塚根難敵手 州云、只、這、至
 道、無、難、唯、嫌、揀、擇、
○畢竟由這老漢○被他換却眼睛○捉敗了也

【和訓】 舉す。僧、趙州に問ふ、至道無難、唯嫌揀擇、(○再運前來。○什麼と道ふぞ。○三重の公案。) 緣かに語言有れば是れ揀擇、(○滿口に霜を含む。) 和尚如何んが人の爲めにする、(○この老漢を撈着す。○因。) 州云く、何んぞ這の語を引盡さる、(○賊は是れ小人、智、君子に過ぎたり。) 白拈賊、(○賊馬に騎つて賊を越ふ。) 僧云く、某甲只だ念すること這裏に到る、(○兩箇、泥團を弄する漢。○箇の賊に逢着す。○塚根、敵手し難し。) 州云く、只だ這の至道無難、唯嫌揀擇、(○畢竟這の老漢に由る。○他に眼睛を換却せらる、○捉敗了也。)

【提唱】

本則 コレから本則ぢや。

「舉す。僧、趙州に問ふ、至道無難、唯嫌揀擇」と、又た「至道無難」を問ふて來た。コノ僧は作家ぢや。

「緣かに語言有れば是れ揀擇」と、サー少しでも語言有れば、早や揀擇に涉ると云ふがサ。

「和尚如何んが人の爲めにする」と、ソレならば、ドウして和尚は爲人しめざるぞと。趙州の足を

取つて、引ッ轉り返さうと掛つた。

「州云く、何んぞ這の語を引盡さる」と、未だくある語を、ナゼ皆な云はんかと。サテこそ

奇妙な、驚き入つたものぢや。胸中、五百の軍馬を貯ふぢや。

「僧云く、某甲只だ念すること這裏に到る」と、是れ趙州を封垣の外に擲り出さんとしたのぢや。

私も是れ迄覺えましたとサ。此奴、甘酢で喰はれぬ奴ぢや。

「州云く、只だ這の至道無難、唯嫌揀擇」と、ソレなら、己が覺えたは、「至道無難、唯嫌揀擇」

迄かと。サテく及ばれぬ。コノ味は學者を接したものでなければ知らぬぞ。

【釋語】 コレから圓悟の著語ぢや。

「舉僧問趙州至道無難唯嫌揀擇」——再運前來、又た脊負ひ出したナ。「什麼と道ふぞ」、「三重

の公案」、三則引ッ續いで「至道無難」ぢや。モ一好い加減にして置け。

「緣有語言是揀擇」——「滿口に霜を含む」、イヤハヤ、口は開かれぬ。

「和尚如何爲人」——「這の老漢を撈着す」、這の僧、趙州にセリ詰めた。「因」、サー云ふてみよ

と。力を出して問ふた。

「州云何不引盡這語」——「賊は是れ小人、智、君子に過ぎたり」、趙州、恐しく素走ッこゝ、胸中
 五百の軍馬を貯ふからぢや。「白拈賊」、丁度畫ガンドウのやうぢや。「賊馬に騎つて賊を越ふ」、コ

ノ坊主の問ふて來た處を以つて、直に追ッ拂つた。

「僧云某甲只念到這裏」——「兩箇 泥團を弄する漢」、趙州もコノ坊主も、二人共に泥團みぢや。

「箇の賊に逢着す」、コノ坊主、賊にブツカつてサ、巾着が危ないぞ。「椀根、敵手し難し」、後退り

する底では、ソレでは趙州に敵し難いと。この僧が、「某甲只だ念すること這裏に到る」と云ふた

は、趙州を土俵の外へ推し出した語ぢやものを、「兩箇、泥團を弄する漢」、「椀根、敵手し難し」と

云ふは、宗旨の案内知らぬ故ぞ。コノ則の僧は作家、前の僧は不作家、大いに違ふたぞ。

「州云只這至道無難唯嫌揀擇」——「畢竟この老漢に由る」、かゝる自由を働くも趙州なればこそ

ぢや。畢竟コノ「至道無難」は、趙州の一手專賣ぢや。「他に眼睛を換却せらる」、趙州に眼玉を抜

かれたぞ。「捉敗了也」、この僧、趙州を取り遁した。キリトス、サー捉へた、ハア逃げた。南天

棒曰く、サー趙州の賊手段も見て取つたぞ。

趙州道只這至道無難唯嫌揀擇如擊石火似閃電光擒縱殺活得恁麼自在諸方皆謂趙州有逸群之辯趙州尋常示衆有此一篇云至道無難唯嫌揀擇纔有語言是揀擇是明白老僧不在明白裏是汝等還護惜也無時有僧問云既不在明白裏護惜箇什麼州云我亦不知僧云和尚既不知爲什麼道不在明白裏州云問事即得禮拜了退後來這僧只拈他覺滅處去

問他問得也不妨奇特爭奈只是心行若是別人奈何他不得爭奈趙州是作家便道何不引盡這語這僧也會轉身吐氣便道某甲只念到這裏一似安排相似趙州隨聲拈起便答不須計較古人謂之相續也大難他辨龍蛇別休咎還他本分作家趙州換却這僧眼睛不犯鋒鏑不着計較自然恰好爾喚作有句也不得喚作無句也不得喚作不有不無句也不得離四句一絕百非何故若論此事如擊石火似閃電光急着眼看方見若或擬議躊躇不免喪身失命雪竇頌云

【和訓】趙州道く、只だ這の至道無難、唯嫌揀擇と。擊石火の如く、閃電光に似たり。擒縱殺活、恁麼に自在なることを得たり。諸方皆な謂ふ、趙州尋常の辯有り。趙州尋常、衆に示すに、此の一篇有り。云く、至道無難、唯嫌揀擇。纔かに語言有れば、是れ揀擇、是れ明白。老僧は明白裏に在らず。是れ汝等還つて護惜すや、也た無や。時に僧あり、問ふて云く、既に明白裏に在らずんば、箇の什麼をか護惜せん。州云く、我れも亦た知らず。僧云く、和尚既に知らずんば、什麼と爲てか道ふ、明白裏に在らずと。州云く、事を問ふことは即ち得たり。禮拜了つて退けと。後來這の僧、只だ他の覺滅の處を拈じて、去つて他に問ふ。問ひ得て也た妨けず奇特なることを。爭奈せん、只だ是れ心行なることを。若し是れ別人ならば、何を奈何ともすること得じ。爭奈せん、趙州は是れ作家。便ち道ふ、何んぞ這の語を引き盡さざると。這の僧也た身を轉じ、氣を吐くことを會して、便ち道ふ、某甲只だ念すること這裏に到ると。一に安排するに似て相ひ似たり。趙州、聲に隨つて拈起して便ち答ふ、計較を須ひず。古人之れを、相續や也た大難と謂ふ。他、龍蛇を辯じ、休咎を別つことは、他の本分の作家に還す。趙州、這の僧の眼睛を換却して、鋒鏑を犯さず、計較を着けず、自然に恰好なり。爾喚んで有句と作すことも也た得じ、喚んで無句と作すことも也た得じ、喚んで不有不無の句と作すことも也た得じ。四句を離れ、百非を絶す。何が故ぞ。若し此の事を論せば、擊石火の

如く、閃電光に似たり、急に眼を着けて看ば方に見ん。若し或は擬議躊躇せば、免れず喪身失命することを。雪費、頌して云く。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢや。「趙州云く、只だ這の至道無難、唯嫌揀擇と。擊石火の如く、閃電光に似たり」と、趙州のコノ語を透得すれば直に擊石火、閃電光ぢや。擒縱殺活、恁麼に自在なることを得たり」と、ぢやから、殺さうと活さうと、寝さうと起さうと、自由自在ぢや。「諸方皆な謂ふ、趙州逸群の辯有り」と。趙州尋常、衆に示すに、此の一篇有り」と、是れ趙州、腰間に三尺の劔を秘して、到る處人を殺すぢや。「至道無難、唯嫌揀擇。纔かに語言有れば、是れ揀擇、是れ明白。老僧は明白裏に在らず。是れ汝等還つて護惜すや、也た無や。時に僧有り、問ふて云く、既に明白裏に在らずんば、箇の什麼をか護惜せん。州云く、我れも亦た知らず。僧云く、和尚既に知らずんば、什麼と爲てか道ふ、明白裏に在らずと。州云く、事を問ふことは即ち得たり、禮拜し了つて退けと」、コレは第二則の處で悉しく云ふたから、茲では云はぬ。コノ坊主も、コナことを問ふやうでは、趙州をば夢にも見ない奴ぢや。「後來這の僧、只だ他の覺縛の處を拈じて、去つて他に問ふ」と、コノ坊主がサ、後になつて趙州の隙間を覗つてからに問ふて來た。「覺」は許忍の切、血祭を云ふ。「廣韻」には「牲血を器に塗る祭なり。通じて覺に作る、隙罅なり」と有る。「韻會」には、「器成る、必らず覺隙有り。牲を殺して血を取り、其の覺隙に塗る云々」と有る。「問ひ得て也た妨げず

奇特なることを。爭奈せん、只だ是れ心行なることを」と、ナンのはれが奇特なものか。カス妄想ぢや。「若し是れ別人ならば、他を奈何ともすること得じ。爭奈せん、趙州は是れ作家。便ち道ふ、何んぞ這の語を引き盡さざると」、カウ云はれては膽のタバネが引ン抜けるわ。「這の僧也た身を轉じ、氣を吐くことを會して、便ち道ふ、某甲只だ念すること這裏に到ると」、コリヤ妨げず奇特なりぢや。「一に安排するに似て相ひ似たり。趙州、聲に隨つて拈起して便ち答ふ、計較を須ひす」と、趙州、響きの聲に應ずるが如く答へた。ソノ答はサ、豫じめ備へて置いたやうぢやがサ、計較など云ふものは微塵程もないぞ。「古人之れを、相續や也た大難と謂ふ」と、サ、趙州は、コノ様に終日戰つても、鎗の法は亂れぬ。コリヤ一寸二の矢が續き悪いわい。コレは洞山守初禪師の語ぢや。「他、龍蛇を辨じ、休咎を別つことは、他、本分の作家に還す。趙州、這の僧の眼睛を換却して、鋒銚を犯さず、計較を着けず、自然に恰好なり」と、趙州はサ、コノ僧の眼玉を入れ換へて、持ち物を打ッ放したが、ソレが實に自然ぢや、少しも無理な處がない。「爾喚んで有句と作すことを也た得じ、喚んで無句と作すことも也た得じ、喚んで不有不無の句を作すことも也た得じ。四句を離れ、百非を絶す」と、趙州の答話は、有句でもなけりや無句でもない。又た不有、不無の句でもない。コリヤ馬大師の所謂、四句を離れ、百非を絶すぢや。何が故ぞ、若し此の事を論せば、擊石火の如く、閃電光に似たり、急に眼を着けて看ば方に見ん」と、コリヤ評クツ。參學に骨打つてこそぢや。

「若し或は擬議躊躇せば、免れず喪身失命すること。雪竇、頷して云く」と、若しウジクしやうものならばサ、首は五間も先へ飛ぶぞ。サ、雪竇の頷を看よ。

水灑不着 ○説什麼 ○太深遠生 ○有什麼共語處 風吹不入 ○如虚空相似

○硬剝剝地 ○望空啓告 虎歩龍行 ○他家得自在 ○不妨奇特 鬼號神泣

○大衆掩耳 ○草偃風行 ○閑黎莫是與他同參 頭長三尺知是誰 ○怪底物 ○

何方聖者 ○見麼見麼 相對無言獨足立 ○咄 ○縮頭去 ○放過一着 ○山體 ○

放過即不可 ○便打

【和訓】 水灑げども着かず。○什麼をか説く。○太深遠生。○什麼の共に語る處か有らん。風吹けども入らず。○虚空の如くに相ひ似たり。○硬剝剝地。○空を望んで啓告す。虎の如くに歩み龍の如くに行く。○他家自在を得たり。○妨げず奇特なることを。鬼號び神泣。○大衆耳を掩ふ。○草偃し風行。○閑黎是れ他と同參なること莫しや。○頭長きこと三尺知んぬ是誰ぞ。○怪底の物。○何れの方の聖者ぞ。○見る麼見る麼。相ひ對して無言、獨足にして立つ。○咄。○頭を縮めて去れ。○一着を放過す。○山體。○放過せば即ち不可。○便ち打たん。

【提唱】

○コレから雪竇の頷ぢや。

「水灑げども着かず」と、趙州の語路、コレは先づ、奇怪なものではないか。

「風吹けども入らず」と、是れ、金槌打ても開けずか。

「虎の如くに歩み龍の如くに行く」と、恐しいことぢや、ソノ威風には、トント寄り付かれぬ。進むも遮る能はず、退くも追ふ能はずぢや。

「鬼號び神泣く」と、コリヤ用を頷したのぢや。趙州の語に出逢ふては、鬼も神も、耳を掩はずには居られません。

「頭長きこと三尺知んぬ是誰ぞ」と、コノ語、大狼毒ぢや。皆な本來の面目の噂と見錯るぞ。老衲も三回まで蹉過した。今日看來れば滿面の慚惶ぢや。

「相ひ對して無言、獨足にして立つ」と、向ひ合ふても、黙つて一本足で立つてケツカル。コノ化物め、後方へ引ッし去れ。

【語語】 コレから圓悟の著語ぢや。

「水灑不着」——「什麼をか説く」、雪竇も、他に云はん方なく、斯う云ふたもの、コノ境界、何んと説かれるものぞ。「太深遠生」、ソノ深サ、掉も届くものでない。「什麼の共に語る處か有らん」

ん、趙州の句には、ドウも云はれぬ、言詮不及ぢや。

「風吹不入」——「虚空の如くに相ひ似たり」、虚空が風邪をひいたとは聞かぬ、丁度ソレと同じやうか。併しコリヤせつない下語ぢや。「硬剝剝地」、石佛の頭を打くやうぢや、齒も立たぬ。「空を望んで啓告す」、此處に到つては、泣くより外のことぞ無さぢや。

「虎歩龍行」——「他家自在を得たり」、「妨げず奇特なる」と、實にハヤ、趙州は古今に互つて、丹霄に獨歩して居るわい。佛に逢ふては佛を殺しサ、祖に逢ふては祖を殺すしサ、何んでも彼でも勝手次第ぢや。

「鬼號神泣」——「大衆耳を掩ふ」、吾れ人ともに聞くに堪へない、耳がつぶれやうぞ。「草偃し風行く」、ソノ威勢の鋭さを看よ。「閑黎是れ他と同參なること莫しや」、雪竇、お主も、鬼神と同じやうに、號泣する仲間ではないか。

「頭長三尺知是誰」——「怪底の物」、コリヤ奇怪の曲者ぢや。「何れの方の聖者」、何處から來せた、馬鹿聖人め。「見る慶見る慶」、サー各々、見たかく。ドウぢや。

「相對無言獨足立」——「咄」、「頭を縮めて去れ」、ヤイ、キリ／＼とすつこめ。「一着を放過す」、噢はす處なれど、雪竇、一ト手放した。「山鱧」、「放過せば即ち不可」、「便ち打たん」、コノ山猫め、やりすごしたら災をせうぞ、打つて呉れう。「山鱧」とはサ、「莊子」に、「獨足の鬼なり。又た山神

と曰ふ」と。「廣韻」には、「鱧は相邀の切。山鱧は汀州に出づる獨足の鬼なり」とある。月庵、悟溪共に、コノ三句を一句に見て居る。

水濕不着風吹不入虎歩龍行鬼號神泣無偃略喙處此四句頌趙州答話大似龍馳虎驟這僧只得一場憊懼非但這僧直得鬼也號神也泣風行草偃相似未後兩句可謂一子親得頭長三尺知是誰相對無言獨足立不見僧問古德如何是佛古德云頭長三尺頸長二寸雪竇引用未審諸人還識慶山僧也不識雪竇一時脫體畫却趙州真個在裏了也諸人須子細着眼看

【和訓】 水濕げども着かず、風吹けども入らず。虎の如くに歩み龍の如くに行く、鬼號び神泣くと。偃が喙喙の處無けん。此の四句、趙州の答話、大いに龍馳せ虎の驟くに似たることを頌す。這の僧、只だ一場の憊懼を得たり。只だ這の僧のみに非らず、直に得たり、鬼も也た鱧び、神も也た泣くことを。風行けば草偃すに相ひ似たり。未後の兩句、謂つ可し、一子親し得たりと。頭長きこと三尺、知んぬ是れ誰ぞ、相ひ對して無言、獨足にして立つと。見ずや。僧、古德に問ふ、如何なるか是れ佛。古德云く、頭長きこと三尺、頸長きこと二寸と。雪竇引き用ふ、未審し、諸人還つて識る慶、山僧も也た識らず。雪竇、一時に脫體に趙州を畫却す。眞個、裏に在り了れり。諸人須らく子細に眼を着けて看るべし。

【提唱】 コレから圖悟の評ぢや。「水濕げども着かず、風吹けども入らず」と、コリヤ趙州の答處、

堅固深遠なるを云ふた。「虎の如くに歩み龍の如くに行く、鬼號び神泣くと。爾が啗啄の處無けん」と、コリヤ機鋒を云ふたものぢや。イヤハヤ、齒も爪も立たぬ。「此の四句、趙州の答語、大いに龍馳せ虎の驟くに似たることを頌す。この僧、只だ一場の懺悔を得たり。只だこの僧のみに非らず、直に得たり、鬼も也た號び、神も也た泣くことを。風行けば草偃すに相ひ似たり」と、この僧、赤ッ耻をかいだがサ、コノ坊主ばかりぢやない、鬼でも神でも手に負へるものぢやない。風の行いて草の偃するがやうぢや。「最後の兩句、謂つ可し、一子親しく得たりと、コリヤ雪竇の相傳したものだ。「頭長きこと三尺知んぬ是れ誰ぞ、相ひ對して無言、獨足にして立つと」、コレはサ、趙州の「何んぞこの語を引き盡さざる」と云ふ語を云ふたと。ナンノ、コンナものが似るものか。「見ずや。僧、古徳に問ふ、如何なるか是れ佛。古徳云く、頭長きこと三尺、頸長きこと二寸と」、コリヤ講釋も繪解もならぬ。コレは「傳燈」の十五に出て居る。洞山良价和尚と僧との問答ぢや。「雪竇引き用ふ、未審し、諸人還つて識る麼、山僧も也た識らず」と、サーそれを雪竇が引用したのぢやが、コノ奇怪な化物を諸人は知つて居るかドウぢや。圓悟、己は知らない。「雪竇、一時に脱體に趙州を畫却す。眞個、裏に在り了れり。諸人須らく子細に眼を着けて看るべし」と、雪竇が末の二句の中に趙州の真相を丸る出しにして置いた。サー各々、氣を付けて看るが好い。

【百草頭上】 一切萬像の意にして、差別界の事像を概稱する語なり。龐居士の「明明たる百草頭、明明たる祖師意」と云ふより出づ。

第六十則 雲門拄杖子

【雲門拄杖子】

垂示云諸佛衆生本來無異山河自己寧有等差爲什麼却渾成兩邊去也若能撥轉話頭坐斷要津放過卽不可若不放過盡大地不消一捏且作麼生是撥轉話頭處試舉看

【和訓】 垂示に云く、諸佛衆生、本來異なる無し。山河自己、寧ろ等差有らんや。什麼と爲てか却つて渾て兩邊と成り去る。若し能く話頭を撥轉し、要津を坐斷するも、放過せば即ち不可。若し放過せずんば、盡大地、一捏を消せじ。且らく作麼生か是れ話頭を撥轉する處。試に舉す、看よ。

【提唱】 第六十則、「雲門拄杖子」と。便ち之れを兼ね用ゆる者、彼の乾峯三種病の因縁、翠巖眉毛

の話の如く、臨機應變、企及す可からざるの知用、以つて師法と爲すに堪へたる而已。是れを雲門大師と云ふ歟。

「垂示に云く、諸佛衆生、本來異なる無し」と、コリヤ好箇の消息ぢや。心、佛、及び衆生の此の三つには、差別がない。コノ座敷の男女、皆な紫磨黄金の彌陀ぞ。「山河自己、寧ろ等差有らんや」と、山河と自己と本來同體で、針割不入ぢや。同等ぢやとか、差異ぢやとか云はれるものでない。「什麼と爲てか却つて渾て兩邊と成り去る」と、ソノやうに、本來不二なるに、ナンとして自己と山河、愛憎是非、猫と杓子との兩邊とは成るぞ。「若し能く話頭を撥轉し、要津を坐斷するも、放過せば即ち不可」と、サ、難透の話題を打ち碎き、全體透過して、轉轉地を受用しサ。又た諸佛の頂上を坐斷して、點滴も施さざるも、油斷すると本の空阿彌ぢや。「若し放過せずんば、盡大地、一捏を消せし」と、後は捉へることも、オツ放すこともない。あらも二十年、オツ放し通しぢや。併し能く保つ時はドウぢや、コノ盡大地、一捏がものもないぞ。「且らく作麼生か是れ話頭を撥轉する處。試に擧す、看よ」と、ソレならば、ドウして難透難解を打ッ碎いて、埒を明けようとするぞ。サ、本則に就いて看よ。

擧雲門以拄杖示衆云 ○點化在臨時 ○殺人刀活人劍 ○換却備眼睛了也

拄杖子化爲龍 ○何用周遮 ○用化作什麼 吞却乾坤了也 ○天下、衲

僧性命不存 ○還碍着咽喉麼 ○閑黎向什麼處安身立命 山河大地甚處得來 ○十方無壁落四面亦無門 ○東西南北四維上下 ○爭奈這箇何

【和問】 擧す。雲門、拄杖を以つて衆に示して云く。(○點化、時に臨むに在り。○殺人刀活人劍。○備、眼睛を換却し了れり。拄杖子化して龍と爲つて。(○何んぞ周遮することを用ひん。○化することを用ひて什麼か作さん。○乾坤を吞却し了れり。(○天下の衲僧、性命存せじ。○還つて咽喉を碍着す麼。○閑黎什麼の處に向つてか安身立命せん。○山河大地甚れの處よりか得來る。(○十方壁落無く、四面亦た門無し。○東西南北四維上下。○這箇を爭奈何せん。))

【提唱】

本則 コレから本則ぢや。

「擧す。雲門、拄杖を以つて衆に示して云く」と、是れ雲門家の古曲。老衲も三回迄、錯つて解し了つた。見損ふたと云ふより外、辯は付けられぬ。諸人、此處は骨折つて、自ら參究して見よ。

「拄杖子化して龍と爲つて」と、ハア、コリヤいらぬことぢや。矢ッ張りコノ拄杖子で澤山ぢやものぞ。

「乾坤を吞却し了れり」と、イヤハヤ、富士も淺間も、近江の湖水も、蟻の鬚までも残さずに呑ん

て仕舞ふたとす。コリヤ如何ぢや。

「山河大地甚れの處よりか得來る」と、盡く自己に歸したればす、元手を失つて立場に迷ふべし。南天棒云く、悟了は未悟に同じぢや。

著語

コレから圓悟の著語ぢやが、コノ著語は皆な違ふた。圓悟、大不出來ぢやぞ。

「擧雲門以拄杖示衆云」——「點化、時に臨むに在り」、或は龍と化し、或は丈六の全身と化し、自由自在ぢや。「殺人刀活人劍」、殺すも活すも、コノ一着子の裏にあるぞ。「爾が眼睛を換却し了れり」、コノ拄杖を見たら最後、眼玉を入れ換へられるぞ。

「拄杖子化爲龍」——「何んぞ周遮することを用ひん」、「化することを用ひて什麼か作さん」、コノ下語は取らない。直に拄杖に吞ませないで、龍と云ふは大いに廻り遠いと。是れではコノ示衆は見えぬ。

「吞却乾坤了也」——「天下の衲僧、性命存ぜじ」、コレには徳山も臨濟も堪らぬ。マルデ大鯨が出たやうぢや。「還つて咽喉を碍着す麼」、吞んでも咽喉に障らなんだか。「閑黎什麼の處に向つてか安身立命せん」、吞まれたら、雲門、お主も龍の腹の中をしまいのに、何處に立つて悟りは吐くぞ。

「山河大地甚處得來」——「十方壁落無く、四面亦た門無し」、「東西南北四維上下」、コノ下語は取らぬ方が好い。「這箇を爭奈何せん」、何處へも片付ける處がないと。コレも不可ぬ。

只如、雲門道拄杖子化爲龍吞却乾坤了也山河大地甚處得來若道有則瞎若道無則死還見雲門爲人處麼還我拄杖子來如今人不會他雲門獨露處却道卽色明心附物顯理且如釋迦老子四十九年說法不可不知此議論何故更用拈花迦葉微笑這老漢便搭胡道吾有正法眼藏涅槃妙心分付摩訶大迦葉更何必單傳心印諸人既是祖師門下客還明得單傳底心麼胸中若有一物山河大地縱然現前胸中若無一物外則了無絲毫說什麼理與智冥境與神會何故一會一切會一明一切明長沙道學道之人不識真只爲從前認識神無量劫來生死本癡人喚作本來人忽若打破陰界身心一如身外無餘猶未得一半在說什麼卽色明心附物顯理古人道一塵纔起大地全收且道是那箇一塵若識得這一塵便識得拄杖子纔拈起拄杖子便見縱橫妙用麼麼說話早是葛藤了也何況更化爲龍慶藏主云五千四百八卷還會有麼麼說話麼雲門每向拄杖處拈撥全機大用活潑潑地爲人芭蕉示衆云衲僧巴鼻盡在拄杖頭上永嘉亦云不是標形虛事禪如來寶杖親蹤跡如來昔於然燈佛時布髮掩泥以待彼佛然燈曰此處當建梵刹時有一天子遂標一莖草云建梵刹竟諸人且道這箇消息從那裏得來祖師道棒頭取證喝下承當且道承當箇什麼忽有人問如何是拄杖子莫是打筋斗麼莫是撫掌一下麼總是弄精魂且喜沒交涉雪竇頌云

【和訓】 只だ雲門の、拄杖子化して龍と爲つて、乾坤を吞却し了れり。山河大地、甚れの處よりか得來ると道ふが如きんば、若し有と道は、瞎す、若し無と道は、死す。還つて雲門爲人の處を見る麼。我に拄杖子を還し來れ。如今の人、他の雲門獨露の處を會せずして、却つて道ふ、色に即して心を明め、物に附いて理を顯すと。且らく釋迦老子四十九年の説法の如きんば、此の議論を知らざる可からず。何が故ぞ、更に拈花を用ひ、迦葉微笑する。道の老漢、便ち揉胡して道く、吾れに正法眼藏、涅槃妙心有り、摩訶迦葉に分付すと。更に何んぞ必ずしも心印を單傳せん。諸人既に是れ祖師門下の客、還つて單傳底の心を明得す麼。胸中若し一物有れば、山河大地機然として現前せん。胸中若し一物無くんば、外則ち了に絲毫無けん。什麼の理と智と冥し、境と神と會すとか説かん。何故の一言一切會、一明一切明。長沙道く、學道の人眞を識らざることは、只だ從前識神を認むるが爲めなり、無量劫來生死の本、癡人は喚んで本來の人と作すと。忽ち若し陰界を打破して、身心一如、身外無餘なるも、猶ほ未だ一半を得ざるに在り。什麼の色に即して心を明め、物に附いて理を顯すとか説かん。古人道く、一塵纒かに起つて、大地全く收ると。且らく道へ、是れ那箇の一塵ぞ。若し這の一塵を識得せば、便ち拄杖子を識得せん。總かに拄杖子を拈起すれば、便ち縱横の妙を見ん。怎麼の説話、早く是れ葛藤し了れり。何んぞ況んや更に化して龍と爲らんや。慶藏主云く、五千四十八卷、還つて會つて怎麼の説話有り麼と。雲門毎に拄杖の處に向つて、全體大用を拈提して、活潑潑地に人の爲めにす。芭蕉、衆に示して云く、拈僧の巴鼻、畫く拄杖頭上に在りと。永嘉亦云く、是れ形を標して虚しく事擬するにあらず、如來の寶杖、親しく踐踏すと。如來、昔、然燈佛の時に於て、髮を布き泥を掩ふて、以つて彼の佛を待す。然燈の曰く、此の處當に梵刹を建つべし。時に一りの天子有り、遂に一莖草を擲して云く、梵刹を建て竟んぬと。諸人且らく道へ、這箇の消息、那裏從りか得來る。祖師消く、棒頭に取證し、喝下に承當すと。且らく道へ、箇の什麼をか承當する。忽ち人有つて、如何なるか是れ拄杖子と問はば、是れ筋斗を打すること莫し麼、是れ掌を撫して一下すること莫し麼。總に是れ精魂を弄す。且喜すらくば没多涉。雪竇頌して云く。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢや。「只だ雲門の、拄杖子化して龍と爲つて、乾坤を吞却し了れり。山

河大地、甚れの處よりか得來ると道が如きんば、若し有と道は、瞎す、若し無と道は、死す。還つて雲門爲人の處を見る麼」と、サー已に乾坤を吞却し了つたものを、山河大地、有と云ふは常見ぢや。又た、無と云ふは斷見ぢや。七十二棒ぢや。コノ七十二棒は「死」と同一模範ぢや。ソレなら雲門の爲人の處はドウぢや。「我に拄杖子を還し來れ」と、ナニたわごと、拄杖子に用はないと。ハア又た違ふた。各々錯つて會するな。「如今の人、他の雲門獨露の處を會せずして、却つて道ふ、色に即して心を明め、物に附いて理を顯すと」、今時の者は、雲門が向上の大機を提つてからに、絲毫も藏さず、丸出しにした處を知らないでサ、色相に互つた拄杖子ぢやの、山河大地に附いて理を顯すのぢやなどと云ひくさる。「釋迦老子四十九年の説法の如きんば、此の議論を知らざる可からず。何が故ぞ、更に拈花を用ひ、迦葉微笑する」と、釋迦が四十九年の説法で、「色に即して心を明め、物に附いて理を顯すと」と云ふことは知つたぞ。サーそれで好くば、釋迦の拈花は入用ぬことではあるまいか。何故拈花したぞ。「這の老漢、便ち揉胡して道く、吾れに正法眼藏、涅槃妙心有り。摩訶迦葉に分付すと」、本有底は言ふ可きこともないが、方便を以つて、止むことを得ずして云ふたのぢやが、「吾れに正法眼藏云々」と、是れがナント塗り付けものかナ。恐らくは圓悟も、老僧從前の蹉過と同見解ではないか。「更に何んぞ必ずしも心印を單傳せん」と、是れ人々具足の心印ぢや。却つて傳ふる處の物が有るかドウか。「諸人既に是れ祖師門下の客、還つて單傳底の心を明得す麼」

と、各々は是れ達磨の子孫ではないか。すればコノ「單傳底の心」を知らなければならぬ。「胸中若し一物有れば、山河大地、縱然として現前す」と、サー「一物」とは何かサ。併し已下「一明一切明」に至る迄の四十九字は不可ぬ、削る方が好い。「縱然」とはサ、競ひ起る貌、羅列の貌、畢竟アツマルと云ふことぢや。「胸中若し一物無くんば、外則ち了に絲毫無けん。什麼の理と智と冥し、境と神と會すとか説かん。一會一切會、一明一切明」と、鑑も茶釜もサ。諸佛と我と合體、茲を諸佛聚會處と云ふ。コレ迄が好くない。「長沙道く、學道の入眞を識らざることは」と、長沙が云ふのに、學人が眞實佛道の淵源に徹しないのは、何故かと云へばサ。「只だ從前識神を認むるが爲めなり」と、第八識の如來藏識が、法身に纏つて、見聞覺知を認めるからぢや。身心脱落の場を経ぬ中は、皆な認識神ぢや。「無量劫來生死の本」と、サー行かんと要すれば即ち行き、座せんと要すれば即ち座す。誠に自由自在で御座るなどと濟まして居る。ソレを、「癡人は喚んで本來の人と作す」と、本來圓妙なものと認むるから間違ひが出来るのぢや。「忽に若し陰界を打破して、自心一如、身外無餘なるも、猶ほ未だ一半を得ざることに在り」と、五陰十八界を打破して、心身一如たるも、宗旨の大事には未だ半分路でもない。馬祖の瓦を磨いたも是れぞ。我が心識を琢いて何んになるぞ。祖師門下の大事には、未だ遠くして遠しぢや。一旦、心意情識、都て行せざる處に至つてからに、一精出せば打破するぞ。「法華」の窮子と云ふは、今時ドン／＼淵に入つて妄想を盡して、段々とするは、小便を汲む窮子ぢや。「什麼の色に即して心を明め、物に附いて理を顯すとか説かん」と、況んや「即色明心、附物顯理」の理に於てをやぢや「古人道く、一塵纔かに起つて、大地全く收ると。且らく道へ、是れ那箇の一塵ぞ。若し這の一塵を識得せば、便ち拄杖子を識得せん。纔かに拄杖子を拈起すれば、便ち縱横の妙用を見ん」と、コソヤ洛浦元安禪師の語ぢや。コノ「一塵」の根元を識得すれば拄杖子をも識得するぞ。コレは第十九則、八十九則で能く見るが好い。「恁麼の説話、早く是れ葛藤し了れり、何んぞ況んや更に化して龍と爲らんや」と、文字の糟粕では駄目の皮ぢやぞ。「慶藏主云く、五千四十八卷、還つて會つて恁麼の説話有り麼と。雲門毎に拄杖の處に向つて、全機大用を拈撥して、活潑潑地に人の爲めにす」と、雲門の斯くの如き示衆は、五千四十八卷の經文中にも見られぬ。雲門の拄杖子には、全機大用が籠つて居るぞ。「芭蕉、衆に示して云く、衲僧の巴鼻、盡く拄杖頭上に在りと」、コノ示衆は師の傳には載つて居ない。福本には、「衲に拄杖子有らば、我れ衲に拄杖子を與へん。衲に拄杖子無くんば、我れ衲が拄杖子を奪はん」となつて居る。芭蕉慧清は南塔光涌に嗣ぎ、涌は仰山慧寂に嗣いだ。「永嘉亦た云く、是れ形を標して虚しく、事觀するにあらず、如來の寶杖親しく蹤跡すと」、永嘉が又た云ふのには、コノ拄杖子は、人目の好いやうに、伊達品に持つてはないぞ。如來の三明六通を開きめされた大事な杖を受け續いだのぢや。「如來、昔、然燈佛の時に於て、髮を布き泥を掩ふて、以つて彼の佛を待す。然燈の曰く、此の處當に

るは、小便を汲む窮子ぢや。「什麼の色に即して心を明め、物に附いて理を顯すとか説かん」と、況んや「即色明心、附物顯理」の理に於てをやぢや「古人道く、一塵纔かに起つて、大地全く收ると。且らく道へ、是れ那箇の一塵ぞ。若し這の一塵を識得せば、便ち拄杖子を識得せん。纔かに拄杖子を拈起すれば、便ち縱横の妙用を見ん」と、コソヤ洛浦元安禪師の語ぢや。コノ「一塵」の根元を識得すれば拄杖子をも識得するぞ。コレは第十九則、八十九則で能く見るが好い。「恁麼の説話、早く是れ葛藤し了れり、何んぞ況んや更に化して龍と爲らんや」と、文字の糟粕では駄目の皮ぢやぞ。「慶藏主云く、五千四十八卷、還つて會つて恁麼の説話有り麼と。雲門毎に拄杖の處に向つて、全機大用を拈撥して、活潑潑地に人の爲めにす」と、雲門の斯くの如き示衆は、五千四十八卷の經文中にも見られぬ。雲門の拄杖子には、全機大用が籠つて居るぞ。「芭蕉、衆に示して云く、衲僧の巴鼻、盡く拄杖頭上に在りと」、コノ示衆は師の傳には載つて居ない。福本には、「衲に拄杖子有らば、我れ衲に拄杖子を與へん。衲に拄杖子無くんば、我れ衲が拄杖子を奪はん」となつて居る。芭蕉慧清は南塔光涌に嗣ぎ、涌は仰山慧寂に嗣いだ。「永嘉亦た云く、是れ形を標して虚しく、事觀するにあらず、如來の寶杖親しく蹤跡すと」、永嘉が又た云ふのには、コノ拄杖子は、人目の好いやうに、伊達品に持つてはないぞ。如來の三明六通を開きめされた大事な杖を受け續いだのぢや。「如來、昔、然燈佛の時に於て、髮を布き泥を掩ふて、以つて彼の佛を待す。然燈の曰く、此の處當に

梵刹を建つべし。時に一りの天子有り、遂に一莖草を標して云く、梵刹を建て竟んぬと、釋迦が昔、因地に在せし時に、髪を布き泥を掩ふて、然燈佛に供養した。スルト然燈佛は讚歎せられて、古佛行道の地として、此處に梵刹を建てよと云はれた。ソコに一人の天子が居つて、一莖草を拈じてサ、モ一梵刹は建つて仕舞ふたと。髪を布いたと、一莖草を立てたと一ツ事、佛の機に叶ふた所爲ぞ。是れ亦た、「拄杖子乾坤を吞却し了れり」と云ふと同じぢや。「諸人且らく道へ、這箇の消息、那裏従りか得來る。祖師道く、棒頭に取證し、喝下に承當すと」、サ一全機大用、斯くの如き拄杖子の妙用は何處から得たものぞ。古人も云ふて居る、一棒下に悟り抜き、一喝の下に合點すると。「且らく道へ、箇の什麼をか承當する」と、是れ目の當り三世の如來と相見ぞ。「忽に人有つて、如何なるか是れ拄杖子と問はば、是れ筋斗を打すること莫し麼、是れ掌を撫して一下すること莫し麼。總に是れ精魂を弄す。且喜すらくば沒交涉。雪竇頌して云く」と、玆に至つて、「如何なるか是れ拄杖子」と問ふた處が、ナンの役にも立たぬ。是れ死にランゴウな、無駄骨を折ると云ふものぢや。向の上の大事とは沒交涉ぢや。サ一雪竇の頌を看よ。

拄杖子吞乾坤 ○道什麼 ○只用打狗 徒說桃花浪奔 ○撥開向上一
 竅千聖齊立下風 ○也不在拏雲攫霧處 ○說得千徧萬徧不如手脚羅籠一徧 燒尾

者不在拏雲攫霧 ○左之右之 ○老僧只管看 ○也只是箇乾柴片 曝腮者
 何必喪膽亡魂 ○人人氣宇如玉 ○自是徧千里萬里 ○爭奈悚然 拈了也

○謝慈悲 ○老婆心切 聞不聞 ○不免落草 ○用問作什麼 直須灑灑落落
 ○殘羹餽飯 ○乾坤大地甚處得來 休更紛紛紜紜 ○舉令者先犯 ○相次到徧

頭上 ○打云放過則不可 七十二棒且輕恕 ○山僧不曾行此令 ○據令而行 ○
 賴值得山僧 一百五十難放君 ○正令當行 ○豈可只恁麼了 ○直饒朝打三千
 暮打八百塔作什麼 師驀拈拄杖下座大衆一時走散 ○雪竇龍頭蛇尾
 作什麼

【和訓】 拄杖子乾坤を吞む。(○什麼と道ふぞ。○只だ用ひて狗を打たん。徒に説く桃花の浪に奔ると。(○向上一の竅を撥開すれば、千聖も齊しく下風に立つ。○也た雲を拏ひ霧を攫む處に在らず。○説き得て千徧萬徧せんより、如かず、手脚羅籠、一徧せんには。) 尾を焼く者は雲を拏ひ霧を攫むに在らず。(○左之右之。○老僧只管看る。○也た只だ是れ一箇の乾柴片。腮を曝す者も何んぞ必らずしも腕を喪し魂を亡せん。(○人人氣宇玉の如し。○自らは是れ徧千里萬里。○爭奈せん悚然たることを。) 拈了也。(○慈悲を謝す。○老婆心切。聞くや問かずや。(○免れず草に落つることを。○問を用ひて什麼か作さん。) 直に須らく灑灑落落たるべし。(○殘羹餽飯。○乾坤大地甚れの處よりか得來る。) 更に紛紛紜紜たることを休めよ。

○命を堪ふる者、先づ犯す。○相次に個が頭上に到らん。○打つて云く、放過せば不可。七十二棒月らく輕恕す。○山僧會つて此の命を行せず。○命に據つて行す。○觀に山僧に備ひ得たり。○正合當行。○豈に只だ恁麼に了す可けんや。○直徳ひ朝打三千棒打八百なるも、什麼を作すにか堪へん。○師、藥に拄杖を拈じて下座。大衆一時に走散せよ。○雪竇、龍頭蛇尾にして什麼か作さん。

【提唱】

○コレから雪竇の頌ぢや。

「拄杖子乾坤を呑む」と、是れ雲門の向上の宗旨、コノ一句の中に收められた。必らず呑んだことでも、吐いたことでもない。サ一此の「拄杖子乾坤を呑む」には、縦ひ舊參の上士と雖も、ナカナカ届くものぢやない。其の光明、面門を射却する當體を頌したものを、世間往々に、頌は本則より向上なる處を頌したなどと云ふは没交渉ぢや。雪竇、「龍に化して」の二字を除いたのは、雲門中興の祖程あつて、能く先祖の腹中を呑み込んで頌したものぢや。

「徒に説く挑花の浪に奔ると」、拄杖子のことでもない、龍のことでもない。又た吐いたことでも、呑んだことでもないのに、ソレを徒に強いて、龍と爲つて雲を起すなどと説く。皆は是れ一場の閑夢境ぢや。雲門大師の hands、若し良公、欽山の手足に比せば、大いに遠いことが在るぞ。

「尾を焼く者は雲を拏ひ霧を攫ひに在らず」と、向上に看來ればサ、雷火に尾を焼く化龍は、三汲を透得する底の活龍ではないぞ。況んや、腮を曝し、點頭して歸る者をやぢや。是れ腮、魂を喪する底ではない。一回膽を喪し魂を斷し、大死一番して始めて得るであらうぞ。縦ひ大悟の者でも、コノ雲門の語は合點がいかに。

「腮を曝す者も何んぞ必らずしも腮を喪し魂を亡せん」と、浪に打たれて腮を曝しても本當ではない、大死底ではない。三級透得底にすらいけぬものを、初心菩薩の呑込みには、ドウして〜！

「拈了也」と、従前の實を惜むな。「挑花の浪」や、何や彼やを引つ片付けろ。

「聞くや聞かずや」と、コノ句中、些子有りぢや。雲門の示衆を呑んだかドウか。

「直に須らく灑灑落落たるべし」と、能く聞き得たらばサ、一物をも立せず、氣散してあらう。

「更に紛紛紜紜たることを休めよ」と、サ一彼様ぢや斯様ぢやと、いろ〜と邪解せまいぞ。

「七十二棒且らく輕恕す」と、是れ「碧巖」中の牢關ぢや。コノ頌は、雲門の示衆より酷いぞ、見損ふナ。旨い處は茲に有る〜。洒洒落落の處に住するも七十二棒與へん、ソレでも未だ十分ぢやない。又た洒洒落落の處に住ぜずんば、百五十棒ぢやぞ。已下は雪竇が籠の尻をフンマケテ云ふたぢや。「且らく輕恕す」とは、尙ほ是れ輕少なりと云ふ義ぢや。

「一百五十君に放し難し」と、コノ句が合點行けば、拄杖子の話も合點行くぞ。「君に放し難し」とは、一も減す可からずと云ふ義ぢや。

「師、暮に拄杖を拈じて下座。大衆一時に走散せよ」と、雪竇の一頷、此に到つて全提ぢや。三文の寶引に、三萬兩のフندوقを付けたやうナ。前箭は猶ほ軽く、後箭は深しぢや。「大衆一時に走散せよ」とは、ハチ變つたフンマケやうぞ。コレも雪竇が自ら書いて置いた。

コレから圓悟の著語ぢやが、コノ著語は皆な好くない。南天棒は取らぬ。

「拄杖子吞乾坤」——「什麼と道ふぞ」。「乾坤を吞む」とは何事ぞと。「只だ用ひて狗を打たん」、ソノ拄杖子を持つて来い。圓悟、我れは狗を打たう。

「徒説桃花浪奔」——「向上の一竅を撥開すれば、千聖齊しく下風に立つ」、雪竇、直に拄杖子が乾坤を吞むと云ふたは大いに向上よ。コレには如何な智者も高僧も頭は上らぬ。「也た雲を拈ひ霧を擡ひ處に在らず」、化龍なると云ふ沙汰はないと、化龍を抑下したぢや。「説き得て千徧萬徧せんより、如かず、手脚羅籠一徧せんには」、化龍など、云はうより、拄杖子の話を手に入れて、握り占めて居る。

「燒尾者不在拏雲樓霧」——「左之右之」、不可不可。「老僧只管看る」、龍に化しても化さなくても、コノ拄杖子をば、圓悟常に看て居るぞ。「也た只だ是れ一箇の乾柴片」、尾を燒く化龍と云ふても、只だ雲門の拄杖子ぢや。何んでもないものぢや。

「曝露者何必喪膽亡魂」——「人人氣宇王の如し」、人人具足の佛性は、燒いても焚けない、ナン

の喪亡とか説かうや。「自らはれ爾、千里萬里」、争何せん悚然たることを、「人人の氣宇、王の如くぢやけれども、自ら下劣になつて、千萬里を隔てるのがいとしい。

「拈了也」——「慈悲を謝す」、「老婆心切」、實にハヤ、御親切忝う御座る。

「聞不聞」——「免れず草に落つることを」、聞不聞共に落草ぢや。「聞を用ひて什麼か作さん」、一物不立ぢやものを、聞いて何んにするぞ。

「直須灑灑落落」——「殘羹餽飯」、洒洒落落と云ふも悪し。扱々びさくしむわい。「乾坤大地甚れの處、りか得來る」、洒洒落落の時、乾坤大地は何處にあるや。

「休面紛紛紅粧」——「令を擧する者、先づ犯す」、雪竇、貴様から先に紛紛など、云ふてはなしか。措いて呉れ。「相次に爾か頭上に到らん」、直に圓悟の棒が貴様の頭上に在るぞ。「打つて云く、放過せば不可」、「紛紛」などは届かぬ。雪竇め、放してはならぬ奴ぢや。

「七十二棒且輕恕」——「山僧曾つて此の令を行せず」、己は腕が病めて、打つことは可厭ぢや。「令に據つて行す」、打つ程ならば、掟通りに打たう。「頼に山僧に値ひ得たも」、己が棒の手を見せぬぢやなすだ。

「一百五十難放君」——「正令當行」、掟通り取り行へと。コノ下語は間違ひて居る。「豈に只だ徳慶に了す可けんや」、ソナナことで済むものか。又た今會つては、ゆるい。直繞ひ朝打三千、暮

打八百するも、什麼を作すにか堪へん、如何程打つても、皮下に血のない奴は何んとせうぞ。
「師慕拈拄杖下座大眾一時走散」——「雪竇、龍頭蛇尾にして什麼か作さん」、コノ著語は大錯了也ぢや。コレで打つ破した。

雲門委曲爲人雪竇截徑爲人所以撥却化爲龍不消恁麼道只是拄杖子吞乾坤雪竇大意
免人情解更道徒說桃花浪奔更不必化爲龍也蓋禹門有三級浪每至三月桃花浪漲魚能
逆水而躍過浪者即化爲龍雪竇道縱化爲龍亦是徒說燒尾者不在拈雲擡霧魚過禹門自
有天火燒其尾拈雲擡霧而去雪竇意道縱化爲龍亦不在拈雲擡霧也曝腮者何必喪膽亡
魂清凉疏序云積行菩薩尙乃曝腮於龍門大意明華嚴境界非小德小智之所造詣猶如魚
過龍門透不過者點額而回因於死水沙磧中曝其腮也雪竇意道既點額而回必喪膽亡魂
拈了也聞不聞重下注脚一時與爾掃蕩了也諸人直須灑灑落落去休更紛紛紜紜若更
紛紛紜紜失却拄杖子了也七十二棒且輕恕雪竇爲爾捨重從輕古人道七十二棒翻成一
百五十如今人錯會却只算數目合是七十五棒爲什麼却只七十二棒殊不知古人意在言
外所以道此事不在言句中免後人去穿鑿雪竇所以引用直鏡眞箇灑灑落落正好與爾七
十二棒猶是輕恕直鏡總不如此一百五十難放君一時頌了也却更拈拄杖重重相爲雖然

恁麼也無一箇皮下有血

佛果圓悟禪師碧巖集卷第六終

【和訓】雲門は委曲に人の爲めにす、雪竇は截徑に人の爲めにす。所以に化して龍と爲ることを撥却して、恁麼に道ふことを消せず。只だ是れ、拄杖子化して乾坤を呑むと。雪竇の大意、人の情解を免る。更に道ふ、徒に説く桃花の浪に奔ると。更に必ずしも化して龍と爲らず。蓋し禹門に三級の浪有り、三月に至る毎に、桃花の浪漲る。魚能く水に逆つて、躍つて浪を過ぐる者は、即ち化して龍と爲る。雪竇道く、縱ひ化して龍と爲るも、亦た是れ徒に説く、尾を燒く者は雲を拈ひ霧を擡むに在らずと。魚、禹門を過ぐれば、自ら天火有り、其の尾を燒いて、雲を拈ひ霧を擡んで去る。雪竇の意に道く、縱ひ化して龍と爲るも、亦た雲を拈ひ霧を擡むに在らず。腮を曝す者も何んぞ必ずしも腮を喪し魂を亡せんと。清凉の疏の序に云く、積行の菩薩、尙ほ乃ち腮を龍門に曝すと。大意、華嚴の境界、小徳小智の造詣する處に非らず。猶ほ魚、龍門を過ぐるに、透り過ぎざる者は點額して回り、死水沙磧の中に困して、其の腮を曝すが如きことを明す。雪竇の意に道く、既に點額して回る、必ずしも腮を喪し魂を亡せんと。拈了也、聞かずやと。重ねて注脚を下して、一時に爾が爲めに掃蕩したれり。諸人直に須らく灑灑落落にし去るべし。更に紛紛紜紜たることを休めよ。爾若し更に紛紛紜紜たらば、拄杖子を失却したらん。七十二棒且らく輕恕すと。雪竇、爾が爲めに重を捨て、輕に従ふ。古人道く、七十二棒擡つて一百五十と成ると。如今の人錯つて會して、却つて只だ數目を算す、是れ七十五棒なる合し。什麼と爲てか却つて只だ七十二棒なると。殊に知らず、古人の意、言外に在ることを。所以に道ふ、此事、言句の中に在らずと。後人の去つて穿鑿することを免る。雪竇所以に引き用ふ。直鏡眞箇灑灑落落たるも、正に好し、爾に七十二棒を擡ふるに。猶ほ是れ輕恕す。直鏡ひ總に此の如くならざるも、一百五十君に放し難しと。一時に頌了れり。却つて更に拄杖を拈じて、重重相ひ爲めにす。然も恁麼なりと雖も、也た一箇も皮下に血の有る無し。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢや。コノ評も不可ぬ、火後の添入か。取らぬ方が好いが、今更無理に
 數十字を削つて用ひることにする。ぢやから悉しく云ふこともない、ザツと讀んで置かう。雲門は
 委曲に人の爲めにす。雪竇は截徑に人の爲めにす」と、ドコが「委曲」ぢやナ。廻り遠くとはドコ
 のことぢや。コノ示衆、獅子の乳の如きものをサ。併し今更扶けて之れを道へば、雲門は長句を須
 ひ、雪竇は短句を須ひると云ふ義か。「所以に化して龍と爲ることを撥却して、恁麼に道ふことを消
 せず」と、コノ評は合點がいかに、コノ十二字は削るが好い。只だ是れ、拄杖子化して乾坤を吞む
 と、ソレから次ぎの、「雪竇の大意、人の情解を免る」と、コノ八字も削る可し。「更に道ふ、徒に
 説く桃花の浪に奔ると」、又た、「更に必らずしも化して龍と爲らず」と、コノ七字も削るが好い。
 「蓋し禹門に三級の浪有り、三月に至る毎に、桃花の浪漲る。魚能く水に逆つて、躍つて浪を過ぐる
 者は、即ち化して龍と爲る。雪竇道く、縦ひ化して龍と爲るも、亦た是れ徒に説く、尾を焼く者は
 雲を拏ひ霧を攫むに在らずと」、尾を焼かれては粉微塵ぢや。「魚禹門を過れば、自ら天火有り、其
 の尾を焼いて、雲を拏ひ霧を攫んで去る。雪竇の意に道く、縦ひ化して龍と爲るも、亦た雲を拏ひ
 霧を攫むに在らず。腮を曝す者も何んを必らずしも膽を喪し魂を亡せんと」、雲を拏ひ霧を攫むもの

も、眞の活龍ではない。況んや腮を曝す者をや。コノ「必」の字の上に「不」を置いて見るが好い。
 「清涼の疏の序に云く、積行の菩薩、尙ほ乃ち腮を龍門に曝すと」、清涼澄觀國師の「華嚴大疏」
 の序にはカウ有る。「若し夫れ高うして仰く可からざる則んば、積行の菩薩、腮を龍門に曝し、深
 うして窺ふ可からざる則んば、上徳の聲聞、視聽を嘉會に杜ぐ」と。コレはサ、「大意、華嚴の境
 界、小徳小智の造詣する處に非らず。猶ほ魚、龍門を過ぐるに、透り得ざる者は點額して回り、死
 水沙磧の中に困して、其の腮を曝すが如きことを明す」と、サ、「華嚴の境界」とは何んぢやナ。
 山河大地、引ッ括めて、諸佛の全體ぢや。「雪竇の意に道く、既に點額して回る、必らずしも腮を喪
 し魂を亡せんと」、龍門を登る者でも、コノ則に出逢ふては點額して回るぢやらう。「拈了也、聞く
 や聞かずやと。重ねて注脚を下して、一時に備が爲めに掃蕩し了れり。諸人直に須らく灑灑落落に
 し去るべし。更に紛紛紜紜たることを休めよ」と、次ぎの、「爾若し更に紛紛紜紜ならば、拄杖子を
 失却し了らん」と、コノ十四字も削る方が好い。「七十二棒且らく輕恕すと。雪竇、備が爲めに、重
 を捨て、輕に従ふ」と、カウ云ふては不是不是。「古人道く、七十二棒翻つて一百五十と成ると」、
 コレは「祖庭事苑」に出て居る。二卷に曰く、「雲門（懷禪）擧す。雪峯云く、我れ且らく死馬醫、
 一口に乾坤を吞盡す。師（雲門）曰く、山河大地何處より可得來る。直饒ひ這裏個箇も分明なるも、
 特舎兒の七十棒、反つて一百四十と成る」と。コレを引いて來たのぢや。「如今の人錯つて會して、

却つて只だ數目を算す。是れ七十五棒なる合し。什麼と爲てか却つて只だ七十二棒なると。殊に知らず、古人の意、言外に在ることを。所以に道ふ、此の事、言句の中に在らずと、或る程ナ。「後人の去つて穿鑿することを免る。雪竇所以に引き用ふ。直饒ひ眞箇灑灑落落たるも、正に好し、偏に七十二棒を與ふるに。猶ほ是れ輕恕す。直饒ひ總に此の如くならざるも、一百五十君に放し難し」と、コノ中で、「正好與備」の四字、「直饒總不如此」の六字は削るが好い。カウしたことはないぞ。「一時に頷し了れり。却つて更に拄杖を拈じて、重重相ひ爲めにす。然も恁麼なりと雖も、也た一箇も皮下に血の有る無し」と、嗚呼雲門大師、知音稀れなりぢや。

「佛果圓悟禪師碧巖集、卷の第六終り」と、六卷はコレで終つた。

【註】「點化」轉じ化する事。「法華の窮子」客作兒と同意。「伊達品」みえにすること。「如來の三明六通」三明とは、阿羅漢果の聖者が具する三種の智明。一に宿在智證明(過去に通達す)、二に死生智證明(未來に通達す)、三に漏盡智證明(現在に通達す)を云ふ。六通とは六神通の略にして、一に天眼通、二に天耳通、三に他心通、四に宿命通、五に神足通、六に漏盡通を云ふ。「筋斗を打す云々」しなくとも好い、無駄なことをする意。「寶引」福引のこと。「フンドウ」寶引のフンドウ、即ち福引の景品を云ふ。

提唱碧巖集中卷終

大正八年七月二十二日印刷
大正八年八月九日發行

提唱碧巖集中卷
定價金四圓五拾錢



著者 中原鄧州
校正者 平松亮卿
發行者 東京市日本橋區數寄屋町一番地 濱井松之助
印刷者 東京市京橋區西紺屋町二十七番地 石川金太郎

秀英會印刷

發兌

大阪屋號書店

東京市日本橋區數寄屋町一番地

電話東京一三三七五番
電話本局四二八九番

看よ！日蓮聖人獨創の法華經觀

日蓮宗大學講師 清水龍山先生新著

天台日蓮 法華經要義

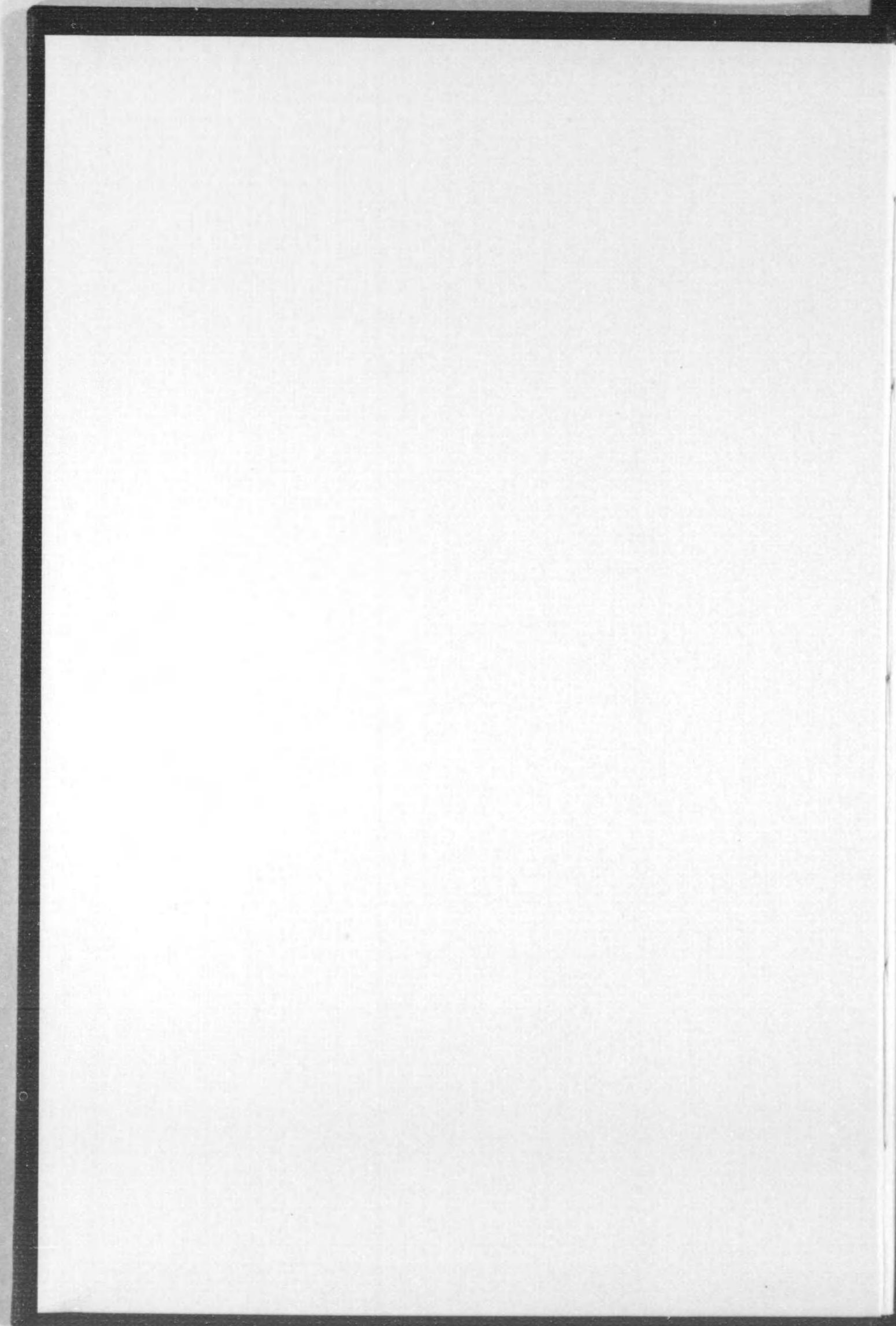
總判六百萬頁
菊入美本
兩部九拾六錢
定價四拾九錢
送料金十六錢

要概次目

緒言、本論
 第一懸譚、部類不同一六課三存一分支流類一調卷不同一解釋得失、三國傳弘一諸種三分一處處三會一略釋總
 題一品々大意
 第二正説一本述二門及其名義一述門開權顯實一正明一諸疑斥謬一本門開述顯本一門交涉及開顯の大意一顯
 第三結論一日本述一親支那一聖天子一講師一七餘家一光宅一天台一密教一神念一要法一三秘一慈心一法華一觀
 立正觀鈔の大意一日本述一親支那一聖天子一講師一七餘家一光宅一天台一密教一神念一要法一三秘一慈心一法華一觀
 日蓮聖人の學說の由來一就て(富田海音氏)
 境野氏の學說の一節に就て(富田海音氏)
 本論一吾祖の學說の語義の研究の動機及び意趣一日本天台と吾祖の學系一日本天台の本覺法門本宗教義研
 究、日本天台の本覺法門の概評(以下略)

看よ！三國古今の法華經觀

發兌 東振 京東 日本 橋本 數三 寄七 屋番 大 號



終

